
或る「悪人」の幸福

北川瑞山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る「悪人」の幸福

【NZコード】

N8279X

【作者名】

北川瑞山

【あらすじ】

和哉は善人だった。同時に悪人だった。「悪人」とは何か?それに気付いたとき、和哉は死の選択を迫られる。内気な青年の成長を描いた長編。

春に寄り添う人は数知れない。春はあらゆる幸福の象徴であった。その年の春、和哉は大学に進学した。東京の山手線沿いにある大学で、繁華街からほど近い。田舎から上京してきたばかりの和哉は、春という季節柄も手伝つて、一等はしゃいだ気持ちであった。桜並木を通り抜けるたび、「俺は東京に来たんだ」「俺もついに大学生になつたんだ」という喜びを反芻していた。

全くの新天地で一人暮らしを始めた和哉は今、孤独である。だがそれは何物にも代え難い孤独であった。人生の第二章というべき新たな幕が今、開かれた。その全ての原点に、自分は今立つている。全てがここから始まるが故の孤独であった。今までのカビ臭い思い出から解き放たれ、全てをやり直すことのできる自由。そんな瞬間を、和哉は心から待つていた。

和哉には、以前の自分を捨てたくなるような暗い過去がある訳ではない。無論、人生に辛いことは付きものであるから、些細なことをあげればきりがない。まして和哉は世を渡つていく術に関して全く器用な方ではないから、なおのこと生き辛い人生ではあった。だが持ち前の真面目さで苦難を乗り切り、いつも大概はなんとかなってきたのである。そんな不器用でも実直な生き方が、今報われようとしている。和哉にはそう思われた。だからこそ今までとは違った生き方を、和哉は強く望んでいたのである。

和哉の実家は、石川県の輪島市にある。日本海に面した町で、和哉は少年時代の多くをここで過ごした。もつとも、幼少期においては輪島で過ごした記憶が和哉には殆どない。和哉の父親は銀行マンであり、転勤が一、三年に一度というペースであつたため、一家はその度に日本中のあちこちに住まいを移さなければならなかつた。それが和哉が中学に入ったあたりで、一家は父親の故郷である輪島に一軒家を構えた。それ以降も父親の転勤は続いたが、単身赴任と

いう形で、和哉を含めその家族を輪島に残し、父親のみが移動する形態をとった。よつて和哉は中学、高校時代を輪島で過ごしたことになる。幼少期の度重なる移動のためか、和哉は愛郷心というものが薄い。土地に対する愛着よりもむしろ、その土地の風土や人柄、利便性といったものを重視した。加えて和哉は田舎が嫌いであった。皆が均質な価値観の中で暮らす、いわゆる「ムラ社会」に、何とも形容しがたい閉塞感を抱いていたのである。和哉が東京に出てきたのにはそういう背景があった。東京でなら互いの感性を分かち合えるような仲間に出会えるような気がしていただのである。

両親は、和哉が東京の大学に進学することに協力的であった。和哉の両親は「思ったことは何でもやってみろ」という奔放な教育方針の持ち主であつたし、和哉の父親は今や大銀行の幹部という立場にあつたため、経済的な負担に対する懸念がさほどなかつたのである。加えて和哉は、高校を卒業してから大学に入学するまでの間に一年の浪人期間を経ている。高校での和哉の成績は優秀であったが、何せ田舎の高校であり、特別進学校という訳でもなかつたから、ストレートで東京の大学に入るには少しばかり偏差値が足りなかつたのである。そうまでしても、和哉の両親は息子の意向を快く受け入れ、惜しみない支援をした。和哉はそんな両親に深く感謝をしつつ、高校卒業後の一 年後に、無事東京の大学に合格し、入学したのである。

大学に入学して早々、和哉にはやるべきことがあつた。それは共通の趣味を持つ仲間を見つけることであつた。和哉には音楽の趣味があつた。それが和哉の場合、趣味という範疇を超えて唯一の生き甲斐になつていた。和哉は幼い頃からピアノやギターといった楽器に触れていたし、また日頃から様々な音楽を聞くことで、感性を磨いてきたつもりである。ただ、故郷にはそれを分かち合う仲間がいなかつた。ピアノをやっている男などは、おおよそ少女趣味だとか言われて、集団から遠ざけられるようなところである。仲間同士でバンドを組んだり、価値観を共有するなどといふことは望むべくも

なかつた。そうした故郷で叶わなかつた夢を実現させることが、実は和哉が東京に来たことの第一の目的である。

（早く同志を見つけなければ…）

和哉は内心焦つていた。大学内の音楽系のサークルを覗いてみたりもした。ただどこも暇を持て余した学生が時間を潰すために集まつた、馴れ合いの集団の様にしか思えなかつた。それは和哉の求めているものと違つた。自分はもつと真剣に音楽をやりたい。学生の馴れ合いでは困るのだ。それともう一つ、和哉は元々集団の中での人間関係というものが苦手であつた。群れることが元来嫌いなたちであつたし、それ以上に人間が集まるところには、必ずと言つていいほど先輩やキーマンに取り入つたり、派閥を作つたりというような面倒な人間関係が存在する。そういう中での権謀術数の類いを、和哉は生理的に受け付けないとこがあつた。頭ではわかつていても、どうもその波に乗る気にはなれない。元来芸術家などの孤高のプライドを持つ者はそんな人間が多いらしいが、ひょつとすると和哉もそんなタイプの人間だつたのかもしれない。そんな訳で、和哉は仲間が欲しいと思いながらも、サークルなどの集団に入ることを躊躇したのである。

そうこうしているうちに、入学した日から一ヶ月が過ぎてしまつた。東京の生活にも慣れだし、アルバイトも決まつた。退屈極まりない大学の授業にも、今のところ出席している。だが肝心の音楽仲間を見つける手段がない。

（何か良い手立てはないものか）

これでは故郷にいた時と何も変わらない。いや、故郷には友人が少なからずいたが、まだ東京にきてから友人の一人さえできていない。なんだか故郷にいた時よりも一人でいる時間が増えたようである。もつとも和哉は一人でいることにはあまり苦痛を感じない人間である。一人でいることはむしろ好きであるが、かといっていつまでも一人でいては東京に来た甲斐がない。

いつものようにざわついた大学の構内を一人で歩いていると、掲

示板のビラが目についた。見てみると、和哉が一度見学に行つたこともある、バンド系サークルのライブの告知であった。ライブは今度の日曜、大学内のホールを借りて開かれるらしい。ちょうどその日はアルバイトもなく、一日予定がなかつた。

（まあ入部はしなくても、とりあえずどんなものか見にだけ行ってみるか）

大して期待もしていなかつたが、和哉は休日の予定を決めた。

日曜日、よく晴れていた。和哉の住んでいるアパートから大学まで自転車で十分ほどの距離であった。ライブは午前十時から始まる。和哉は身支度を整え、すぐさま家を出た。大学まで自転車を飛ばす。五月にしては少し暑いくらいの陽気である。が、青空とそよぐ風が心地よい。大学に着くと、すっかり葉桜に変わった桜並木を通り抜け、ベンチのある広場へ向かつた。日曜のためか、大学の構内は平日と打って変わつて伽藍として、広場の中央にあるベンチだけが白く光つていた。人気のない大学構内は静寂に包まれて、木漏れ日に鳥のさえずりが響いている。まだライブの始まる予定時刻よりも二十分も前である。和哉はベンチへ腰掛け、自動販売機で買った缶コーヒーを飲みながら、開場を待つた。

ふと気づくと、和哉の隣に男が一人、座っていた。大学生らしいラフな出で立ちで、見た目は何とも大人しそうな感じのする男である。同じライブの開場待ちをしているのだろうか。この時間にここにいるなら、きっとそうに違いない。向こうも一人なら、声をかけてみようかと、和哉は考えた。が、日頃無口なこの男は、その一声がなかなか出てこない。その時、思いがけず隣の男から声をかけられた。

「君もライブを見に来たの？」

不意をつかれて、一瞬和哉は何と返答すれば良いか考えてしまった。

「うん。バンドやりたくて。ここサークルに入ろうか、迷つてることなんだ。」

無論サークルに入るつもりは、和哉には毛頭なかつたが、そう体裁を繕つた。

「どうか。じゃあ俺と同じだね。学部は？」

「経済学部だよ」

「いや、これは驚いた。学部も一緒じゃないか。東京の人？」

「いや、出身は石川県だ。君は？」

「俺はもつづつと東京さ。高円寺の方に住んでる。俺は河野雄一つ

てんだ。よろしくな」

「俺は平野和哉だ。よろしく」

二人はそれから、音楽のこと、地元の友人のこと、学部の授業のことなどを取り留めもなく話し込んだ。二人は今までの音楽遍歴が驚くほど似通つており、すぐさま意気投合した。ちなみに雄一のパートはベースだそうだ。雄一は一見大人しそうに見えたけれども、話し振りからしていかにも利発で、頭の回転が早く、そのくせ口調が穏やかで話をしやすいタイプであった。東京人とはこのようなものかと、和哉は思った。

かれこれ二人が話を始めてから一時間は経つ。とっくにライブの開始予定期刻は過ぎているが、依然としてライブは始まる様子がない。準備に時間がかかっているのであろうか。それにしては部員と見られる連中が外で呑気にタバコをふかしながら談笑しているが、どうなのだろうか。和哉は若干躊躇つた。

ようやくライブが開始したのは、予定期刻を一時間半も過ぎてからのことであった。和哉と雄一は、やつとのことでホールに入ることができた。ライブの内容についてはあまり詳しく述べる必要もない。演奏自体はそこそこ聴けるレベルではあったものの、一曲演奏する毎に演奏するメンバーが入れ替わり、次のメンバーがスタンバイをする。おおよそ5分演奏して10分スタンバイといった具合である。スタンバイの間、観客はただ暗闇の中無音のまま待たなければならない。実に無駄な時間である。おまけにMCで話す内容は全て内輪ネタであり、観客にはさっぱり意味が分からぬ。和哉の思つた通り、所詮は学生の馴れ合いである。和哉の嫌う「ムラ社会」の匂いが、場内にこれでもかと漂つていた。和哉は一刻も早くこの空間から脱出したかった。だが隣にいる雄一に気兼ねして、席を立つタイミングを計りかねた。一人がようやくホールを出たのは、昼食の時間になつてからである。和哉と雄一はホールを出て、学生食

堂の方へ歩いていった。学生食堂では多くの学生がテーブルを囲んで、談笑したり、ボールペンを片手に何か真剣に話し込んでいたりする。こうした学生たちの姿は、和哉が「大学生」という存在に抱いていたイメージと最も近い。和哉と雄一はそれぞれの昼食を手に取り、他の学生がしているのと同じように対座した。ここまで二人とも無言であったが、昼食を口にしながら、最初に口を開いたのは和哉であった。

「いや、良いライブだつたと思うよ。スタンバイの待ち時間が長かつたのは気になつたけど、演奏も上手かつたし、部員も面白そな人たちじゃないかな」

もちろん和哉にとつては心にもないことだつたが、そう最初に言わなければ、何か気まずいことになりそうな気がしたのである。そういう空気を察したのか、雄一も儀礼的な口調で答える。

「うん、演奏は上手かつたよね。スタンバイはまあ、しょうがないんじゃないのかな。あれだけの人数の部員がいたらさ」

しかし会話はここで止まってしまう。黙々と昼食を口に運びながら、和哉はどうやって事の核心に触れればよいか、考えあぐねていた。食事中、終始無言でも困るので、和哉はどうあえず当たり障りのない事を話しだした。

「ここの後、ライブの午後の部だけ、どうする？見ていく？」

「どうするかな。大体の雰囲気もつかめだし、最後まで見る必要はないかと思うんだけど。まあ平野君が見ていくなら、俺も付き合つよ」

と、雄一の返答は曖昧である。しかし、和哉はどうした事か、ここで一気に自分の気持ちを伝えなければ、という心情になつた。雄一の返答の中に、彼が自分と同じ感情を抱いているのではないかという感触を微かに感じたからかどうか。

「正直に言つとね、俺はなかなかあそこのサークルで上手くやつていいける気がしないんだ。方向性が違うんだと思う。俺は音楽をやりたいがために東京に出てきたようなもんだし、やるならとことん打

ち込んでみたいんだ。音楽にね。もちろん音楽をするには仲間は必要だよ。ただ仲間との馴れ合いの中で、自分の目指す方向性を見失いたくはないんだ」

と、和哉は言い終えた後、語気が強すぎはしなかつたか、誤解のないように伝わったか、心配した。今日出会つたばかりの人には、ともすると「お前とは仲良くする気はない」と捉えられかねない発言であつたかもしだい。しかしそういった和哉の心配をよそに、雄一は大きく頷いて言った。

「分かるよ、その気持ち。やつぱりさ、大学のサークルでなんてやつてたつて、単なる仲良しクラブで終わりそうな気はするな。どうせ三年生になつて引退すると就職活動が待つていて、そういうしているうちに音楽やつてた事なんてすっかり忘れてるんだ。先が知れてるよ。学生時代の良き思い出作りならそれでいいかも知れないけどな。そうじやないんだよな」

和哉はそこで初めて確信した。雄一は自分と同じ思いを抱いている。ならばいっその事この人と一緒に音楽をやつていけはしないだろうかという新たな考えが、頭をよぎつた。和哉は一つの提案をした。

「なあ、それだつたら一緒にメンバーを探して、大学の外でバンドをやらないか。お互いそのほうがいいと思うんだ」

考えてみれば、今日知り合つたばかりの人に、気の早すぎる提案かとも思われた。確かに和哉にそれほどの気の焦りがあつたことには相違ない。しかしそれ以上に、この人とならやつていけそうだとう確信めいたものが、和哉にはあつた。それほどまでに雄一は音楽に対する考え方も、音楽の趣味も自分と近かつたのである。雄一は少し考えるようなそぶりを見せつつ、こう言った。

「それなら、俺の高校時代の先輩が近々ライブやるんだけど、一緒に行く? その先輩結構顔広いから、もしかしたらメンバーを紹介してくれるかもよ」

もちろん、和哉にとつては願つてもない話である。そういうた人間関係の数珠繫ぎが苦手な和哉にとつては相当に勇気のいることであ

つたが、ここで確かに一步を踏み出したかつた。

「それはありがたい。是非行かせてもらいたい」

それから一人は連絡先を交換し、サークルの午後のライブには行かず、そのまま食堂で無駄話をしつつ、夕方ごろに別れた。雄一の先輩のライブについて、詳細がメールで和哉に送られてきたのは、それから数日後のことである。場所は高円寺駅にほど近いライブハウスであり、六月第一週目の土曜日、午後五時開演とのことであつた。

ライブ当日、和哉は地図を頼りにJR高円寺駅から、会場となるライブハウスへ向かつた。駅からライブハウスまでは徒歩で五分もあれば着くような距離であったが、街並が雑然としている上、目立たないところにあるためなかなか見つけられなかつた。どこにでもあるマンションのような建物の横に、地下に通じる階段が設けられており、そこを降りるとやつとライブハウスのエントランスと思しきネオンが確認できるのである。和哉は扉を開き、ネオンをくぐり抜けて中に入った。ドリンク代の五百円を払つて中に入ったのはいいが、ライブハウスの中は全くの暗闇で、人も多いため、なかなか雄一の姿を見つけだすことができなかつた。暗い人混みの中に一人でいるのは不安なものである。暗闇に目が慣れてきたころ、和哉は壁にもたれてドリンクをすすつている雄一を見つけた。雄一はどことなく場慣れしているようで、余裕があるように見える。和哉は雄一に声をかけた。

「先輩はいつ出るの？」

「トリだから、七時にはなるだろうね。まあそれまで他のバンドの演奏を見るのも悪くないよ」

それから一時間半ほど、二人は入れ替わり立ち替わりのバンドの演奏を見ていた。色々と批評した。あれはドラムが目立ちすぎているだの、ギターの音色が少し違つていてるだのといったことである。

雄一の先輩がステージに姿を見せたのは、七時半頃のことである。雄一が和哉の耳元で囁いた。

「ほら、あのヴォーカルの人だよ。松本さんっていうんだけどね見るとステージ上には、背丈が180センチはあるうかという偉丈夫が立つっていた。体つきががつちりしていて、一見強面である。

バンドは古めかしいハードロックを演奏していたが、楽器隊の演奏

が上手く、何よりヴォーカルの存在感、歌唱力で、会場をあつとう間に熱気の渦に引きずり込んだ。バンドは五、六曲を演奏したはずだが、今までの出演バンドに比べるとじく短時間に感じられた。それほどに和哉も夢中で見ていた。

演奏が終わった後、会場の熱気冷めやらぬうちに、控室から出でくる松本を雄一が待ち構えていた。

「お疲れ様です。松本さん、今日のライブ最高でしたよ」

「ありがとうございます。悪いね、いつも来てもらつて」

と、松本は顔の汗を拭きながら、屈託のない笑顔で答えた。松本は一見強面に見えたが、一旦ステージを降りると常に笑顔を絶やさぬ人で、実に穏やかな口調である。和哉は内心、ほつとしていた。雄一が松本に和哉を紹介する。

「実は今日、大学の友人と一緒に来ていまして、それがここにいる彼なんですが、平野君といいます」

「平野和哉とあります。よろしくお願ひします。ライブ拝見しましたが、感動しました」

和哉は眞面目な面持ちで挨拶をした。

「ははは、ありがとうございます。今日は良く来てくれたね。俺松本つていいます。雄一と高校が一緒だつたんだ。雄一より二つ上か」

和哉の緊張を和らげるよう、松本は優しい口調で和哉に接してくれた。ちなみに雄一は現役で大学に入学しているので、雄一より二つ上という事は一浪の和哉より一つ上ということになる。歳が一つ違うだけで、こんなにも風格が違うものかと、和哉は自分の子供っぽさを恥じていた。

和哉はこれまで、目上の人間を慕つた経験が殆どなかつた。学校の教師は全く好きになれた試しがなかつたし、運動部の先輩などはもつてのほかである。ちょっと先に生まれたくらいの話で、「人生の先輩」面をする人間を、和哉は軽蔑すらしていた。和哉は大人しそうな外見と眞面目な性格を持ちながら、それでいて反骨精神の人一倍強いところがあるらしい。和哉が人間関係を苦手とする原因は、

こういったところにあるのかもしれない。ともかく、そんな和哉でも松本を受け入れるのにそう時間はかからなかつた。

雄一は松本と一言二言の会話をした後、さりげなく本題に入つた。
雄一は松本に事の顛末を説明し、どうにかバンドのメンバーを集められないか、あるいは自分たちのパートのメンバーを募集しているバンドがないか、相談を持ちかけた。和哉にしてみれば、初対面の人にいきなりこんな相談をする事がひどく不躾なようと思えたけれども、松本は嫌な顔一つせずに真剣に話を聞いてくれた。話を聞き終えた松本が、考え込むような素振りでこういった。

「まあ今すぐにどうこうできる訳じゃないけど、要するに大学の外でバンドをやりたいってことだろ？わかつた。できるだけの事はしてみるよ。とりあえず少し時間をくれないか」

「すみません。こんなお願ひができるのは松本さんだけなものですから」

雄一は頭を下げて非礼を詫びた。それにつられて和哉も頭を下げる。松本はよほど面倒見の良い性格なのだろう。これなら後輩が慕うはずである。

その後、松本は控え室に戻り、和哉と雄一はライブハウスを出て、近くの定食屋で共に夕食を取り、それぞれの帰路についた。

和哉はここ最近、大学の授業を欠席することが多くなつてきている。授業 자체がつまらないのもその一因だが、それ以前に和哉自身が経済学というものに全く興味を持たないのである。なぜ経済学部に入ったのか、和哉自身よくわからない。おそらく親の勧めや、「就職に強い」という謳い文句を信用してのことだろう。ほとんどあてずつぽうで決めたにすぎない。もつとも、入った学部が法学部だろうが文学部だろうが、和哉は興味を示さなかつたであろう。要するに音楽ができればそれでよかつたのである。かといって音大に入るほどの英才教育を受けてきたわけではないし、フリーターになつて音楽をやっていくほどのバイタリティーも勇気もなかつた。それで仕方なく、周りになびくようにして大学に進学したのである。そんな和哉が学問に興味を持てなかつたのは、こういつた経緯からすれば当然のことだろう。もっとも和哉だけが特別なわけではない。むしろ日本の大学に関していえば、和哉のように何の目的もなく入学してくる者が多数派ではないだろうか。本来、何らかの目標に近づくための専門性を身に付けに大学に行くのがるべき姿だが、実際は猫も杓子もとりあえず大学に行つて、目標は後から考えようというのが学生の半を占めているスタンスである。何の目標も動機付けもないのに、勉強など続けていけるはずがない。日本の大学がレジヤーランド化してしまうのには、一つにはこういう背景がある。恐らく和哉を含め、多くの学生が共通して感じていることは、「何のために大学に行くのだろう?」ということである。その問いかけに答えられる人間が、少なくとも和哉の周りにいなかつた。こうなると、もう大学の授業など出ていられなくなる。バンド活動などしている場合はなおさらである。

雄一から連絡が来たのは、和哉がライブに行ってから一週間ほど経つてからの話である。どうやら松本から連絡を受けたらしく、メン

バーを募集しているバンドが見つかったから、各自楽器を持って明日の午後五時に高田馬場にあるスタジオに来てくれ、ということだそうだ。早速オーディションでもやるのだろうか。まあいいさ。行ってみればわかる。今日は入念に準備をしておこう。と、和哉は自宅でギターの弦を張り替え、シールドの接続に問題がないかチェックをした。

翌日、和哉は雄一と大学の構内で待ち合わせ、高田馬場のスタジオへ向かつた。道すがら、一人は今日会うバンドのメンバーはどんな人だろうと、空想を膨らませた。

「なあ、今日会う人たちってどんな人だと思う?」雄一が尋ねた。

「いや、全く想像つかないよ、お前こそ松本さんから何か情報聞いてないの?」

「聞いてないな。わがまま言える立場じゃないしさ。まあロックとかやつてる人たちだつていうのは聞いたけど」

「ロックじや漠然とし過ぎだろ。どうする、初期のエックスみたいに髪の毛立つてる人たちだつたら」

「いや、俺エックス好きなんだけど。それにしてもあんなカッコするの俺たちの柄じゃないわな」

「あり得ない話じやないぞ。何せビジュアル系の全盛期は過ぎたとはいえ、未だに根強いファンは多いからな」

そんな訳で、二人の心配はいつの間にかビジュアル系バンドの話題に推移し、そのままスタジオに着いた。スタジオの待合室には既にタバコを吸いながら一人を待つ松本の姿があつた。スタジオの待合室はかなり混雑していて、色とりどりのヘアスタイルの若者でごつた返し、妙に空気が淀んでいた。その部屋の隅に、松本はいた。この男は大柄なせいか、こういった状況の中でも一際目立つ。その松本がこつちに向かつて笑いかける。

「よお、やつと来たね。もうバンドのメンバーはスタジオに入つて待つてるよ」

「松本さん、ありがとうございます。こんなに早くご紹介いただけ

るなんて、思つてもいませんでした」

雄一は礼を言いながら深々とお辞儀をした。

「いやいや、まだ正式に加入が決まった訳じゃないから。今日メンバーとよく話してみて、お互にやつていけそうだったたら正式加入つていう流れじゃない？ そうなると良いけどね」

松本はそういうとタバコを灰皿にねじ伏せ、席から立ち上がった。

「じゃ、行こうか」

というなり歩き出した松本に続いて、雄一、和哉はその後を追つた。

スタジオに入る前、若干人見知りの氣がある和哉はひどく緊張した。初対面で人の印象が決まるというが、和哉はどうもこの初対面が苦手である。このため和哉は初対面の相手に相当に気を使う。そういう態度が幸いしてか、和哉は初対面でいきなり嫌われたり、警戒されたりした事はなかった。恐らく和哉の第一印象は「真面目で優しそうな人」という点で多くの人が一致するであろう。しかし和哉はその期待に応えて「いい人」を演じてしまう自分がこの上なく嫌いであった。善人は百のうち九十九が善でも、残りの一が悪と見なされれば、たちまちに他人の反感を買つてしまつ、損な役回りである。まして和哉は善人でも何でもない。真面目な性格ではあるが、自分が損をしてまでその役に徹しきれるほど真面目ではない。人並みに心の陰の部分を持ち合わせている。そんな自分が「いい人」の型にはめられてしまうのが、和哉にはとても窮屈だったのだ。例えば、強面の人がふいに優しい顔を見せるとき、誰もが喜ぶ。そういう人を和哉は羨ましく思う。和哉はその逆だからである。しかし今和哉にはそんな事を気にしている余裕はない。「いい人」を演じきる事が唯一自分を救うための手段に思えた。

「お疲れ様です」

松本がまずスタジオに入った。

「この間話してた、俺の後輩を一人連れてきたよ」

すごすごと雄一、和哉がスタジオに入る。見るとスタジオには三人のメンバーがいた。ベースを持ちながらマイクの前に立っている男

が一人、彼はベースボーカルだろうか。ドラムセットの椅子に座っているひょろつとした体型の男が一人、そしてギターを持って椅子に座り、何やら機材の調整をしている女が一人である。全員和哉や雄一と同じくらいの年齢だろう。皆普通の大学生といった感じの出で立ちであり、和哉や雄一の先ほどまでの心配は杞憂に終わった。

「初めてまして、ベース希望の河野雄一です。よろしくお願いします」

雄一が自己紹介をした。

「初めてまして、ギターを希望しております、平野和哉です。よろしくお願いします」

和哉も続いた。

「やあ、こちらこそよろしくね」

と、最初に言つたのはベースボーカルの男である。体格こそ小柄だが、顔はなかなかの男前である。

「今日はセッションをしてみて、とりあえず様子を見るところから始めようかと思うんで、とりあえず機材の準備して」

セッションとは、決まり切つたフレーズを演奏しながら、各パートのメンバーが順番にアドリブを回していく、即興演奏である。

「は、はい！」

和哉と雄一は緊張した面持ちで返事をすると、いそいそと各自の楽器を準備した。和哉は久しぶりに人前でギターを弾くので、うまく弾けるかどうか不安であった。とりあえずギター、エフェクター、アンプを全て接続し、音が出るようにセッティングできた。和哉は自分の呼吸が喘いでいる事に気付いた。雄一は既に準備が整っている様子だ。

「OK? じゃあドラムで適当にリズムを刻むから、それに合わせてセッションをしてみて」

と言つなり、ベースボーカルの男とギターの女は後ろに下がり、輪の中から抜けた。つまりは和哉、雄一、ドラムの男の三人でセッションすることになる。

「いきます。1 - 2 - 3 - 4」

ドラムの男が威勢のよいかけ声でカウントを始めた。続いてドラムが四拍子で軽快なりズムを刻む。

（上手いな）

生のドラミングをこれだけ間近で聞いたのは初めてだ。思えばこの場所は和哉にとって初めて目にするものだらけである。板張りの床に黒い内壁の防音室、巨大な目玉の様なスピーカー、不必要な程の数折り重なるマイクスタンド…。今更ながら和哉はその場から逃げ出したい様な緊張感に襲われた。そして四小節目が終わつた次の瞬間に、雄一のベース音が、ドラムのリズムに合わせて繰り返しのフレーズを奏てる。和哉は雄一のベースを初めて聴いたが、こちらもそつがない。

いよいよ和哉の番である。和哉はセッショントいうものを一度もやつたことがない。今まで一人でギターを練習していたのだから、無理もない。とは言えコード進行やスケールくらいはマスターしているので、何とかなるだろう。というのが和哉の予想であった。事実、何とかなつていた。和哉のギターは雄一のベース音に上手く乗り、それなりにソロフレーズも弾けた。和哉は言いしれぬ快感と興奮を覚えた。他人と音を合わせることが、こんなにも心地よいものだとは、想像だにしていなかつた。和哉は暫し、胸の動悸を忘れた。演奏開始から二十分、三十分ほど経つたであろうか。ドラムの男が終わりの合図を出し、最後の一音で三人とも一斉に演奏を終わらせた。和哉はもつとやつていたかつたが、時間があまりにも早く過ぎてしまつていた。

「よう、お疲れさん！」

ベースボーカルの男が拍手をしながら近づいてくる。松本も微笑を浮かべながら拍手を送つてゐる。ギターの女は無表情に黙つたままである。

「なかなかいい出来だつたんじゃない？ねえ、松本さん」

ベースボーカルが松本を振り返る。

「ああ、まあ俺の後輩だからな。なかなか良かつたよ

その言葉に、雄一は照れ笑いをしている。

「ギターも様になつてたんじゃない? どうだつた、ギターから見て
ベースボーカルがギターの女を振り返る。

「うーん、指は割と動くみたいね。音作りをもつちよつとなんとか
すべきだけど」

初めて口を開いたギターの女は、淡々と言つた。和哉は、痛いところを突かれた、と思つた。和哉は一人でギターを練習するとき、運指の練習はひたすらするものの、ギターをアンプに繋いで練習する事をあまりしなかつたのである。そのため実際に機械を通してどんな音が出るか、という点に和哉は無頓着だつた。

「ま、そこんとこはお前が色々指導してやれば良いだろ。取りあえずプレイ 자체に問題はなさそうだ」

ベースボーカルは和哉を何かとフオローリしててくれた。

「そうだ、こつち側の紹介がまだだつたな」

言つなりベースボーカルはメンバー紹介を始めた。

「ドラムが栗田、ギターが一宮、俺がボーカルで、北川です。よろしく」

和哉は、人の顔と名前を覚えるのは得意である。さうとした紹介だつたが、多分もう忘れないだろう。

「私はギターつて言つても、技術屋だけじね」

一宮がクールに付け加える。技術屋とはどういう事か、和哉には分からなかつたが、黙つて相槌を打つていた。

「ま、そういう事で、これからどうするかは追つて連絡するから。多分一週間もかからないと思うけど、それまで待つて」

北川がそう言つと、松本が立ち上がつた。

「じゃ、今日はここまでだな。一人とも、機材片付けて。もう行くぞ」

「はい!」

和哉と雄一は急いで機材を片付けた。スタジオを出る時、和哉はペこペこと頭を下げながら、

「今日はありがとうございました」と挨拶をした。

「ではよろしくお願ひします」

雄一も続けた。それから三人はスタジオを後にした。スタジオを出ると、松本が開口一番で言つた。

「まあ、あの感じならうまくいくんじゃないのかね。どうなるか分からんけど、印象は良かつたみたいじゃん」

「うまいいくと良いんですけどね。久しぶりに他人と音合せたら、やる気出できちゃいましたよ」

と、いう雄一の言葉に、和哉も同感であった。音を合わせた時、音楽をやつていてよかつたと、和哉は心の底から思ったのだ。だがあのバンドについて、腑に落ちない点も少なからずあった。和哉は松本に聞いてみた。

「松本さん、さっきのバンドなんですけど、ギターもベースも既にいましたよね。僕らが加入する必要つてあるんですか？」

「ああ、その事か。まずベースはベースボーカルだったる。北川はボーカルに専念したいんだそうだ。だから専任のベーシストを探してたつてわけ。それからギターだけど、一宮はあんまりステージに上がりたがらないんだ。ギターはそこそこ弾けるんだけど、引っ込み思案な奴でな。機械に詳しいから、技術面でメンバーをサポートしてるんだ。技術屋つて言つてたのはそういう事さ」

和哉は納得した。

（それで一宮さんは俺の音作りの事をいち早く指摘した訳だ）

和哉は自分の弱点を即座に見抜いた一宮の慧眼に感心していた。だが彼女がテクニカルサポート役であれば分からぬでもない。きっと機材の扱いについては、和哉の知らないことまで色々と知っているに違いない。

結局、松本とは高田馬場の駅前で別れた。一仕事終えて空腹だった和哉と雄一はいつもの定食屋で夕飯を済ませ、その後はそれぞれ帰宅の途についた。

6月下旬から7月上旬にかけて、和哉の大学では学期末試験が行われた。和哉は普段、授業には出ていなかつたが、一夜漬けで何とかこれを乗り切つた。あまりいい点数は期待できないが、落第点を取る事もないだろう。大学の試験制度とは、和哉のようにあまり勉強をしていない学生に合わせて設計されているらしい。勉強をしていない学生に単位を与えて社会に輩出している訳だから、大学で習う学問など実社会では役に立たないと、大学側自身が認めているということである。和哉はこういった現象の恩恵に大いに与っているので、あまり大きな事は言えないが、とは言え「何のために大学へ行くのか」という疑問は更に濃厚になつていくばかりである。

試験終了後、大学は夏期休暇に入る。もつとも普段授業に出ていない和哉にとって、あまり生活面での変化はない。雄一から和哉に連絡が入つたのは、大学が夏期休暇に入つて間もなくである。あのバンドから松本経由で連絡を受けた雄一の話によると、二人のバンド加入が正式決定したらしい。和哉には何だか上手く行き過ぎているようにも思えたが、とはいへやつとこれで音楽をやつしていくための土壤ができたという、喜びの気持ちの方が強かつた。それともう一つ、雄一の話では、近日中にバンドのメンバーが一人の歓迎会を開いてくれるというのだ。恐らく親睦を深めるための会合だろう。和哉はそういうた宴の席には不慣れであつたし、第一未成年なので酒も飲めない。が、お互いの事を知り合つには絶好の機会だと、和哉にしては珍しく事を前向きに捉えた。

*

歓迎会当日、和哉は新宿の駅前で雄一と待ち合わせ、歓迎会の会場となる居酒屋のある方角へと向かつた。雄一の話では、今回は松

本は来ないらしい。前回顔つなぎをしたので、今回からは当事者同士でやつてくれという事だらう。思えば縁とは不思議なものである。前回は赤の他人だった者同士が、一度会つただけで次からは知り合いとして共に酒を飲む。和哉はまだ彼らメンバーについてよく知らない。そういう人間が知り合い面をして会うのは馴れ馴れしくないか、つまり一体どんな顔をして彼らに会えば良いか見当がつかなかつた。どうやらまた「いい人」を演じるしかなさそうだ。和哉にとって人間関係とは常にこういった迷いの連續である。この一点を以てしても、和哉がどれだけ人との接触を恐れていたかがわかるだろう。しかし、今はそもそも言つていられない。お互いを理解し、信頼しなければ音楽はできない。これはチャンスなんだと、和哉は自分の心に言い聞かせる。一見平常心を保つてゐる様に見える和哉の心には、こんな葛藤が渦巻いていた。

目的の居酒屋にはすぐに着いた。歌舞伎町にある普通の居酒屋である。店の周辺は毒々しいネオンが渦巻いていた。店員に先客がいるかどうかを確認したところ、どうやらまだ誰も来ていないようだ。

「先に上がつて待つてるか」

雄一はそう言つと、靴を脱いで上がつていつてしまつた。和哉は表で待つていようか迷つたが、雄一に促されて薄暗い店内に入つた。案内された席に座ると、一人は話し始めた。

「今日はやっぱり俺たちの歓迎会だから、飲まされるんかなあ」

雄一が苦笑いを浮かべながら言つた。

「しかし、俺たちは未成年だぞ」

和哉は言つ。

「馬鹿。そんな事を言つたら、大学の新入生歓迎会なんてどうなる? どこのサークルでも未成年の新入生が酒を飲んでるぜ」

「それは先輩に勧められて仕方なく飲んでるんだろう。俺たちはそういう馴れ合いの組織にいる訳じやない」

「サークルもバンドも同じ人の集まりだ。そう違わないさ。お前だつてバンドの人たちと円滑に付き合つていきたいだろ?」

「それはそうだが、酒を飲まないと円滑に付き合えない訳じゃないだろ」「

「酒が入った方がお互い心を開けるもんさ。緊張もほぐれて、打ち解けた雰囲気になる。お互いの信頼感も生まれる。音楽的にもその方がプラスだよ」

「まあ飲む気になつたら飲むし、そうじゃなかつたら断るさ。その場の空気次第だな」

和哉はあくまでも自分が飲みたい時にだけ飲む、といったスタンスである。しかし人間関係においてはそつとばかりも言つていられないのが現実である。その辺りの機微については雄一の方が一枚上手だつたようだ。

「そう言つて結局誰しもが飲むんだよ」

と雄一は事も無げに言つた。和哉は黙つてしまつた。

二人が話しているうちに、誰かが店に入つてきたようだ。例のバンドの三人である。

「よう、お疲れさん！」一人とも来てるね！」北川の声がする。

「久しぶりだな。元気にしてたか？」ドラマの栗田だ。後ろに一富の姿もある。

和哉は立ち上がり頭を下げた。

「ええ、今日はわざわざこのよつた席を設けていただきて、ありがとうございます」

「いいのいいの、今日は無礼講だから、どんどん飲もうぜ」

北川は早くも酒が待ち遠しい様子だ。

「じゃ、飲み物だけ先に頼もうか。とりあえず一杯目は皆ビールで良い？」

北川が全員に聞いた。誰からも反論はない。というよつこの聞き方をされると反論ができないな、と和哉は思つた。どうやら雄一の言つた通りになりそうだ。かくして全員の手元にビールが行き渡つた。「じゃ、堅苦しい挨拶は抜きにして、一人のバンド加入と、うちらの前途を祝して、乾杯！」

「乾杯！」

皆、一斉にビールを飲んだ。和哉は苦いので一気に飲み干そうとしたが、ジョッキの半分くらいまで来てギブアップした。

「つーあー！やつぱこれだな。夏場のこの瞬間はたまんないね！」北川はよほどビールが好きなのだろう。ビールの一口目を飲んだ後の、お決まりのような台詞を嬉しそうに叫んでいる。

「ちょっと、あんまり大きな声出さないでよ」

「富が北川をたしなめるが、そういう彼女のジョッキも相当減っている。意外といける口なのかも知れない。

「ところで、一人はどんな音楽が好きなの？」

栗田がやつと音楽の話題に触れた。

「そうですね、色々聴きますけど、昔のブリティッシュロックが好きですね」

和哉が答えた。

「そうすると、ショッペリンとか、パープルとか？」

「好きですね。ビートルズやストーンズも好きですよ」

和哉は久しぶりの音楽論議にわくわくする。

「お！渋いねー。じゃあ今度コピーでもやるか」

北川も話に乗つてくる。その後雄一も加わり、大いに音楽の話題で盛り上がった。一富だけは始終静かであつたが、酒だけは人一倍進んでいる。それでいて酔つている様子もない。かなり酒に強いらしい。一方和哉はとくに、ビール一杯も飲みきらぬうちに真つ赤になつた。赤鬼の様な形相の和哉に、それ以上酒を勧める人は誰もいなかつた。それどころか周りは和哉を心配して、

「おい、顔赤いけど、大丈夫か」

と声をかけたり、水を頼んだりしている始末である。和哉自身にしてみれば何ということはなかつた。いつもより饒舌にはなつていてが、体調においては何も変化はないのである。が、何せ顔が赤過ぎる。他のメンバーは雄一も含め、誰一人顔色が変わつていないので。（俺は酒に弱いみたいだな）

和哉は特に体調が悪いわけでもなかつたが、その後酒は控えた。

宴会はその後三時間近くにわたつて続き、大いに盛り上がつた。和哉も顔が赤くなりはしたが、むしろいつもより舌が回つたおかげで、メンバーと心ゆくまで語り合つことが出来た。和哉は

（来て良かった）

と思った。メンバー一人一人の音楽性、人となりがわかつた。が、和哉は心の底から楽しむ、ということが不得手な人間である。楽しめた、と言えば、そうに違いない。しかし心の奥では、常に冷静な自分がいて、やはり周りと距離を置いているのであつた。

予約時間が過ぎ、店に追い出される形で、宴会はお開きになった。バンドの一行は勘定を済ませ、店の外に出た。一人の歓迎会ということで、和哉、雄一の分も他の三人が支払ってくれた。

「よう、二次会行くけど、どうする？」

北川が早くも二次会の店を見つけたようだ。

「行きます！俺行くつす！」

雄一は酔つているのだろう。顔にこそ出ていないが、道路の真ん中で飛び跳ねている。

「すいません、僕は、今日はこの辺で」

和哉は申し訳なさそうに言つた。これ以上いると何かボロが出るかも知れない。樂しいうちに帰りたい。というのが和哉の本音であった。

「えー、平野帰つちやうの？」

雄一は物足りなさそうに不平を言つた。

「俺、酔つ払つたみたいで。申し訳ないですけど、今日は帰ります」和哉の赤い顔を見て、誰も疑う者はいなかつた。

「そつか、じや、お疲れさん」

和哉はメンバーの別れの言葉に頭を下げるが、建物の隙間から垣間見える新宿駅の方向に一人歩いていった。

毎週金曜夕方四時から、バンドの練習である。場所は先日の高田馬場のスタジオだ。和哉は練習が待ち遠しかった。

その日がくる前に、和哉は雄一と会った。ピックや弦などの小道具を買いに、楽器屋に一緒に行つたのである。雄一の話によれば、あの宴会の日、和哉が帰つた後に一次会、三次会と宴会は続いたが、最後の方の記憶は雄一にはないらしい。雄一は酔いつぶれてしまつたそうだ。酔いが顔に出ない分、そうなるまで誰も止めなかつたのだろう。酒には弱い方が案外上手な付き合いが出来るのかも知れない、と和哉は思った。

楽器屋で、和哉はピック、弦、シールドを買い、その後陳列してあるギターを眺めた。滑らかな光沢を纏つたギターは色彩の豊かさを木目に表し、和哉の物欲をそそつた。

(そろそろ新しいギターが欲しいな)

今の和哉のギターは、和哉が高校生の頃から使つてゐるものである。使い慣れているのはいいが、なけなしの小遣いで買ったものであるから、少し安っぽい。いつか金を貯めて買い換えよう。と、和哉は決めた。

楽器屋の帰り道、和哉は雄一と夕食を摂つた。食事中の話と言えば、大抵いつも音楽の話なのだが、今日は違つていた。

「バンドやつてるとモテるのかな」

雄一は唐突にこんな事をつぶやいた。

「まさか、そんなことないよ。バンドやつてモテてる奴はね、元々バンドなんかやつてなくともモテる奴なのさ」

和哉は笑いながらこつと言つたが、内心心当たりがないでもない。いくら音楽が好きとは言え、その根底に「モテたい」という気持ちがあるのは、どの男も同じである。和哉は容姿も人並みであるし、スポーツなどで活躍した経験もない。モテる要素など殆ど見当たら

ない。和哉本人もそれを自覚しているし、それをさして気にした事もなかつた。自分は音楽しか取り柄のない人間だから、音楽で認められるようになるまでは日の目を見ないだらうという考えが、和哉の中では当たり前になつてゐた。裏を返せば、それは和哉が音楽に對してただならぬ期待を寄せていたという事になる。自分は音楽をやるようになれば、もっと人から認められるのではないか。そんなことは雄一だけでなく、和哉も考えてはいた。

「じゃあ平野はさ、なんで音楽やつてるの？」

雄一は不満げに和哉に問う。

「俺は音楽しかできないからさ。人間生きているうちに、自分はこれをやつた、つていう仕事をしたいだろ。俺にはそれが音楽しかあり得ないんだよ。そりやモテたいとは思つよ。でもそれは副産物として付いてくれば良いだけの話で、目的じやない」

「ふーん、俺はモテりや何でも良いけどな」

「正直な奴だな」

和哉は雄一の軽率さを笑つた。

二人は夕食を終えて店を出た。繁華街。日も暮れた街の明かりの下で、多くの人が賑やかに交差している。仕事上がりのサラリーマン、学生と思しき集団、水商売風の女性。その中に、時々若いカップルの姿も見受けられる。身を寄せ合い、何やらとても楽しそうに談笑している。世の中にそんなに楽しい話題があるだらうか。和哉はぼんやりとそれを眺めながら思つ。

（恋愛など一の次だ）

和哉は薄暮を歩き出した。

（なぜなら、俺はまだやるべき事をやつていない）

練習の日が来た。和哉は練習開始予定時刻の四時よりも二十分ほど早くスタジオに行つた。機材の調整やら、弦の張り替えやらをするためである。スタジオに着くと、既に防音室の扉が開いている。どうやら先に誰か来ているらしい。

(早いな。誰だろう)

和哉は防音室の中に入った。

「お疲れ様です」

「あ、お疲れー」

見ると機材をいじっている一富がいた。エフェクターやら配線やら、ごちゃごちゃと入り乱れている中に、一富は座っている。

「何をしてるんですか?」

和哉は聞いた。

「今度の曲の音作りをしてるの。平野君苦手でしょ」

「ははは。それはそうですね。すみませんねざわざ」

「これが私の仕事だから」

そう言うと一富は自分のギターで音を鳴らした。その後何やら考え込んで、機械のつまみを回して調節している。和哉はその横でギターをケースから取り出し、弦を張り替えるために古い弦を外しだした。古い弦が切られた長髪の様にはらはらと落ちる。その途中、一富から声をかけられた。

「弦張り替えるの?」

「はい、もう錆びてきちゃってるんで」

「それなら私がやるよ。かして」

「いやいや、これくらいなら自分で出来ますよ

「いいから」

言つなり一富は和哉からすつとギターを取り上げた。されるがまま、和哉は一富にギターを預けた。後は呆然と見ている他なかった。と、

「一宮は和哉とは比較にならないほどの手際の良さで古い弦を取り外した。時間という時間もかかっていない。

「新しい弦かして」

「あ、はい」

和哉は慌てて新しい弦を取り出し、一宮に渡した。するどじうだらう。一宮は新しい弦を全てギターの通し穴に差し込み、それらを早送りのようなスピードで全てギターに張り付けた。弦の余った部分をニッパーで切りそろえると、クロスを取り出して、スプレーをそれに吹き付け、弦を磨いている。

（神業だな）

和哉は圧倒されて声も出ない。一宮の白く細い、纖細に動く指先を和哉は見つめていた。蝶の様に儂い美しさ。溜め息が出やうである。

「錆び止めを塗つておくと、弦が長持ちするから」

一宮はそう忠告した。が、和哉は生返事をするのみで、頭では別の事を考えていた。田線はギターではなく、一宮の方に向いている。

（ありだな）

男とは卑猥なものである。これほどの神業を見せつけられている時でさえ、興味の対象はそこから外れ、の方へと向かっているのである。というより一宮のしなやかな一連の動作が、和哉の興味をよりこつそう惹いたのかもしれない。黒くつややかな髪、はっきりとした田鼻立ちと白い肌、白のブラウスと黒のロングスカートという出で立ちは、清楚という言葉が相応しいだろう。控えめな雰囲気からか、最初は気がつかなかつたが、よく見るとものすく良い女である。和哉の故郷にはいなかつたタイプの女性だ。和哉は何か言葉にできない胸の痛みを感じたが、ふと我に返つて抵抗を試みた。

（いかん、これから練習だ。気持ちを入れ替えないと）

「はい、チューイングも出来たし、これでばっちりだよ」

一宮からギターを手渡され、和哉は受け取った。その時、ふと微かな女の香りが和哉を誘つた。

「ありがとうございます。何から何までやつてもうつて」

手渡されたギターを抱えると、ギターを通して下腹に一畠の体温が伝わってくる。あろう事か、和哉は勃起した。

（まづい）

ふくれあがる煩惱をかき消すように、和哉はがむしゃらにギターを弾いた。

「すごく弾きやすいです。ありがとうございます」

苦しい笑顔を作つて、和哉は言つた。

「練習して、上手くなつてちょうだいね。私も頑張るから」

いつした一畠の一言一言が、和哉の胸に突き刺さるようであつた。

バンドのメンバーが全員揃つた。栗田は集合時間の五分後に現れた。時間にルーズな人なのだろうか。

課題曲の音源は事前にネット上にアップロードされている。それを各自でダウンロードして聴き、練習し、バンドで集まつた時に音を合わせるというスタイルを取つてている。和哉もきちんと練習はしきてている。音合わせでもきっとそれなりに弾く事が出来るであろう。和哉の心配はそこにはない。しかし何故だろう。スタジオに来るまでとは打つて変わって、練習に対するモチベーションが低下しているのである。練習が楽しみで仕方ない、そんな想いが今はどこにもなく、やる気がないとまでは言わないにしても、それほどやりたいとも思わない。スタジオに来てから今までの間に起こつた出来事と言えば、二宮との一件しかない。それが心境の変化に何か関係しているのだろうか。確かにあの一件で和哉はかなり動搖した。しかし音楽には何ら関係がなさそうである。仮に和哉が二宮に惹かれたのとしても、それがモチベーションになつて、逆にやる気がみなぎつてもよさそうなものだ。練習へのモチベーションだけではない。バンドのメンバーが何かを話しているが、あまり頭に入つてこない。立つ事すらも億劫な状態である。和哉は普段から無口な方だが、この時は一言もメンバーとの会話がなかつた。

「平野、どうした。具合でも悪いのか？」

雄一が声をかけてくるが、和哉は我に返るでもなく、うつむいた目で答えた。

「ああ、ちょっと体調崩したみたいだ」

事実、和哉は自分が体調を崩したのだろうと思つていて。

「夏だからな。夏バテしないように、ちゃんと飯食えよ」

「ああ、大丈夫だ」

最初に音合わせをする曲は、アップテンポなロックナンバーだつ

た。曲全体としてギターの音が印象的な曲であり、ギターソロも入っている。つまり和哉の腕が試される曲である。

「じゃ、いつてみようか」

北川が場を仕切っている。

「いきまーす。1、2、3、4」

栗田のカウントはいつもながら軽快だ。というより軽率、という表現が近いかもしれない。無理にテンションを上げている印象である。曲が始まれば、和哉には手慣れたものである。指板を見ずとも全く間違う事なく弾く事が出来る。だが当の和哉は上の空である。

先日の宴会の時の会話を思い出す。北川、栗田、二宮の三人は、和哉や雄一とは別の大学に通う学生であり、皆和哉より一つ年上である。北川、栗田の二人は殆ど大学にも行かず、このバンドの活動以外では、他のバンドのヘルプをやって、後は殆ど飲み歩いているらしい。和哉同様、不真面目な学生である。一方、二宮は真面目に大学に通つており、成績も優秀だそうだ。文学部に所属しており、日本文学と海外文学の比較論を研究しているらしい。和哉にはその詳しい内容は理解できないが、二宮が相当な文学通である事はよくわかつた。とにかく読書が好きで、一週間に十冊ほどの本を読むという事だった。和哉など本は全く読まず、読むものと言えば週刊誌の「ゴシップ記事」くらいのものである。話が分かるはずもない。二宮の音楽好きは父からの影響で、父親が以前はプロで活躍していた事もあるギタリストなのだそうだ。それでギターの周辺機材には幼い頃から触っていたそうである。文学とロックという一見妙な取り合わせは、このようにして形成されたものだという。もつとも、二宮が技術者としてバンドに付いて回るようになつたのは大学に入学してからで、高校生までの二宮は専ら、大人しい文学少女だったそうだ。性格は今も変わらず大人しい方で、人見知りが激しく、一度もステージには立つた事がないという。そんな二宮が大学に入学した後、どのようにして北川、栗田という性格的に対極にある一人と出会い、共に活動をするようになったのか、和哉には分からなかつた。

ただ、無類の酒好きといつては三人とも一致しているから、何らかの拍子に出会つてからは、酒を酌み交わしつつ親睦を深めた事だろ？。

そんな事を和哉が考えてこるついで、曲が終わつた。和哉は回想から醒めた。

「まあ、初めて会わせたにしては良く出来てる方じゃないか」

北川がマイク越しに話し始めた。

「平野、お前はやっぱ音作りが良くなればなかなかいくじやないか」

和哉は自分がどんなプレイをしたか、殆ど覚えていない。が、少なうとも音が良くなつたのは一宮の功績である。

「ありがとうございます」

和哉は素直に言つたが、自分がほめられているのかどうかはよくわからなかつた。

「河野、お前も結構上手かつたと思つんんだけど、ちょっと音量がかすぎるな。ベースがそこまで立つ曲じゃないはずだ」

「あ、すんません」

雄一が照れ笑いをして、アンプの音量を下げる。

そのような形で、練習は進み、あつという間に一時間が経過した。和哉は練習の間中、機械的に手だけは動いているものの、気の抜けた演奏を繰り返していた。最初のオーディションの時の感動と比べれば、全くの無味乾燥と言つていい。もつとも、それでも和哉のプレイに関して誰も文句を言わなかつた。そればかりか、

「平野、お前は真面目に練習してきているな。何も問題はない」と、北川に太鼓判を押される始末であった。

(練習とはこのようなものか)

和哉は落胆した。といつても表情は全く変わっていない。練習の最初から和哉は無表情だったからである。周囲もそんな和哉の表情を体調不良のためだと察して、一向に気にしない。

「今日の練習はここまで。次からは今日やつていない曲も含めて、

課題曲の全てを合わせる予定だから、各自練習しておくよつて。「元気だ」と和哉は既に課題曲を全曲練習してある。次の練習でも問題はないだろう。しかし何だらけ。この倦怠感は、本当に体調を崩したのだろうか。

「おい、帰りに飯を食つていかないか」

雄一が声をかけてくるが、和哉は気乗りしない。

「悪い、今日は体調が悪いから、家に帰るわ」

「そうか、じゃあお大事にな」

和哉はメンバーに挨拶をして、そそくさとスタジオを後にした。外はうだるような暑さである。和哉は得体の知れぬ煩悶を抱き、蜃気楼に歪む往来をとぼとぼと歩き出した。

猛暑である。午後六時過ぎとは言え、まだ外は明るく、額に汗をして歩く人々が行き交う。喫茶店やファーストフード店は涼をとる人で賑わっている。これから宴会でも始めるのだろうか。居酒屋の前に人だかりができ、騒がしく歩道をふさいでいる。

和哉はそうした町の夏らしさには目もくれず、ただひたすら歩く。途中で飯も食わず、買い物もしない。家に着いた頃には滝のように汗が流れ落ち、背負ったギターケースまで汗で湿っていた。荷物を下ろし、部屋のクーラーをつけて、和哉はベッドに横になった。

（憂鬱だ…）

このような気持ちに、和哉は今まで取り憑かれた事がなかつた。遠くで犬の吠える声がする。それを聞きながらぼんやりと、和哉はベッドの上で仰向けになり、天井を見つめていた。

どれくらいそうしていたか。明かりのついていない部屋が薄暗くなつてきた頃、和哉は起き上がり、テレビをつけた。一人暮らしの寂しさはテレビの騒音である程度紛れる。チャンネルを次々と変えていく。見たい番組はない。馬鹿馬鹿しくなつてすぐにテレビを消した。次に和哉はパソコンを起動させた。

（ネットサーフィンでもするか）

ポータルサイトのニュース記事を、和哉は眺めた。が、特段目新しいニュースもなかつた。音楽の話題にしても、大して興味を惹く事は書いていない。と言うより、目に入つてくる文字が情報ではなく、単なる記号にしか見えない。ただ文字面を撫でているだけで、意味が頭に入つてこないのである。

そうしているうち、ついに和哉にはすべきことを失つた。他に誰もいない部屋で一人、何をすれば良いのだろう。音楽を聴くか。いや、あまり気乗りはしない。ギターを弾くか。さつき弾いてきたばかりだ。食欲もない。寝るにはまだ早すぎる。どうしたら良いのだ

る。と、和哉は部屋の隅っこにうずくまつた。部屋の窓から差し込む夕日が、和哉の足下を照らしている。柔らかく形を変える一点の薄明を見つめるうち、和哉はつとうとと眠りに落ちてしまった。

和哉が目を覚ました時には、部屋は既に真っ暗であった。外から差し込む街灯の光が、青白く壁を這っている。朦朧とした意識の中、和哉はゆっくりと立ち上がり、部屋の明かりをつけた。眩しい。立ちくらみがする。何か夢を見ていたような気がする。何の夢だったかは覚えていない。何か優しくて、それでいて胸を締め付けられるような感触だけが残っている。和哉は不意にこんな一言を思い出した。

「練習して、上手くなつてちょうだいね。私も頑張るから」

（一回さん…）

和哉はゆっくりとギターに歩み寄り、ケースからそれを取り出すると、それを抱えて座り込んだ。和哉はギターをかき鳴らした。一人の部屋にマイナーコードが響き渡る。うつろな目で天井を見上げ、和哉は初めて思った。

（これが恋というものか）

バンドの練習の時から憂鬱だった原因がやつと分かった。和哉は初めて感じた恋の衝撃に、精神的に疲弊していたのだ。恋煩い、という言葉がどうやら当てはまりそうである。和哉はようやく、その気持ちを理解できたのである。

馬鹿な話だ。巷に溢れるチープなラブソングも、何だか本物に聞こえてくる。今まで小馬鹿にしていたつけが回ってきたのだ。恐ろしく人口密度の高い新宿駅南口。隙間なく空間を埋め尽くす人、人。この人の数だけ出会いがある。つまりとてもなくありふれている。ありふれた、誰が驚くでもない、日常の一コマ。それがこんなにも苦しいなんて。喫茶店でアイスコーヒーを飲みながら、和哉は一人考えていた。今の自分に何が出来るだろうか。ギターを練習する事。それはそうだ。他には？スポーツジムに行って体を鍛えて、ファッショனにも気を使って、小説なんかも少しづつ読んで。考えれば考えるほど、今までそういうものに無頓着であつた自分が恥ずかしく思えてくる。雄一に相談するか？いや、雄一には偉そんな事を言つた手前、言い出せそうにない。どうやら一人で悩むしかなさそうだ。そういえば、和哉はさつきからずつと一人でいるが、一人でいることがこんなにも寂しいとは、思いもしなかつた。元々一人でいることが何よりも好きな和哉には、この得体のしれない孤独感をどうしたらよいのか、おおよそ見当がつかなかつた。雄一と飯を食つこともある。しかしそういうときですら、この孤独感は拭い切れない。孤独とは、誰かと一緒にいることだけで癒せるものではないらしい。むしろ問題の本質から目をそらす自分にどうしようもなく不安が募る。とにかく何をしていても、誰と過ごしても、心ここにあらずの状態である。

（これは困ったな…）

和哉は心中、こんな弱音ばかり漏らすよくなつた。しかし弱気になつてばかりいても仕方がない。

（とにかくやれるだけのことをやつてみよう）
和哉は今の自分には自信がない。絶えず音楽のことばかり考えてきた人間である。どうしたら女性に好かれるかなど考えたこともない。

そんな自分がいきなり勝負に出ても、傷つくだけであることは火を見るより明らかである。自分磨き、という言葉は軽率すぎて好きではないが、そういうものをしばらくはやってみるしかなさそうだ。主体的に何か行動を起こすことがあまりない和哉だが、動機さえあれば人間はいかようにも動くようになるものである。ここから和哉の多忙なキャンパスライフが始まる。

(一)富さんは今どこで何をしているのだ(う)

それを考へると、和哉はいてもたつてもいられなくなる。自分の知らない一富が、今もどこかで暮らしている。その事実がたまらなく悔しいことのように思えた。独占欲というのはこういうことを指すのだろうか。自分は毎週金曜の、それもたつた一時間の一富しか知らない。その他の時間は空白である。自分の知らない世界はこの世に存在しないものか。そんな映画が昔あつたような気がする。自分が世界の主人公なのである。しかしさか、そんなに自己中心的な考えは持たない。一人一人が今日を生きている。平行線が絶えず延びて、どこかで交わったり、消えたりしながら、時を紡いでいるのだ。

(それならもうと交わりたいものだな)

和哉は考えた。交わる時間は金曜の一時間なら、せめてその時間を有効に使えるよう、他の時間をその準備に充てればいい。そのうちにきつかけさえ掴めれば、きっと交わる時間も増えていくに違いない。それが和哉のひねり出した大まかな戦略であつた。

和哉はコツコツと努力して何かを積み上げるのが得意な人種である。そういう自分の真面目な性格を活かした方法が望ましいと、和哉は考えた。ギターは今まで通り練習するとして、他はどうするか。ファッション雑誌でも見てファッションを研究して、服でも買いに行くか。常に冷静な和哉は恋愛に關してすら打算的であつた。

こうと思つたら和哉は行動が早い。和哉はコンビニに立ち寄つてファッション雑誌を開いてみた。何やらたくさんの中の読者モデルがそれのお気に入りであろう服装で並んでいるが、和哉には何がどう良いのかさっぱり分からぬ。「カワイイ」とか「オシャレ」とか、そんなものは作り出した者の権威にすがつてはいるだけではないのか。しかしそれを言えば音楽も同じようなものか。

(まあ見ていいくうちにセンスも磨かれてくるさ)

和哉は雑誌を選んで、一冊購入した。

その後和哉は原宿に行つた。服を見に行つたのである。原宿でなくともよさそうなものだが、原宿なら何か洒落たものが売つていうだ、という田舎者の感覚である。

原宿に着くと、猛暑の中、大勢の人でごった返していた。和哉が想像していたより若者が多いわけではなかつたが、その活況から十分に最先端の街なのだと感じられた。和哉には特にあてもなかつたので、しばらく街を歩いた。見るからに高級なブランドのショッピングセンターを連ねているが、あまり高すぎるものは買えないだろう。というより敷居が高くて店に入ることすらできなさそうである。程よい価格帯と思われる店を見つけて、和哉は入つて行つた。ここなら手も足も出ないことはあるまい。和哉は店内に陳列されている服を眺めた。どれが自分に似合うのかは分からぬが、大体どれも無難で、和哉にも着られないことはなさそうであった。和哉はその中の一着を手に取り、軽く羽織つてみた。鏡に映る自分の姿を見る。

(似合わない)

似合わないというより、着ている人間が良くない。瘦せていてひ弱な感じがして、服に着られているような印象がある。これでは何を着ても似合わないだろう。店員が和哉のほうへすり寄つてくる。

「ちょうどそのアイテムが人気で品薄でしてね、ええ。お客様、よくお似合いでござりますよ」

和哉は口車に乗ることはせず、店を後にした。

やはり上辺だけ着飾つても駄目なようだ。どうすればいいか。まづ体作りをすることが先決か。和哉は中学生の頃、運動部にいたが、その頃ですらまともに体作りなどしたことはなかつた。和哉は興味のないことほどことん何もしない主義である。だが今は違う。それが自分にとつて必要と思われる。そうなると和哉は強い。どこまでも努力を惜しまないだろう。

(確か大学の施設にスポーツジムがあつたな)

和哉はそう考えるが早いか、大学に足を向けた。

大学にはほとんど来ない和哉だが、大学の構内を歩くことが、和哉は好きだった。大学の構内は緑豊かで、風通しがいい。散歩にはもつてこいである。和哉は歩きながら、スポーツジムのある場所を探した。それは校舎の地下にあった。割と新しい、洗練された感じのジムである。受付に聞くと、この施設は学生証を提示するだけで自由に使うことができるらしい。

（ここに通うことにしてよい）

それ以来、和哉は週に一、二回、ジムに通うことになる。それが始めてみるとだんだんと楽しくなつていき、和哉はトレーニングの方法や栄養学なども研究するようになつた。どうすれば健康で、かつ良いプロポーションを維持できるのか調べ、それを実践したのである。ついでながら、和哉は大学の図書館にも足繁く通うことになる。文学のことなど和哉には全く分からなかつたが、とりあえず読みやすそうなものから手にとつて読むようになつた。こちらでも、和哉はどんどんとその深みにはまつていき、時間のある時はいつも本を読むようになつた。

和哉は大学で勉強こそしなかつたものの、様々な施設をフル活用して、確実に人間の幅を広げていつた。目的の分からぬ学科の勉強などよりも、自分の「学問」のほうがよほど実用的なことのように思えた。お陰で和哉は充実した日々を送つた。午前中はスポーツジムで汗を流し、午後はギターの練習か読書の時間というスケジュールで毎日を過ごした。アルバイトで稼いだ給料は殆ど服に使つた。ファッションの研究にも余念がない。自分の立てた目標のために、自分の意思で行動するのは気持ちがいいものである。

夏の暑さが和らぎ、涼しい日々が続くよくなつた頃、雄一と飯を食いに行つた時のことである。

「そういえばお前、最近垢ぬけたな」

雄一が思い出したように言つた。

「そうか？俺はそんなことないと思ひけど」

和哉は恋をしていることなど、誰にも悟られたくない。

「よく言う大学デビューってやつか？」

なんていやらしい言い方だ。しかしその通りかもしれない、と和哉は思う。

「デビューなんて大げさなもんじゃない。俺はたいして変わつてないよ」

「またまた、素直になんなよ」

雄一は下品な笑いを浮かべる。

「人をからかうもんじゃない」

和哉はこうは言つたが、努力の成果を他人に気づいてもらえるのは、決して悪い気分ではない。おそらく和哉はこんなほめられ方をしたのは初めてだ。何だかくすぐつたいような気分である。だが一方でおだてられて舞い上がっている場合ではない。自分の目標はあくまで一富に認めてもらうことだ。そして自分の気持ちをいつかは伝えなければならない。どのタイミングでどのように伝えればいいのか分からぬが、とにかく伝えなければならない。それは誰にでも訪れる瞬間かも知れないし、誰にでもできることかもしれない。しかし自分にとってその瞬間は乾坤一擲の大勝負になるだろうと、和哉は予感していた。

とあるバンドの練習の口のことである。北川がバンド全員の前に立つ切り出した。

「今度このバンドで、ライブに出てみようと思つて」

栗田が一人でテンションを上げてくる。

「よっしゃー！」

意味もなくドラムのフィルが入る。その後、北川が続ける。

「今度知り合いのバンドがライブやるんで、その対バンで出演させてもらう形だ」

対バンとは、複数のバンドが一つのライブにおいて共演することである。

「対バンでやるからには、他のバンドと比べられても恥をかかないライブにすることが大前提だ。あわよくば他バンドのファンもこちらに引き込むぐらいの気持ちが必要だよ。まあ演奏はいつもの練習通りやつてくれれば問題ないだろうが、一層気合を入れてやつてくれ。それともう一つ、ステージに上がるにはそれ相応のカッコをしなきやならない。本番だけ気をつけようとしてもなかなかうまくはいかんから、普段から見てくれに気をつけてくれよ」

「なんだそりや、まるで俺らが見てくれに気を使つてないみたいじゃないか」

と、スヌーピーのTシャツを着た栗田が返す。

「栗田、お前はいつもジーパンにTシャツじゃないか。少しは平野を見習え」

名指しされて和哉は戸惑つた。

「平野、お前はほんとに成長したよ。ギターももちろんだが、見た目も最初に会つた時より気を遣つようになつたみたいだし、人間にも奥行きが出てきたような気がするな」

「つもいきなり褒められると、和哉は言葉が出ない。

「ありがとうございます」

お決まりの言葉しか出なかつたが、和哉は自分の努力を見ていくれる人がいることをありがたく思つた。雄一が茶化すように言つた。

「こいつは单なる大学デビューですよ

その場にどつと笑いがおこつた。

「大学デビューでも何でも結構だ。河野、そういうやお前最近ちょっと太つたんじゃないのか？ロツクをやるやつは太っちゃダメだぞ」北川がたしなめると、雄一は悪びれずに照れ笑いをした。

和哉の努力を、周りが少しずつ認め始めている。その実感はある。しかし肝心の一富は特に態度に違いを見せない。そればかりか、妙にそつけない態度である。和哉が何を話しかけても「あつそう」とか「本当に？」で終わつてしまつ。元々自己主張の少ない人なのだろうが、会話が殆ど単発で終わつてしまつため、全く歩み寄ることができない。ある練習の前の会話である。

「一富さんは普段どんな本を読まれているんですか？」

「いろいろかな」

「例えばどんな本ですか？」

「ん～多分言つてもわかんないと思つよ」

「外国の作家の小説とかですか？」

「うん、まあそんな感じ」

何とも抑揚のない、無機質な会話である。とにかく自分のことに関しては全く情報を公開しない人なのである。あまりにも関係性に进展がないため、和哉はさすがに焦りが出てくる。また、こんなやり取りもある。

「一富さん、僕、一富さんの知識を少しでも吸収したいんです。もしよければ、エフェクターの使い方なんかを教えてもらえませんか？」

「教えたなら私の仕事無くなっちゃうでしょ？細かいことは私が全部やるからいいの。平野君はギターの練習してて」

取り付く島もない。他人行儀な言い方である。一体どうしたら一人

の間にある壁を破ることができるだらうか。和哉は悩んだが、すぐに妙案を思い付く。

(物理的に一緒にいる時間を増やせばいいのだ。そうすれば嫌でも会話をせざるを得ないだらう)

思い立つたら即行動の和哉である。少し勇気が必要だつたが、和哉は「一富にこう切り出した。

「一富さん、実は僕、新しいギターを買おうかと思つてゐるんです。一富さんの技術との相性もあるかも知れないのと、一緒に楽器屋に付いてきてくれませんか?」

和哉がギターを買う予定ではあるのは、本当である。それをうまく一富が付いてくる必要性に繋げた。これはさすがに「一富も断り切れなかつたのだろう。面倒くさそうではあつたものの、ついに「一富は」了解の返事をした。

約束の日、新宿駅で一富と待ち合わせた。渋々付き合わされた一富は明らかに乗り気でない顔つきだったが、和哉は気づかぬふりをして笑顔を作る。

(ちょっと強引すぎたかな)

和哉は少し反省したが、それにしても今日は一人きりでいられる数少ない機会なのだ。喜ばしいことではないか。

だが一人が歩き出してから暫くしても、一向に一人の間には会話がない。一富は浮かない顔をしているばかりで、口を開こうとはしないし、和哉も焦れば焦るほど、話題が出てこない。楽器屋を訪れたときには一、二三言必要最低限の話をしたものの、それから一人は別れ際までついに一言も話をすることがなかつた。別れ際に和哉は言つた。

「今日はありがとうございました。お礼に何か御馳走しますから、お茶でも飲みませんか?」

「いいよいよ。じゃあな

一富はこう返すと、ぐるりと踵を返し、足早に人混みの向こうに消えていつてしまつた。黒くしなやかに揺れる後ろ髪を見つめながら、

和哉は立ちつくした。和哉はこの時ほど寂しい思いをしたことはない。まさかこのような展開になつてしまつとは、思つてもいなかつた。和哉は家に帰る道すがら、一宮を少しだけ憎んだ。

（なんて冷たい人なんだろ？）

しかし、すぐに思い直した。

（付いてくれたことに、まず感謝をしなきゃいけない。恨むなんてお門違いだ）

こんなことを考えながらも、和哉には焦りや不安が募るようになつていた。

季節は秋、冷たい風が落ち葉をさらりと吹くようになると、和哉にも一つの決心が生まれていた。

和哉には眠れない夜が続いた。和哉は長い夜を煩悶と共に過ごした。（いつそこの想いを伝えてしまおう。例え振られたって、その方が気分がいいわ）

そう決心したものの、和哉は恐怖で押しつぶされそうであった。殆ど振られる事が前提である。その事は和哉もよくわかっている。だがそれだけに、恋を失った自分がどうなるのか、バンドの活動に支障が出ないか、気が気でなかつた。それに和哉は口下手で、自分の気持ちを上手く伝える自信もない。気持ちを伝えた後の相手の反応も読めない。

（どうなることやら）

不安はある。だからといってこの想いを胸にしまつて、なかつたことにするなどという選択肢はありえない。それも想いを伝える時期は今しかない。これ以上この気持ちを抱えて生きる事には耐えられない。気持ちは不安定だが、決心は固い。恋を失うかも知れない。それどころかバンド活動に支障が出れば、音楽まで失うかも知れない。今の自分からその一つを取り除いたら、一体何が残るだろうか。全てを失つた自分を、和哉は想像すら出来ない。しかし、それも運命だと、割り切る事も潔くていい。そうなつたらまだゼロからやり直せばいい。ピンチはチャンスでもある。躊躇している場合ではない。踏み出す事でしか人生は切り拓けない。と、ベッドの上で悶々としながら和哉は少しでも前向きになるよう努めた。夜空には満月、雲がかかって朧月夜である。ベッドから立ち上がり、月明かりをたよりに冷蔵庫から水を取り出し、一口飲んだ。

（なんて事はないさ）

和哉は自分に言い聞かせると、ベッドに横になつた。希望とは何だらう。それはこんなにも恐ろしいものか。

結局、和哉は一睡もできずに朝を迎えた。美しい朝日である。橙色の光が、どんよりと疲れた目に沁みる。部屋に差し込む朝日を浴びると、溜め息が出た。が、もう今更眠る気も起きない。

（とりあえず外に出よう）

部屋の空気が、何だかとても淀んでいる気がしたのである。人気のない静かな街を、和哉は歩いた。朝はもう大分冷え込んできている。肌寒い。そういう寒さも手伝つてか、和哉は何か急に人恋しいような気がした。

（大学にでも行ってみるか）

和哉は大学へと足を向けた。

大学の構内はまだ殆ど誰も来ておらず、グラウンドで運動部の学生が朝練をしているくらいである。もうすぐ学園祭の季節らしい。催し物のビラがあちこちに貼られている。

（学園祭の日は大学には来られないな）

どの団体にも所属していない和哉には、何の催し物も関係のない事であつた。それに和哉は怖かった。大勢の人で賑わう喧噪の中で一人感じる孤独。それが和哉にはとてつもなく恐ろしいものに感じられたのである。

（久しぶりに講義にでも出てみるか）

といつても一限目の講義が始まるまで、まだ時間がある。和哉はベンチに座り、持ってきた本を読んでいた。

しばらくすると、ちらほらと学生が歩くようになる。知った顔は一人もいない。この大学に知人は雄一くらいしかいないのだから、当然である。和哉は見知らぬ学生達の顔を、一人一人観察していた。そして改めて、自分が二宮にしか興味がない事に気づかされた。どの顔も皆同じに見えて、興味が湧くどころか、案山子の顔を見るよう表情すら認識できないのである。彼らは和哉にとつて形以上の

存在ではあり得なかつた。どこかでカラスの鳴く声が聞こえる。

（気味が悪い）

和哉は立ち上がり、缶コーヒーを買いに自販機に向かつた。ホットを選んだつもりだつたが、出できたのは冷たい缶コーヒーだつた。

（なんだこりや）

和哉は仕方なくそれを飲んだが、体が冷える上にちつとも温くない。（ずっと講義をさぼつてたから、大学に拒絶されてるのかもな）そんな仕様のないことを考えながら、和哉は寒くなつて校舎に入つた。あまりにも久しぶりの講義だつたため、和哉は講義の行われる教室を忘れていた。しばらく迷いながらも、微かな記憶をたよりに何とか教室にたどり着いた。

しばらく待つていると、学生がぞろぞろと集まつてきた。和哉が思つていたより出席人数は多い。が、それでも教室の席には点々と真面目そうな学生が座つてゐるくらいのものであつた。ちなみに雄一の姿は見当たらない。どうせ奴も講義には出でていないクチだらう。（どうやら俺達は揃つて落ちこぼれらしいな）

講義が始まつた。案の定、教授が何を話してゐるのかさつぱり分からぬ。他の学生達はみんな理解できているのだろうか。意味の分からぬ話を黙つて聞いているのは、苦痛以外の何物でもない。和哉は眠氣と格闘してゐたが、ついに耐えきれなくなつて、命からがら教室から退出してきた。しかし退出してきたはいいものの、和哉にはどこへ行く当てもない。

知人は一人も存在しない。存在するのはのつべらぼうの集団。そして彼らが催す騒音のような学園祭のビラ。意味の分からぬ事を延々と話し続ける教授。和哉は悟つた。

（ここに俺の居場所はない）

居場所はバンドだけだつた。バンドとそれにまつわる恋。この一つを失う事を、和哉は再び恐れた。吹き荒ぶ風を受けて、落ち葉が舞い上がる。講義を終えた学生がぞろぞろと校舎から出できた時、和哉の姿はもうそこにはなかつた。家に帰つて、和哉は深く眠りに落

ち
た。
。

和哉には、お守りがある。それをいつも肌身離さず持ち歩いている。それは最初のバンド練習の時、一富が張り替えた古い弦である。六本の弦が、錆び付いてはいるものの、恐ろしいほどの器用さで纏められ、小さな紙の袋に入っている。これを和哉は鞄のサイドポケットに入れて持ち歩いている。するとそれが時折何かの拍子に鞄の奥から姿を見せる。それが和哉の原動力となり、今まで和哉はギターの練習やら、見てくれを良くする事やら、その他様々な努力を続けてくる事が出来た。他の人間が見たら、気味が悪いと感じるかも知れない。しかし、気味が悪いほどに一富を想う自分を、和哉は誇りに思っていた。自分に酔っていたと言つていいだろう。そういうナルシシズムとは他人の目を気にする事なく行動を起こす際に、絶大な原動力となる。他人の目など気にしていたら、一つの恋にここまで懸命になる事は出来なかつたに違いない。ギターだの見てくれだのと、他人が見ればおおよそお遊びのような事に打ち込めたのは、正にそのお守りとそれが醸し出すナルシシズムの成果であろう。そのナルシシズム、独り善がりの象徴である和哉のお守り。それを和哉は捨てた。真夜中、橋の欄干から、川に放り投げた。

「もう独り善がりは終わりだ」

和哉はそう呟くと、今まで自分が積み重ねてきた努力を思い返した。（やれるだけの事はやつた。後は結果を待つのみだ）

オリンピックの選手が競技を終えて判定を待つ時のような台詞である。もつとも、和哉はまだ競技を終えていない。が、この場合競技そのものが重要なではなく、それ以前の過ごし方が問題であるから、もう結果を待つのみなのである。

冷えきつた空気の中、和哉は風を切つて歩き出す。

（後に何も残らないにしても、死ぬ訳じやない。生きてさえいれば十分だ）

和哉はそう覚悟を決めていた。

バンド練習の日、メンバー全員がスタジオに集まつた。皆それぞれ秋のファッショնに身を包んでいる。夏よりも着るものが多いせいか、それともこの間の北川の説教が効いたのか、みんなそれなりに洒落た格好をしているように見える。

北川が威勢良く、練習の始まりを告げた。

「よし、それじゃあライブで演奏する曲順で、全部通しでやつてみよう。一富、時間を計るの頼む」

「了解」

一富は椅子に座つて足を組み、膝に頬杖を付く体勢で頷いた。

「行きます！ 1、2、3、4」

栗田が例の軽率なカウントを出す。

演奏はメンバー自身が酔いしれるほどに精巧なものに仕上がつていた。北川の歌やフロントマンシップ、和哉の時に呻くような、時に泣くようなギター、雄一の動脈を打つようなベース、栗田の雷のようなドラム。これらが合わさつて、過激に、そして繊細に演奏は完成していた。

全ての演奏が終わつた時、一富が言つた。

「三十八分二十秒」

「よし！ 持ち時間の四十分にほぼぴつたりだな」

北川がガツツポーズで楽器隊を振り返り、視線を送る。視線の先には、楽器隊それぞの満足げな表情があつた。

「アンコールが来た時の為に、もう一曲練習しよつよ」

栗田が調子に乗つて提案した。

「僕、レッチリがやりたいです」

雄一がその提案に乗つた。この二人は共に軽率な性格なので、相性がいいようだ。鉄壁のリズム隊である。

「おいおい、今は余計な事を考えるな。メインのステージに集中す

るんだ。万が一アンコールが来たら、同じ曲を一度やつたつていいんだから」「

北川が持ち上がりた提案を一蹴した。

「平野、お前ずっと黙つてゐるけど、どう思つた？」

北川が和哉に声をかけた。

「はあ、良かつたと思ひます」

「なんだ、氣のない返事だな。まあお前は本当によくやつてゐるよ。

普段大人しいお前のギターが、ここまで表現力豊かだとは驚きだ」

「はあ、ありがとうございます」

和哉は相変わらず氣持ちのこもらない返事をしている。それもそのはずである。和哉はこの練習が終わつた後、一瞬に氣持ちを伝える決心をしてゐるからである。刻一刻と迫つてくる「その時」に、和哉は内心、胃が千切れるような思いであつた。あれほどの決心をしたにもかかわらず、和哉は土壇場を前にして怯えていた。

（この練習がずっと続けばいいのに）

しかしそうはいかない。どんな濃度があるにせよ、時間は平等に流れる。そしてついに最後の演奏を終えたとき、北川が告げた。

「よし、今日の練習はこのくらいにしよう。本番は近いから、腕が落ちないように練習だけはしておくよ」

その瞬間、和哉の鼓動が一層高鳴つた。足がすくんでいる。歯を食いしばるも、汗が止まらない。拳を握るも、力が入らない。腹の底が痛んで、声が出なさそうである。それでも、機材を一つずつ片付けていり一富に、和哉は声を振り絞るようにして話しかけた。

「あの、すいません」

「ん？」

一富は振り返つた。

「ちょっとお話ししたい事があるので、この後ちょっとお時間を頂いてもいいですか」

「うん、分かった」

一富は意外にもあっさりと和哉の誘いを受け入れた。他のメンバー

ものやり取りを見て何かを察したのか、誰も触れてこよつとはしない。和哉は自分の機材を片付けた。背中に気まずい空気を感じながらも、それを気にしているような余裕は、和哉にはなかった。

スタジオを出ると、まるで地雷をよけて歩くよつた緊張感の中で、北川が言つた。

「じゃあ、俺らはそこら辺で飲んでるから。お前らも話が終わつたら来いよ」

「はい。すみません。遅れて行きますんで」

和哉は自分でも驚くよつた冷静さで返事をした。何事もない様な表情を作る事で、この期に及んでまだメンバーには自分の恋を悟られたくなかつたのである。一体どんな精神状態で居酒屋に行く事になるのか、和哉には想像もできなかつたが、後の事などじつでもよい。

「じゃあ、行きますか」

和哉は近くにある公園の方向に歩き出した。後から一宮が後から付いてくる。双方とも一言も発しない。気まずい空気ではある。だが、ここまで来てしまえばもう流れに任せただけだと、和哉は先ほどよりも安定した気持ちでいた。

「じゃあ、この辺で」

和哉は公園の明かりの下にあるベンチを選んで腰掛けた。一宮も無言で隣に座る。

「ライブ、うまくいくと良いですね」

和哉は唐突にこんな事を話しだした。

「そうね、バンドの初ライブだもんね」

一宮は落ち着いた様子である。何のためにここに連れてこられたか、大方予想がついているのだろう。和哉は覚悟を決め、まずは单刀直入に気持ちを伝える事にした。

「一宮さん、実はですね…、僕、前から、その…一宮さんが好きだつたんです」

ついにこの時が来た。和哉はこの瞬間を夢にまで見た。この時の事を思つて、何度眠れぬ夜を過ごした事か。だが、肝心の後の言葉が

続かない。自分は彼女に何をしてほしいのか。付き合ってほしい？いや、この間のようなお互い口もきかないような「データ」はまっぴらだ。セックストをしてほしい？いや、断じてそういう事ではない。そもそも自分は彼女のどこが好きなのか？それもはつきりしない。第一、自分は彼女の事を殆ど知らない。好きになつた理由だって、全くと言つていいほど分からない。人を好きになる事に理由はなさそうである。つまり、自分は彼女のどこが好きで、その彼女に何をして欲しいのか、さっぱり分からない。分からなければども、強烈に好きである事だけは確かなのである。この気持ちをどう表現したら良いのか、和哉にはいくら夜を費やして考へても答えが出なかつた。だから和哉は正直に、率直に想いを伝える事しか出来なかつた。

「どうやつて伝えたらしいのか分からんんですけど…。とにかく好きなんです。その気持ちを、ただ伝えたくて…。すみません、突然こんな事言われても、困るとは思うんですけど…」

言つてしまつた。拙い言葉だつたが、とにかく自分は想いを伝えたのだ。もう結果などどうでも良い。これで自分の想いが、彼女の脳裏に刻まれる事だろう。それで十分だつた。

「ありがとう」

「富は口を開いた。

「気持ちはずごく嬉しい。でもね、私は平野君を恋愛の対象としては見られないなあ」

やはり駄目だつた。だが案外、和哉の心は落ち着いていた。

「そうですか」

「うん、それにね、私、前から平野君の気持ちには気が付いてたんだ」

これは和哉にとつて予想外だつた。

「なんですか？どうして？」

「それは分かるよ。日頃の平野君の態度を見てればね」

そうなのか、自分はそんなに分かりやすい態度を取つていたのか。和哉には特に思い当たる節がなかつたが、今更思い出しても恥ずかしいがる必要もない。

「やうなんですか」

「うん、でもその気持ちに応えられないって分かつてたから…」

だから和哉にはわざと冷たく接していたのだろう。

「それには、皆には言つてないんだけど、私は来年の春からドイツに留学するの」

「えつ」

和哉には、振られた事よりもこちらの方がショックだつた。

「ごめんね。こんな時に言つ事ではないかも知れないけど、前に海外の文学を研究してゐつて言つてたでしょ。その関係でね。一年くらいだとは思うんだけど、とりあえずその期間はバンドの活動にも参加できないと思つし、平野君とも、バンドの皆とも会えないのよね

「でも、僕は一富さんの技術がなきや、ギターとしてやつていけませんよ」

「そこは心配しないで。これから残された時間で、私が平野君に必要な事を全部教えるから。平野君は大変かも知れないけど、マスターーしたらどこへ行つても通用するギタリストになれるよ」

「はあ、そんなに簡単にマスターできるもんでしょうか…」

「そこは頑張り所よ、平野君。やつてみましょ。私も頑張るから。ね

そう言つと一富は微笑を浮かべた涼やかな表情になつた。和哉は一富に初めて心惹かれた時の事を思い出した。

（これだ。この表情だ。これに触れたかったんだ）

和哉の心に明かりが灯つた。この光を、誰も消す事は出来ないだろう。どんな事があつても、この人を好きになつてよかつたと胸を張る。その気持ちを信じて努力した自分に誇りを持とう。そんな気持ちが和哉の心を一杯にした。

（ありがとう、一富さん…）

「じゃあ、そろそろ行こつか。皆が待つてゐるし」

「はい」

二人は並んで歩き出した。冷たい風が、時折一人の間を通り抜けたが、二人の表情は今や穏やかで、一つの恋が終わつた後だというのに、何か一つの幸せを共有しているような、そんな表情にも見えた。

その夜、和哉は飲み過ぎた。メンバー達は一宮との出来事に付いて何も触れてこなかつた。彼らは遅れてきた和哉と一宮を暖かく迎え、笑顔で酒を勧めてくれた。メンバー達の優しさが、和哉の心に沁みた。傷ついている証拠だろう。その傷を潤すように、和哉は飲み慣れない酒を飲んだ。和哉の顔はたちまち真っ赤になり、鬼のような形相になつたが、誰も止める者はいなかつた。和哉にはその日どのようにして自宅に帰つたか殆ど記憶がないが、心臓の鼓動が激しく脈打つ音を聞きながら、俯せで眠りに落ちたことははつきりと覚えている。

目を覚ますと、和哉はベッドからゆつくりと這い出た。頭が重い。少し気分も悪い。和哉は溜め息をついてから立ち上がり、ふらつく足元で洗面所へ向かつた。鏡の中、ひどく疲れきった表情の自分が見える。和哉は鏡の中の自分に言いつけるように言った。

「まだまだ、これからだ」

これから自分はもつと努力しよう。これから自分は一流のギタリストになつて、もつと魅力的な人間になつて、もつと…。一宮が留学先から帰つてきた時には、自信を持つて再会できるようにしたい。和哉はそう思つていた。

その後、バンドのライブが開催された。バンドの演奏は好評を博し、大成功を収めた。特に和哉のギターは多数のバンドマン達の目に留まり、和哉はその日、何人もの人から名前を聞かれたりした。こんな経験は和哉には初めてであり、他人から興味の対象として視線を受けることに、大いに戸惑つた。戸惑つたのには、不慣れであるという事の他にも理由がある。自分の演奏が、完全に自分だけの作品ではないこと。すなわち、一宮の後ろ盾があつたからこそ成し得たものだという後ろめたさがあつたからである。

(これをあと何ヶ月かの間に自分のものにしなくては)

和哉にはその自負心が強く、ライブが成功したとは言え、勝つて兜の緒を締める状態であった。

ライブの後は、お決まりの打ち上げである。この時ばかりは和哉もメンバーと共に羽目を外した。といつても和哉という人間は、どれだけ酔っていても、仲間と騒いでいるように見えても、どこかに冷静な自分を残していて、完全に我を忘れるという事がない。ひとりしきりメンバーとライブの成功を祝つた後、和哉は一人静かに飲んでいる一富のそばに行つた。振られた後だというのに、不思議と気まずさはない。

「今日は、ありがとうございました。皆僕の演奏を誉めてくれましたけど、一富さんのお陰です」

「そんなことないよ。平野君が良い演奏をしたからじゃない。もつと自信持ちなさいよ」

「実を言うと僕、あまり自信がないんです。僕一人の実力じゃないのに、皆それを勘違いして僕の事を買い被つて。皆が思つてるような実力に早く追いつかなければ、何だか焦つてしまつて」

和哉はそう言いながら思つた。

（俺は一富さんに慰めてほしいのか？）

弱いところをさらけ出して、慰めてもらえるのを待つてゐる子犬のような存在。恋は終わったのに、未練たらたらである。女はこんな情けない男を見てどう思うのだろう。そんな葛藤をよそに、一富は和哉がおおよそ期待した通りの返答をした。

「なーに、そんな大した事してないから、大丈夫だよ。心配なんかするより、楽しんでやりなよ」

そう言つと、一富は手元のグラスを傾けて一気に飲み干した。見た目は清楚な雰囲気であるのに、心身ともに強い人であるらしい。そういう強さに和哉は憧れ、溺れた。現に今、母親の腕の中で眠る赤子のように、和哉は安らかな心地がしている。この腕から、もう逃れる事は出来ないのか。和哉は自分の溺れて行く姿を想像しながら、

どうする事も出来ずに、ただ幸福と憂鬱に浸つてゐる。

突然、北川が話に割り込んでくる。

「一富、今日はお疲れさんだつたな。お前がいてこそこのバンドだよ

北川はいつになく真剣な眼差しで言つた。

「ふふ。それはどうもね」

一富は髪をかきあげながら、笑顔で言つた。これが彼女の照れ笑いなのだろうか。

「冗談で言つてるんじゃないぞ。お前がいなけりや、今のサウンドは出来てないんだからな。サウンドだけじゃない。俺はお前がいなくなつたら、正直寂しい。音楽的にも人間的にも、お前はバンドにいなきやならない存在なんだ」

どうやら一富の留学の件は、既に和哉以外のメンバーにも伝わつているらしい。それにしても、北川は何と自分の気持ちを素直に伝えられる男だつ。酒に酔つてているせいもあるだつが、自分もこれほどに気軽に自分の好意を人に伝えられたら、と和哉は思う。

「なによ、まるでもう一生会えないみたいじゃない。たつた一年だよ」

一富はそう言つものの、少し伏し目がちである。

「一年のブランクは大きいぞ。ましてやつとバンドが軌道に乗つてきたところだからな。でもお前が自分のやりたい事をやりに行くなら、俺たちに止める権利はない。せめてお前が戻つてきたり、また一緒にバンドをやっていきたい。勝手な願望だけどな」

北川はそう言つと、ぐいっとビールをあおり、口を拭いながらいついた。

「まあ、異国の方で色々と大変だらうけど、頑張れ。たまには連絡よこせよな」

「うん、ありがとう」

そう言つた一富の目には、微かにではあつたが、光るものを見えた。美しい涙。和哉は心打たれたが、一方でたまらなく悔しかつた。自

分が渾身の力で語つても引き出せなかつた涙。それを北川はいとも簡単に誘い出した。いや、北川は何も泣かせるつもりで言ったのではないだろう。あくまで自然に、思うところを述べたにすぎない。それでも心に響くような背景が、この二人にはあるのだろう。和哉はそれを羨ましく思つた。だからといつ訳ではないが、和哉は次第に黙つていられなくなつた。

「一宮さん、必ず戻つてきてください。僕らがそれまで何とか繋ぎますから」

言い終わつた途端、ふつと二人が吹き出した。和哉は眞面目に言つたつもりだつたが、どうやら雰囲気をぶち壊したらしい。どうせ自分は北川のようにはいかないので。笑いが取れただけ幸運だつただろつ。苦笑いをしている和哉に、泣き笑いの一宮は言つた。

「じゃあ、約束だよ」

約束。約束は守らなければならぬ。一宮が戻るまで、自分は何とか一宮の分も補つてバンドを存続させていかなければならぬ。それが重荷である事に変わりはないが、とは言え「やれるだろうか」から「やらなければならぬ」に変わつたのは大きな違いである。

年末、和哉は輪島の実家に帰った。久しぶりに会う家族。電話では連絡を取つていたが、直に会つとより暖かさが身にしみて伝わってきた。代わり映えしない街の景観、長年住んだ家に染み付いた匂い、母親の料理の味。和哉の部屋は、和哉が家を出て以来そのままにしてあつた。さほど時間が経つた訳でもないが、懐かしい気がした。飼い猫は相変わらず和哉に懐かなかつたが、和哉を見て逃げる訳でもなく、どうやら和哉の顔を覚えているらしかつた。地元に住んでいる友人達とも会つた。友人達はひとしきりそれぞれの近況を語り終えると、早速和哉から東京の土産話を聞こうと、和哉を質問攻めにした。和哉は特別目新しい話を持つてゐる訳ではなかつたが、友人達の期待に応えようと、つい大げさに話をしてしまい、お陰で和哉はその間中羨望の的になつていた。

（東京にいるからと言つて、何か特別な事が出来る訳じやないんだけどな）

心中、和哉はそう思うのだが、

（バンドを組む事が出来たのは東京に行つたお陰か）

と、思い直した。

（それに恋も出来たし…）

無論その恋は失敗に終わった訳だが、あのよつた女性と地元ではなかなか巡り会えそうもない。そう思つと、それなりに上京した甲斐はあつたのではないかと、和哉には思えてきた。

和哉には、昔から大好きな場所がある。日本海に沈む夕日を見る事が出来る浜辺である。輪島はこの地方にしては珍しく、大して雪が降らない。そのためこの季節でも足場を気にせずに浜辺を歩く事が出来た。潮騒の音を聞きながら夕焼けに染まる空の下を、和哉は歩いた。足元の砂が「キュッキュッ」と鳴く。水平線の上でぼんやりと紅い光を帯びる夕日と、それを受けて波立つたびにきらきらと

輝く海。見慣れた景色とは言え、世の中にこれほどまでに美しいものがあるだろうかという気が、和哉はしてくる。しばらく感傷に浸つてそれを眺めていると、ある想いが脳裏をよぎった。

(一宮さんをここに連れてきたかったな)

東京育ちの一宮がこの景色を見て、どう思つだろうか。もしかすると和哉の思つほど感傷的な想いは得られないかも知れないが、とは言え過去に幾度も自分を励ましたこの景色が、何よりも誠実に自分というものを語つてくれるような気が、和哉はしていた。元々愛郷心の薄い和哉は、珍しくそんな事を考えていた。

年を越してすぐに、和哉は東京へ帰る事にした。東京に帰つて、一刻も早く一宮との約束を守るための準備をしなければならないと考えたためである。家族にその旨を伝えると、その晩はいつになく豪華な食事が食卓を埋め尽くした。最後の日くらい旨いものを食わせようと、家族が用意したのだろう。そんな家族の元を離れるのが、和哉は少し名残惜しくもあつたが、こればかりは仕方がない。和哉は家族との団らんの中で、最大限に家族の温もりを感じていた。

次の日、和哉は家族に見送られ、実家を後にした。途中、何度も振り返つて家族に手を振つたが、やがて家族が見えなくなると、気持ちちは瞬時に東京で自分がなすべき事に向かつた。

(一宮さんから一つでも多くのことを学ぼう。そしてそれ以降のバンドの活動に備えよう)

思えば、和哉は実家にいる間中そのことで頭がいっぱいだった。心だけ東京においてきたような気分でここ何日かを過ごしたせいか、気持ちに焦りがあつたのかも知れない。

和哉は東京に帰り、まだ正月だと呟つた。「一富に連絡をして、ギターの機材に関する技術を教えてもらえたるよ」に頼んだ。それから自分でスタジオを予約し、場所と時間を一富に伝えた。そこに一富を呼び、教えを請おうと考えたのである。

指定した日に、和哉がスタジオで待つて居ると、一富が大きな荷物を持って現れた。

「お待たせ、今日は初レッスンね」

初、と言つことは、これから何度となくレッスンが続くのだ。わかつてはいたものの、それを一富の口から聞くと和哉は心が躍るような感覚であった。

「すみません、正月早々に。早く技術を覚えたかったのですから「いいのいいの。正月なんてどうせ暇だし。元はと言えば私のせいでこうなったんだから」

そう言つと、一富は荷物を下ろし、何やらたくさんの中機械や配線、それに色とりどりの書籍を取り出した。

「まずこの本は全部平野君にあげるね。機材の種類、取り扱い方の本から、その仕組みを理解するための本、電子音響工学の本まであるから、参考にしてみて」

電子音響工学、と言われても和哉はそのような学問を聞いたことすらない。そもそもギターなどという一種の娯楽を扱う機材に、そんな偉そうな名前の学問が必要なのか。和哉は戸惑いを隠せなかつた。文系の和哉には、そのような学問を一から学ぶ自信など全くな。

「あはは、そんなに構えなくても大丈夫。これを全部覚えろつていふわけじゃないから。実際に必要な事は限られてるし、それはちゃんと口頭で説明するから。」

「よかつた。一瞬もう駄目じゃないかと思いましたよ」

和哉は胸を撫で下ろしたが、同時に思つ。

(一)「和さんはこんなものを読んで音作りをしていたのか）

見るとかなり古めかしい本もある。父親からのお下がりかも知れない。じれだけの量の本を読破するとなると、相当の時間がかかるだろ。となると、二宮は幼少、少なくとも十代の前半頃からこういつた本に親しんでいたのではないか。と、和哉は想像する。そんな二宮の音に近づくために、自分は一体何年かかるのだろうと、和哉は気が遠くなる思いである。それを今自分は三ヶ月で形にしようとしている。

(まあ、やるしかないか)

覚悟は既に出来ている。出来る限りの努力をするしかないのだ。

それから、和哉は二宮から様々な知識を教わった。元々独学でしか音楽的素養を身につけた事のない和哉には、教えてもらつ行為そのものが新鮮であった。話を聞いて、ノートを取つたりもした。普段大学の講義に出ていない和哉には、それ自体がかなり久しぶりの行為である。それだけ二宮から学ぶ事は多かつたし、また、学ぶ動機がはつきりしているので、熱心に学ぶ事が出来たのである。

しかし、機材を並べながら熱心に説明する二宮の横顔を見ながら、和哉は思う。

(皮肉なものだ)

恋が終わつた後にこうして一人でいる時間が増えるというのは、和哉にとってこれ以上ない皮肉である。それも目の前にいる二宮は、和哉が思い焦がれていた時の二宮とは別人のように明るくて、優しかった。よほど和哉が冷たくされていたのか、それとも機材の説明をする時には別人のようになるのか、恐らく両方あるのだろう。

「ちょっと、聞いてる?」

「あ、聞いてますよ」

和哉は慌ててノートを取る振りをする。

「うそ、今違う事考えてたでしょ」

そう言うと、二宮はくすくすと上品に笑い、立ち上がりつて壁にもたれかかった。

「まあ、そんなにいつべんに言われても頭に入らないか」

防音室の真っ白な壁を背景にすると、黒く長い髪がくっきりと映える。服装もいつものようにモノトーンであつたので、全身が芸術作品のように美しかつた。白い壁が似合つ女性といつのも、そつそつお目にかかるものではない。

「いや…」

和哉は口ごもつた。

（これは先が思いやられるな）

それから三ヶ月、和哉は一富の猛特訓を受けた。それは和哉にとって至福の時間であつた。レッスンが終わり、一富との別れ際になると、和哉はいつも言葉にならない寂寥感に襲われた。

（後何日こうしていられるだろつ）

一富は、四月の初旬には日本を発つらしい。その時が近づくに連れて、和哉は時間の流れを恨めしく思つた。こんな気持ちになつたのは、子供の頃夏休みの終わりが間近に迫つた時以来だ。

バンドの全体練習も平行して行われたが、この期間は和哉の勉強期間という事で、ライブ等への出演はなかつた。メンバー達はライブに出たくてうずうずしている。今後すぐにライブに出演できるかどうかは和哉の成長次第であるため、メンバーの和哉に掛ける期待は大きかつた。

「平野、音作りの方、ちゃんと勉強してるか？」

雄一が説教がましく聞いてくる。

「そりやしてるさ。皆の足を引っ張りたくないからな」

「そうか。あんな立派な先生もいるしな。いいな。俺も誰かにベースを教わってみたい」

そう言つと、雄一は溜め息をついて壁にもたれかかつた。奇しくも以前、一富が垣間見せたシチュエーションと同じであつたが、雄一がやつても何の感動もない。北川が横から口を挟んだ。

「ベースなら俺が教えてやるぜ」

北川は元々ベースボーカルである。ベースにもよほど自信があるの

だろう。が、雄一はぬけぬけと答えた。

「いや、女人人がいいです」

一瞬、この言葉に本心を見透かされたよつた氣がして、和哉はぎくりとした。

「馬鹿。お前にはもう教えてやらん」

北川が言つと、その場にどつと笑いが起こり、和哉はつられて苦笑いをした。

和哉は事実、必死で一宮から教わつた知識を頭に詰め込んでいた。覚えた知識を活用し、実際に自分で音を作つてみたりもした。その努力の甲斐あつてか、和哉の作る音も大分様になつてきつたようであつた。和哉の音が、少しずつ一宮のものに近づき始めた頃、東京には再び桜の花がほころび、和哉は大学二年生になつていた。

そして最も和哉が恐れていたその日も、この穏やかな季節とともに訪れる。

その日、和哉は一宮を見送るため、空港に足を運んだ。和哉は空港に着くと、辺りを見回した。一宮はまだ来ていない。和哉は空港のロビーで一人、一宮を待つ。空港の館内は、色とりどりのキャラーケースを引いて颯爽と歩く人々が行き交い、家族連れが賑やかに旅行の計画などを話し合っている。活況を帶びた館内で、和哉はベンチに腰掛け、うなだれていた。船出の日としてはこれ以上ないほどに、今日は快晴である。窓の外には滑走路に滑り込んでくる真っ白なジャンボ機が見え、その向こうに青く東京湾が広がっている。

（良い眺めだな）

それでも和哉の心は晴れない。見送る立場といつのは、何と寂しいものだらう。見送る相手と別れの直前まで一緒にいたいという気持ちが、もつすぐ別れなければならないという事実を一層リアルにする。笑顔で見送りたいと思つてはいてもどこか表情が曇つてしまつのは、そういう事実に直面していれば仕方のない事かも知れない。和哉がぼんやりと外を眺めていると、一宮が急に隣に座つた。

「お疲れ」

和哉ははつとして振り向く。見ると一宮は眩しいほどの笑顔である。こんなときでさえ、一宮は美しい。

「わざわざ来てくれてありがとう。でも他のメンバーはいないのね」「ははは、まあ僕が一番お世話になつた訳ですからね。メンバー代表という事で」

無理に笑顔を作つて、和哉は言った。和哉が見送りにきたのは、和哉が自分から見送りたいと一宮に申し出た経緯があった。そのために場所と時間を一宮から聞いたが、それを他のメンバーに伝える事はしなかつた。一人で見送りたかったから、というのもあるが、それ以上にその気持ちを見透かされ、

「いいから、お前一人で行つてこいよ」

とメンバーから言わるのが怖かったのである。

「しかし、今日はいい天気ね」

「そうですね。きっと一宮さんの前途も洋々ですよ」

和哉は気の利いた事を言つたつもりだったが、会話がそこで途切れてしまった。そう言つた和哉の表情が心持ち暗いことに、一宮は気が付いたのかも知れない。そのせいか、それまで表情の明るかつた一宮も、少し表情を曇らせた。

「あの」

和哉は思い切つたように言つた。

「今まで、本当にありがとうございました」

和哉は音楽を、青春を、努力の意味を、自分の持ち得る全てを、一宮から教わった。今の自分は、一宮の存在なくしてあり得ないと、和哉は考えていた。和哉の「ありがとうございます」には、そういう意味が込められていた。

「ううん、私は何もしてないよ。平野君じゃ、よく頑張ったよ」

「僕は」

「寂しいです」

とは、和哉は言わない。その気持ちは胸にしまって、和哉はいつも言った。

「きっと約束を守りますから」

一宮が戻るまでバンドを存続させる約束である。それを守る事が、一宮への恩返しとして唯一自分に出来る事だと思ったのだ。

「そうね。私もきっと、帰国したらバンドに戻る。私だってバンドの事は忘れないもの」

音楽が好きな一宮。彼女は演奏こそしないけれども、バンドは自分が音楽を作り出す事に参加できる唯一の場所だった。そのバンドを一時的にせよ抜ける事は、彼女にとって苦渋の選択だったに違いない。

「さてと、そろそろ行かなくちゃ」

一宮は立ち上がり、大きく伸びをした。

「じゃあ、元気でね」

「ええ、お気を付けて」

一富はキャリーケースを引つ張り、搭乗口の方へ歩いていった。手荷物検査を終えると、一富は和哉の方を見て手を振り、搭乗口に入つて見えなくなつた。和哉はすぐさま展望デッキへ上り、一富が乗つたであろうジャンボ機を見つけた。柔らかな口差しを浴びて、和哉はフランスの網目越しにそれを見守つた。そしてついに、ジャンボ機が動き出した。ゆっくりと旋回したジャンボ機は、滑走路で助走を付け、その勢いでふわりと浮き上がつた。ジャンボ機の姿が段々と小さくなるのを、和哉は見つめていた。

(一富さん…)

エンジンの轟音が聞こえなくなる頃には、一富の乗つたジャンボ機は海と空の彼方に消えていた。

(行つてしまつた…)

和哉は館内に戻り、エスカレーターを下りていつた。どうしようもない寂しさが喉元にこみ上げてくる。和哉はふと館内のレストランに目をやつた。

(ビールでも飲んで気を紛らわすか)

和哉は最近、二十歳になつていた。今は堂々と酒を飲む事が出来る。酒の味も大分覚えた。

(いや、辞めておこう)

昼間から赤い顔をして歩くのはみつともない。それ以前に、そのような気分ではない。

外に出ると、相変わらず空は田畠がするほど青さであった。和哉の喪失感を表現したかのようである。一富との思い出を一つずつ思い出しながら、和哉は帰宅した。しかし、和哉が一富と会つたのは、これが最後であった。

和哉にとつて、二富がいなくなつた生活は空虚そのものであった。心にぽつかりと穴が空いたようで、その穴を埋めてくれるものは何一つとしてなかつた。勿論予想していたことではあつたが、実際に身に起こつてみると、自分を抜け殻としか形容できないほどにその打撃は強力であつた。特にバンド練習の時などは、今までいた二富がいなくなつたことが目に見えて、その気持ちが増幅した。二富が物理的にいなくなつたこと以外にも、喪失感を催す要因があつた。それはギターの音である。和哉が懸命に音作りを学んだにもかかわらず、どことなく二富の音とは違うのである。バンド全体で音を合わせると、それが更に顕著になる。迫力がなく、存在感に欠ける様な音なのである。といつて音量を闇雲に上げると、他の楽器とのバランスが悪く、一人だけ浮き立つてしまつ。

（やはり二富さんがいなければ駄目なのではないか）

それを否定しようと必死に工夫を凝らしてみるが、二富の音に近づけようとすればするほど、かえつて遠ざかっていくような気がするのである。次第に良くなつてはいる、とメンバーは励ましてくれるが、和哉には全くそんな気がしない。むしろ次第に頼りない、弱気な音になつていき、和哉自身の気持ちまでが萎えてくるのである。またそういう心理を反映してか、今まで問題のなかつたギターを弾くことですから、段々と覚束なくなつていつた。さすがに見るに見かねたのであつた。北川が重大発表をする。

「来月、また例のバンドと対バンでライブに出ようと思つ」

北川にしてみれば、和哉のモチベーションを少しでも上げようとしたのに違ひない。しかし、和哉にとつてこれほどの重荷はなかつた。今の自分に、果たして他人に聞かせられるような演奏が出来るだろうか。と思わずにはいられなかつた。もっとも、このまま何の手段も講じじずにいれば、ますます弱気になつていくだけであることは目

に見えていた。それ以前に、ライブに出たくない、などと言つた。とは和哉の自尊心が許さなかつた。

(やつてみるしかない)

と思いつながらも、和哉のギターを持つ手は小刻みに震えていた。ライブまでの一ヶ月間、和哉は恐らく気持ちだけは以前のライブよりも切迫感を持つて練習に励んだ事には相違ない。しかし、その気持ちとは裏腹に、和哉の手はギターから遠のいた。練習するほどに納得のいかないプレイになつていくと、反対にプレッシャーだけが日に日に増幅していくのである。和哉は、ついにギターに触る事すら出来なくなつた。勿論和哉も逃げてばかりいた訳ではない。「富との約束を思い出し、時折がむしゃらにギターを練習してみる。しかしそれと同時に「富の作った音も思い出し、それを自分の出す音と比べてみると、嫌気がさすほどに雲泥の差があることに気が付いてしまうのである。「富に音作りを教わった日々を、和哉は思い出した。懸命に自分の知識を伝授する「富。その熱意に、自分は応える事が出来ないのか。と、和哉は自分を情けなく思つた。しかし人間とは実に狡猾に出来ているものである。必ず自分が傷つかないような逃げ道を考えつくるのである。

(そもそも、俺の音作りが完璧に出来てしまつたら、帰ってきた「富さんはもう必要ない事になりはしないか)

勿論、その前にバンドが存続できなければ元も子もないことは、和哉もよく理解している。しかし、何も完璧な演奏をしなくても、バンドは存続するだろう。完璧を求める必要などないのだ。そういう考え方が、幾分か和哉の気持ちを楽にした。そして気持ちが楽になつた分、和哉は練習を怠るようになつた。

(練習をしたところで、深みにはまつて腕が落ちていくだけだ。こういう時は休息も必要に違ひない)

和哉は自分の腕が落ちていくのは、あくまで精神的な問題であり、少し間を置けば気分も落ち着き、また元のプレイが出来るようになると考えたのである。そうして和哉は自分に言い訳をしつつ、徐々

にギターから離れていった。

そして一ヶ月後、ライブ本番を迎えた。一度目のライブという事もあり、和哉は前回ほど緊張をしていなかつた。それどころか、気分はいつになくリラックスしていた。

（前回もあれだけ演奏出来たんだから、今回だつて大丈夫さ）
和哉は心中、そう何度もつぶやく事で自分を励ました。もつとも、そう励ます必要があつたということは、やはり一抹の自信のなさがあつたのだろう。それをかき消すようにして、和哉は大丈夫だ、と何度も気持ちを立て直した。

リハーサルも問題なく終わつた。後は本番を待つのみである。そして和哉のバンドの出番が目の前に迫つた時、和哉が舞台裏の控え室から観客席を覗くと、ある事に気が付いた。観客席の最前列には、前回のライブ終了後に、和哉の名前を聞いてきたり、ヘルプを頼んできた人たちが顔を揃えていたのである。和哉の演奏を心待ちにしているのだろう。自分にもファンがいたのか、という嬉しさと、彼らの期待を裏切つてはいけないという重圧が、同時に和哉の心を揺さぶつた。ギターを持つ手が震えてきた。

（落ち着け。前と同じようにやれば良いのだ）

そう自分に言い聞かせるごとに、和哉の表情は固くなつていった。そうしてついに本番が始まつた。演奏は滞りなく進んだ。和哉も出せる力を出し切つた。つもりだつた。が、観客席を見ると、最前列に座つていた人たちは、殆どが既に席を立つていて。残つてゐる観客はまばらで、それも退屈そうに携帯電話をいじつてゐたりする。和哉がその事に気付いたのは、バンドの演奏も終盤に差し掛かつた時の事である。それまでは、自分の演奏に必死になつていて、全く気が付かなかつた。つまりそれだけ余裕がなかつたということだろう。演奏が悪かつたのか、あるいは和哉の必死で演奏をしている「守りに入った姿勢」が、おおよそロックのイメージとかけ離れていたのか、とにかく観客が和哉に失望して去つていったのは確かであった。

ライブ終了後、和哉は誰からも声をかけられなかつた。唯一北川が和哉の肩をぽんと叩き、

「お疲れ」

とだけ言い残して、控え室に消えていった。北川の背中は、いつになく寂しげであつた。その時、和哉は確信した。

（やはり俺は駄目なのだ）

この日以降、和哉は自分の才能を疑う事になる。それは和哉が長年培ってきた価値観が、音もたてずく崩壊していく瞬間だつた。

和哉は考えた。

（俺には音楽の才能が、どうやらないみたいだ。今まで、音楽が俺の全てだった。今まで何をやってもうまくいかなかつた。勉強もそこそこだつたし、運動も苦手、人間関係はもつと苦手で、友達は少なかつたし、恋愛などもつてのほかだつた。でも俺はそんな事はちつとも気にしなかつた。音楽だけは人よりも出来たからだ。合唱コンクールでピアノの伴奏をすれば伴奏者賞を取つたし、ギターは誰よりも上手く弾ける自信があつた。俺は音楽をやるために生まれてきたのだ。そう考えるだけで、他の何事も気にはならなかつた。だが東京に出てみたら、いかに自分が井の中の蛙だつたか思い知らされたつて訳だ。確かに、一富さんがいれば、俺はそれなりにやつていけるかも知れない。だがいなくなつてみたらこのざまだ。それは決して一人前とは言えない。遅かれ早かれ実力のなさが露呈する事だらう。先が知れている。かといって、音楽を捨てたらどうなる？俺には他にやる事もない。今から大学の授業を真面目に受けるか？既に手遅れだらう。第一真面目に受けてどうなる？何の役にも立ちはしなさそうだ。じゃあ役に立ちそうな資格の勉強でもするか？何の興味もないような勉強を続けられるのか？とてもじやないが無理だ。就職はできるだらう。このまま単位さえ取つていれば、大学を卒業できない事はない。だが何の仕事に就くんだ？俺には何も出来ない。無理して興味も能力もない人間が仕事をしたつて、自分のためにも社会のためにもならないだらう。やはり俺には音楽しかないのだ。しかし待てよ。そもそも何故音楽じやなきやならなかつたんだ？小さい頃からピアノを習つてたから？それじゃあ俺は自分に才能があるのかどうかよく確かめもせずに、たまたまそれが与えられたから、自分には音楽しかないなんて思い込んでたつて事か？そもそも俺は本当に音楽が好きなのか？ただ他がうまく行かないから、

音楽に逃げ込んでいただけじゃないのか？人生大逆転なんて言う恥ずかしい発想で、脚光を浴びる事を夢見ていただけじゃないのか？要するに、現実から逃げ込む口実が出来て、その上夢なんて言う美名の下に自己顯示欲を満たす事の出来るもの。それがたまたま音楽だったというだけかも知れない。音楽じゃなくても良かつたのだ。音楽そのものが好きだった訳じゃないのだ。大体、音楽の非力を、俺は良く知っている。音楽に何が出来る？ジョン・レノンが『イマジン』を歌つても戦争はなくならない。音楽界随一の勝者が争う事を否定するなんて、滑稽な話だ。「ナンバーワンにならなくても良い」と歌つている歌がチャートでナンバーワンになった時には、音楽の発するメッシュセージなど全て嘘つぱちだと知るべきなのだ。ロックンローラーの破天荒なイメージも同じだ。彼らがステージ上で飲むウイスキーの瓶には、紅茶が入っているのだ。ただのイメージ戦略だ。音楽は何の思想も、力も持たない。あるのはビジネスだけだ。一発当ててやるのと田論む野心家たちが、猿真似のような事をして芸能界でやつていいこうとする、その手段でしかない。音楽はなればならないものなんかじゃない。その事実に、大分前から俺は気付いていたはずだ。それなのに、それに気付かぬふりをして、現実から逃げたいがために、音楽は自分の全て、なんて自己暗示をかけていたのだ。なんて馬鹿らしい！）

和哉の信じていたものは、ずっと大切にしてきたものは、全て偽物だった。それを気付いていながら、気付かぬ振りをして自分の都合のいいように解釈し、それがあたかも本物であるかのように振る舞つてきた。その事に、和哉はこのような瀬戸際に立たされるまで、気付いていなかつた。言わば自分で自分を騙し続けてきたのである。ようやくその自己欺瞞に気付いた和哉が、この次に取る行動と言えば、それは一つしかない。和哉は北川にメールを打つた。今まで意識はしていなかつたが、やはりあのバンドのリーダーは北川だろう。「突然ですが、一身上の都合により、バンドを辞めさせていただきたいと思います。誠に勝手ではありますが、どうかご了承ください」

メールを送信する直前、ボタンを押す和哉の指が、一瞬止まった。ほんの一瞬だけ、二宮の事を思い出したのである。

（一宮さん、約束、どうやら守れないとあります…）

和哉はメールを送信した。

（これで終わったのだ。俺は明日から、新しい何かを探さなきゃいけない）

人生の迷宮に迷い込んだような状態の和哉。しかしその心は、驚くほど爽やかだった。新しい何かがまた始まる、という予感であろう。春は希望の季節。和哉が初めてバンドのメンバーと会った日から、丁度一年が経っていた。

次の日、和哉は北川に呼び出された。場所はいつもバンド練習をしていたスタジオにほど近いカフェである。和哉はそこに行くと、北川は難しい表情をして下を向き、腕を組んだまま席に座っていた。その表情の意味するところが和哉には分かるため、近づくのに躊躇していると、向こうからこちらに気付いた。

「おう、まあ座れや」

「はい」

和哉は席に着くと、店員にアイスコーヒーを注文し、上着を脱いで椅子にかけた。あくまで平静を装つ和哉であったが、それでもその膝は震えていた。

「メール見たぞ。あればどうこうつもりなんだ？」

和哉は冷静を装つた表情で、手を膝の上に置いた。北川の顔を直視できないまま話しだした。

「ええ、思つところがありまして、バンドを、というよりも音楽自体を辞めようと思つんです」

「その思つところってのは何なんだ？まさかライブでたつた一回失敗したくらいで、そこまで思い詰めるという事もないだろう？」

「そんな事ではありません。確かにライブで失敗したのはそれなりに落ち込みましたけど、それは単なるきっかけに過ぎません。それからずつと考えてたんですけど、僕はどうやら音楽が好きじゃなかつたみたいなんです」

「そんな訳ないだろ。音楽が好きだから、お前は見ず知らずの俺たちのところに来てまでバンドをやりたいって思つたんだろ？今まで努力できたのも音楽が好きだからじゃないのか？」

「音楽が好きなわけではなかつたんです。好きでもないのに、僕はミュージシャンになつて一発当ててやろうなんて甘い事を考えていたんです。音楽よりも、そういう地位や名声の方が好きだつたんで

す

「それの何がいけないんだ? バンドやつてる奴なんて皆似たような気持ちでやつてるぞ?」

「皆はそれで良いのかも知れないですけど、僕は嫌なんです。音楽がそんなものだつて考えたら、音楽が急につまらないものに思えてきたんです。第一、僕にそうなるだけの才能があればまだ良いんですけど、僕にそこまでの才能はありません」

和哉はいつになく断定的な口調で言つた。ここまで切り返していくる和哉を、北川は初めて見ただろう。

「そこまで思い詰めてるのか…。平野、お前ギターを始めたのはいつだ?」

「中学一年生の時です」

「そうか、じゃ中一の頃からずっと音楽が好きだつた訳だよな?少なくともそう思つてやつてきた訳だよな?それを今になつて急に嫌いになれるのか? それで後悔しないつて言えるか?」

「後悔しないかどうか、はつきりとは分かりません。でもとりあえず今は嫌いです。今嫌いなものをこれから好きになる自信はありません」

「どうか、しかし俺らもこれからつて時だからな。これはこっち側の都合だが、お前に辞められるとバンドは非常に困るんだ。俺らの気持ちを、汲んでみてくれたりはしないか?」

和哉は心が痛んだ。北川は、バンドはこんなにも自分を必要としてくれている。その気持ちがどれほど和哉の後ろ髪を引いた事か。しかし、和哉の返答はこうだつた。

「すみません、バンドのメンバーには本当に申し訳ない気持ちで一杯です。しかし僕は、他人のために生きている訳ではありませんので…」

この一言は決定的だつた。和哉の頑なな気持ちが、もうこれ以上動かない事を、北川は確信したのだろう。

「わかった。そこまで言うなら、もう止めないさ。お前がこれから

何をしようとしているのかわからんが、頑張ってくれよ」

北川は諦めたようにそう言つて、苦みばしった表情で「コーヒーを一口飲んだ。

「すみません。本当にすみません
和哉は必死で頭を下げた。それは本心だつた。謝つても謝りきれな
い思いでそう言つた。

「それと」

北川はバッグの中から何か取り出した。手帳であつた。北川はそのページを開いて、和哉に見せた。何やら住所と電話番号がいくつか書いてある。

「これは俺と栗田、それに一宮の連絡先だ。バンドを抜けたからつて、個人的な付き合いまで終わつた訳じやない。会いたくなつたら、いつでも連絡をくれ」

そう言つと、北川は手帳からそのページを破つて、和哉に手渡した。北川はこうなる事を予想して、予めこれを用意していたのだろう。

「ありがとうございます」

受け取つた和哉は、それを眺めながら思つた。

（もう会つ事もないだらうな）

その後、和哉は北川と別れ、そのまま帰宅した。放心故か、その道のりは通り慣れた道とは思えぬ程一々和哉の感傷に触れた。家に着き、和哉が部屋を見回すと、隅っこでギターが寂しそうに横たわつていた。

（もう鳴らす事もないだらう）

高校時代、和哉は部屋で一人、無心にこのギターを弾いていた。いつかバンドでそれを弾く事を夢見て。

（まさかこんな事になるとはな）

一宮から譲り受けた書籍が、本棚に並んでいる。大きな荷物を持つ一宮が思い出された。

（これももう必要ない）

和哉はもう、それ以上何も考えないように努めた。目頭に熱いもの

を感じたからである。が、思い出とはアルバムのよつたもので、ひとたびそれを開けると、次々とページをめくるよつて思い出が連鎖するのである。心のアルバムを閉じる事が出来なくなり、ついに和哉の田からは涙がこぼれ落ちた。

（俺はこれからどう生きれば良いんだ？まるで見当がつかない）
思い出に別れを告げることは、どうやらこれ以上なく思い出を呼び起しそしてしまつものらしい。

第一十五章

数日後、今度は雄一に呼び出された。和哉は頭を搔きながら、待ち合わせた大学の食堂に向かう。

（もつ何も話す事はないんだが）

必要な事は北川に全部話した。これ以上同じ事を説明するのも、たいそう気疲れのする事だ。と、和哉は内心辟易していた。食堂に着くと、和哉は雄一を探し当てた。

「よつ、待たせたな」

和哉は何事もなかつたように挨拶し、席に座つた。

「平野、北川さんから聞いたぞ」

「ああ、そうか。まあそういう事だから」

和哉は素つ気なく答えた。

「俺はな、正直よく分からんのだ。お前が何故そんな気持ちになつたのか」

「ああ、俺にもよく分からぬ。北川さんに話した事しか、俺は言えないよ。それが全てだ」

「お前がいなくなつたら、バンドはどうなるんだ？分かつてゐるのか？」

と、いつになく真剣な田で、雄一は言った。

「新しいギタリストを見つければ良い。きっとそこいら中にいるはずだ」

和哉はあくまで冷静に返す。

「俺はな、お前と音楽がやりたかったんだよ。俺だけじゃない。他のメンバーだつてそうだ」

雄一は段々と熱を帯びた口調になつてきた。

「悪いが、それだけは諦めてくれ」

和哉がこつ返すと、雄一はいきなり立ち上がり、上氣した表情で言った。

「お前がいなくなつたバンドでやつていく自信なんて、俺にはないんだよ！」

そんな事はないだろう。と、和哉は思ったが、雄一の意外な純情さに少し同情した。その同情を振り払うように、和哉はこう答えた。

「じゃあ、お前も辞めれば良い」

雄一は返す言葉を失い、啞然とした表情になつた。

「また飯でも食おう」

和哉はそう言い残すと、その場を去つた。その表情に迷いはなかつた。ただ、一年前に雄一と初めて会つた時の事を思い出して、鼻で溜め息をついていた。

（親友まで失つたか）

和哉はこの大学に雄一しか友人がいなかつた。が、雄一と会えなくなつた和哉が全くの孤独かと言えば、そうでもない。和哉は一年生になつてから、会計学のゼミに入つていた。自分の成績でも入門を許可してくれるゼミがあるとは、和哉には意外だつた。まだ日が浅いため、友人と言えるような人間関係は出来ていなかつたが、これから作つていけば良い。もっとも、和哉は友人が欲しいなどとは少しも考えていなかつた。

（俺は一人が好きなんだ）

音楽がなくなつた今、和哉は元の自分に戻りつつあつた。一人が好きで、無口で無気力な自分に。一応ゼミに入りはしたが、勉強を真面目にする気もなかつた。ゼミに入つたのは、周りに流された、というのと、和哉の根底にほんの少しだけ根付いている帰属意識からくるものだつた。つまり何の目的意識もなく、何となくゼミに入つただけなのである。

ゼミの教授は、山本教授と言つて、若い、いかにも知的な雰囲気の漂う教授であつた。和哉はその教授の講義に殆ど出席した事はなく、勿論彼の専門分野に興味がある訳でもなかつた。しかし成績の芳しくない和哉を拾つてくれたのは、この山本教授のゼミだけだつたのである。もっとも、和哉は山本教授の誠実で優しそうな風貌に

好感を持つではいた。加えて最初の授業で集まつた時に分かつた事だが、このゼミは全体で十人程度のごく少数のゼミだつた。あまり大人数でがやがやと騒ぐような雰囲気でもない。集団行動の苦手な和哉だつたが、ここでなら何とかやつていけるかも知れないと思つたのである。ところが、ゼミが始まつて一ヶ月も経たないうちに、それが全くの錯覚であつたと、和哉は思い知るのである。

まず、話に全く付いていけない。ゼミの活動は、主にグループでの研究、及びそのプレゼンテーションだったが、グループ単位での議論に参加する事が出来ないのである。下地となる知識がないので、当然である。常に和哉の周りでは、聞いた事のない専門用語が飛び交っているような状態であった。加えてグループのプレゼンテーションになると、一応準備はしていくものの、和哉の発表はしどりもどりであつたし、第一自分でも何を話しているのか殆ど分からぬところである。ましてや発表の途中で質問でも飛んでこようもとこう有様だつた。ましてや発表の途中で質問でも飛んでこようものなら、他のゼミ生に田配せをして、助けを求めるしかなかつた。それでも最初は騙し騙しやつていた。何とか他のゼミ生に知識面で追いつこうと、勉強もした。しかしゼミが始まつて半年と経たないうち、和哉の知識が全くゼミ活動に貢献できないものである事を知つた他のゼミ生達は、露骨に和哉を馬鹿にし始めた。プレゼンテーションの最中、話し手のゼミ生が聞き手である和哉に、「平野君、ここ分かりますか?」などとわざわざ名指しで聞いてくるのである。

「ええ、分かりますよ」

と、分かりもしないのに和哉が答えると、「じゃあ説明してもらつても良いですか?」

などと、なおも食い下がる。もつとも、和哉もそのような嫌がらせに慣れてくると、

「説明するのはそちらの役田でしょ?」

といった様に、涼しい顔をして切り返す事が出来るようになつていたのだが、内心ではやはり不愉快であった。とはいへ、自分がこのような扱いを受ける事を、仕方のない事だと和哉は思つていた。ゼミの活動に貢献できないばかりか、その質を下げていいのであるから、自分がここに在籍していることを申し訳ないとすら思つていた。

そういう申し訳なさが故か、和哉は柄にもなく、人一倍明るいキャラクターで通した。勉強はできないけれども、誰に嘲笑されようとも決して笑顔を絶やさない、言わば道化のようなキャラクターである。そうまでしないと、自分の存在価値がなくなりそうだったからである。和哉は内心、道化を演じてまでゼミに居続ける理由が分からなかつたが、とにかく必死で自分の居場所を守ろうとしたのである。しかし、そのことが、思わぬ副産物をもたらした。そういう明るさが幸いしてか、和哉は女子学生から絶大な支持を受けたのである。ゼミが終わると、必ず誰かしらの女子学生が和哉の周りに寄り付き、話しかけてきたし、中には必要もないのに毎日のようにメールをよこし、デートの約束を取り付けようとしてくる者までいた。これは和哉にとって予想外の事であつたが、その心境は複雑であった。和哉に寄り付く女子学生の中で、誰一人として和哉が本気で好きになれるような人はいなかつたし、それどころか、この期に及んでまだ二宮の事を時々思い出してしまうのである。そう言つた未練が心の奥に根付いている事を和哉は自覚していたため、いくら誘われたところで特定の誰かと懇意になる事はなかつた。

ともかく、勉強は出来なくても、女子学生からは人気者という今までの和哉らしからぬキャラクターで、しばらくはゼミを続けていく事になつた。しかし、そのような事をいつまでも続けていくわけにはいかない事を和哉は知悉していた。あくまでもゼミの活動的は勉強であり、勉強のできない和哉は、相変わらず肩身の狭い思いをしていたからである。和哉は必死で勉強を続けたが、一年間のブランクは大きい。なかなか求められているレベルに追いつく事が出来ない。ブランクは何も一年間だけではない。和哉の所属するゼミには、付属の中学、高校から内部進学で大学に進学してきた学生が多かつた。彼らは進学のための受験勉強が不要であるため、大学に来る前から会計学を勉強している学生が多い。つまり、和哉が中学、高校時代に必死で受験勉強をしている時期に、他のゼミ生は既に会計学を勉強していたのである。そうした長年のブランクを埋める事

は、容易な事ではなかつた。そのため和哉はゼミの時間、「冗談を飛ばしながら、自分の弱みを敢えてさらす事で、予防線を張り続けていた。例えばこうである。

「平野君、今君が説明してくれた持分ブーリング法とパー・チエス法の部分なんだけども、そもそもその違いつて何だい？」

と、山本教授に聞かれたとき、和哉は

「ええ、私も常々そこが気になつっていたところであります」と答えた。そういう田頃の態度が祟つて、ついに和哉は山本教授の研究室に呼び出された。

「平野君、君はゼミをこれからも続けていく気はあるのかい？」

と、和哉は山本教授に詰め寄られた。

「はい、できれば続けさせて頂きたいと考えております」

と、さすがに和哉は弱気になつて答えた。すると山本教授は、丁寧

だが語氣を強めた口調でこう言った。

「ならば今の態度は改めた方が良い。学問を志す人間として、君は考え方を誤つている。少なくとも、さらし者になっている君の姿は見るに耐えない」

普段穏やかな山本教授がここまで言つのだから、よほど田頃の和哉の態度に閉口していたに違いない。しかし和哉は思つのである。

(さらし者とは何だ)

確かに自分はゼミの質を下げてきたかも知れない。だが「さらし者」と言われるほど恥ずべき事をしただろうか。いや、山本教授にしてみれば、したに違いない。しかし自分は求められるレベルに追いつこうと努力をしている。「態度を改めろ」と言わたったところで、他に何が出来るわけでもない。と、和哉は思つのである。

「どうも済みませんでした」

と言つて研究室を出た後、和哉は

(それじゃあこっちから辞めてやるわ)
と、踏ん切りをつけた。

翌日、和哉は山本教授にメールを打つた。

「昨日のお話について、色々と考えてみましたが、やはりこれ以上ゼミの皆様にご迷惑をおかけし続けることはあつてはならないと思いますので、ゼミを辞めさせて頂きたいと思います。大変申し訳ありませんが、そのようにお願いいいたします」

山本教授からは即座に次のようなメールが返ってきた。

「了解いたしました。今後の益々のご活躍をお祈りしています」
何とも厭味な文章である。前の口にあのような話をしておきながら、「益々のご活躍」とは懲懲無礼も甚だしい。再び居場所を失った和哉は、やりきれぬ怒りと共に、決心を固めた。

（少し勉強が出来るくらいの話で人を見下しやがって。こうなったら独学で勉強して、すぐに追いついてやるわ）

ちなみに、その後和哉にはたくさんの女子学生から、「どうして辞めたの？」

「今度会つて話そよ」

等のメールが届いたが、いい加減な返事をして全てかわした。これが、和哉が大学三年生に上がる直前の事である。

元来、和哉は努力家である。ゼミを追い出された悔しさも手伝つて、すぐに独学で日商簿記一級を取得する事が出来た。これで勢いづいた和哉は、この調子で公認会計士か税理士の資格も取得してやろうかと思案していた。

（俺にできる仕事は何もない。せめて専門性を身につけないとな）もつとも、これは両親に反対されてすぐに頓挫した。大学三年生ともなれば、もうじき就職活動が控えており、それに差し支える事があつてはならない、というのが両親が反対した理由だつた。和哉にしてみれば、働き口を見つけるために勉強をするのではないのか、と反論したくなる理由であつたが、とはいへ両親の気持ちも分からぬでもない。新卒至上主義の日本の労働市場において、大学生のうちに企業から内定を貰つておかないと後々大変に不利な立場に追い込まれる事は、和哉も重々分かつていたからだ。

（今就職活動をしないと、その機会損失は大きいのだらう）いくら勉強をしたところで、就職という利益を逸しては本末転倒なのである。

（全く、勉強するために大学に来ているのに、勉強すると就職できなくなるとは皮肉な話だ。いよいよ何のための大学か分からなくなつてきた）

和哉は大いに違和感を覚えながら、就職活動に励む事になる。和哉はしばらく、大学の催すセミナーやら説明会、その他の就職支援の集まりに参加した。特に役に立つとは思えない内容だつたが、何もしないよりは良いだろうと考えての施策であつた。ちなみにそいつた集まりにおいて、和哉はついぞ雄一の姿を見なかつた。

（あいつはどうするつもりなんだ？）

失つた親友の事が、和哉には幾分か気がかりであつた。が、今は自分の事で精一杯であつたため、その懸念はすぐにかき消された。

（しかし…）

和哉は思つ。

（企業は個性的な人材を求めていると言ひながら、面接対策では判断したような模範解答ばかり覚えさせられるのはどうした事だらう？）

和哉はまだ知らない。日本型雇用という地獄を。そして和哉の様な精神力の持ち主であつても、死の瀬戸際まで追いつめられる悪夢を。

和哉の就職活動は難航した。勿論、和哉の口下手が災いしたといふのも大きな原因の一つである。面接ではいつも説明が上手くまともらずに支離滅裂になってしまい、上手く話す事が出来ない。が、その原因は口下手というよりも、もつと他のところにある様な気がしていた。それは一言で言えば、話す事がない、という事である。面接とは言うまでもなく自己のアピールの場であるが、和哉にはアピールするほど誇れるものが何もない。それを埋めるために、和哉は自分の中から何とか長所と言えそうなものを引っ張り出してアピールをしてみた。しかしそれがどうも自分の事を説明しているとは思えぬ実感のなさで、自分で聞いていて歯が浮く様な台詞ばかりである。ましてや、それを仕事上のメリットに繋げなければならぬとなれば、これは上手く話せるはずもない。加えて、面接官の高圧的な態度も、和哉を萎縮させた。圧迫面接、という言い方をするらしいのだが、どうやらそれはストレス耐性を試す上でポピュラーな手法らしかつた。

「君の様な能力の人間など五万といいるんだよ」

「成績が悪すぎる。君は今まで何をして生きてきたんだい？」

等の人格否定ともとれる発言を面接官が嘲笑まじりに繰り返すものだから、和哉もつい言葉を失ってしまうのである。もつとも、和哉はこうした一連の現象について、至極当然の事と考えていた。

（俺には何の専門性もない。会社で役に立つ事などないだろう。役に立たない人間を金を出して買つだから、必然的に買い手が有利になるという事だらう）

要するに、話す事が何もない事も、面接官が横柄なのも、自分にこれと言つて売りがない事に由来している、と考えたのである。和哉のこの推測は当たつている。恐らく、本来であれば労働市場において売り手と買い手は対等であり、売り手は自分の提供できる価値を、

買い手はそれに対して支払う事の出来る対価を提示すれば情報としては十分であるはずだが、和哉の場合、売り手は価値を提供できず、買い手もそれを前提とした対価など示せるはずもなく、結果として面接では「どれだけ耐え忍ぶ事が出来るか」という、唯一その場で試す事の出来る指標を暴力的な手段を用いて計ることしか出来ないのである。

（やはり専門性を磨いておいた方が良かつたのではないか）
と、和哉は事あることに思わざるを得なかつた。

もつとも、圧迫面接に関して言えば、和哉が考えていた理由以外にも更に重要な理由がある。殊、日本企業においてはこの「どれだけ耐え忍ぶ事が出来るか」という指標が売り手、買い手双方にとつて最も重要であるという理由である。それは後に和哉が身を以て体験してくれる事になるのだが。

和哉は次第に、この就職活動という大いなる茶番に疲弊してきた。恐らく他の就職活動をしている学生も同じ思いであつた事だろう。着慣れないスーツを着込み、面接会場に行くと、同じように似合わないスーツを着させられた学生が集まっている。この時点で、和哉は社会の小さな歯車になるのだという実感に襲われ、何だか人格を失つた様な気持ちになる。そして面接で罵倒され、激しく落ち込む。それで合格していればまだ良いが、落とされている場合が殆どである。加えて、面接官に媚を売る他の学生に妙に腹が立つたし、それと変わらぬ事をしている自分には自己嫌悪すら覚えた。

（何と馬鹿げた話だ）

と思いつつも、自分にはそれしか生きる術がない事に、言いようのない閉塞感を覚えた。

奇しくも、時はエフバブルの頃であった。若手のエフ長者達がメディアで頻繁に顔を出すようになり、時代の寵児となつた。彼らはいつも一貫してサラリーマンとしての生き方を否定し、そういう生き方がいかに非効率で、報われない生き方であるかを説いていた。彼らの言い分が論理的に正しい事は分かつてはいるものの、

和哉は内心、それが不愉快であった。

（俺はこんなに苦労してサラリーマンにならうとしているのに…）
と、日々徒労感に襲われた。 そうした疲労が蓄積しての事であろう。
和哉はもはや職種など選ばなくなつた。 和哉には何の専門性もない
ものの、紛いなりにも会計学を勉強してきたという自負があつたた
め、就職活動を始めた頃にはそつした分野の知識を多少なりとも活
かせる分野を選んでいたのだが、ここまで来るとそんな贅沢を言つ
ていられなくなつてきたのである。 職種などどうでも良い。 とにかく
内定が欲しい。 そしてこの就職活動という不毛な争いから一刻も
早く退きたい。 と考えるようになつた。 しかし、そうまでもして和
哉は内定を得られず、ついにそのまま和哉は大学四年生になつた。

よく分からない場所に来てしまつたと、和哉は感じ始めていた。夢を追いかけ、恋をした青春時代、それはあまりに短く、儚い結末であつた。それが夢のように過ぎ去つてしまつと、終わりのない砂漠を放浪する様な日々が、和哉には続いた。そうして彷徨つているうちに、和哉はサラリーマンという得体の知れない場所にたどり着いた。ところがこの得体の知れない場所こそ、最も多くの人間が集う場所だと言う。和哉はその場その場を、目標に向かつて懸命に生きてきたつもりだった。出会いや別れを繰り返し、様々な場所を歩いてきたつもりだった。ところが最後にはこの場所にたどり着く事が最初から決まっていたのだ。どんな人生を歩もうとも、終着駅は最初から決まつていて、それは他でもなく「死」を連想させるものであつた。個人の人格、個性など、この終着駅では殺されてしまうのだ。葬り去られた過去は誰にも顧みられる事はなく、ただ無意味に記憶の中を漂つっていて、時折悲しげにその断片を浮かび上がらせるのである。

（一体何のために俺は生まれてきたのだろう）

こういつた問いを、和哉はこの時から何度も繰り返すようになった。その問いは、恐らくどの時代のどの国の人間でも抱いたであろう、人間にとつて最も根源的な問い合わせであろうが、それを否定するかの様な現実を、恐ろしく非人間的なものと和哉が感じたことは想像に難くない。

和哉がやつとのことで内定を勝ち得たのは、大学四年生の夏であった。あるシステムメーカーの営業の仕事である。営業など和哉の最も苦手とする分野であろう事は、当の和哉自身がよく分かっていた。けれども先に述べたように、和哉はとにかく内定が欲しく、早く就職活動を終わらせたかったのである。そのため自分の向き不向きなど考えずに、そこに就職先を決めた。が、和哉はここで判断を

誤ったと言つていい。この選択が後々になって和哉を大いに悩ませる事になるからである。もつとも、ここでもし和哉が就職活動を続けていたとしても、結果がどうなつていか分からないのであるから、一概に誤りだつたとは言いきれないのだが。

その後、和哉は残り少ない大学生活を気ままに過ごした。といつてもその内心はそう穏やかなものではなく、来るべき死刑執行を待つ死刑囚の様な、言わば最後の安息を楽しむ人間の暗さを帶びていた。

和哉が大学を無事卒業し、会社の独身寮に移るために引っ越しの準備などをしている頃、たまに足を運ぶ大学内の桜は満開だった。和哉は初めてこの地を踏んだ時の事を思い出していた。はしゃいだ気持ちで駆け抜けた桜並木の道。夢と希望に満ちあふれたあの若者は、もうどこにもいない。

（夢も希望も、ただの幻想だつたのだ）

春は希望の季節。しかしその希望が幻想であると知ると、宙を舞う桜の花びらも、はらはらとこぼれ落ちる涙の様な哀愁を帯びて見える。こうして桜の花が舞い散るたびに、何か大切なものを失つていく様に、和哉には思われるるのである。

卒業式の日に、和哉は久しぶりに雄一に会つた。雄一は留年したらしい。それでも和哉の卒業を祝いに来てくれた。

「バンドはどうだ？」

和哉は雄一にずっと気になつていた事を聞いてみた。

「ああ、やつてるよ。あの後松本さん経由で新しいギタリストを見つけてな。まあギターはうまい人だけど、何となく器用なプレイが耳につく様な感じだよ。俺はお前の不器用なプレイの方が好きだつたな」

「そうか」

和哉は苦笑いしたが、雄一が自分のプレイをまだ覚えてくれている事、それをまだ必要としてくれている事に幾分かの感傷を覚えた。就職活動で社会から拒絶されてばかりいた和哉の心に沁みたのである。

「一恒さんは帰つてきたか？」

言つまでもなく、和哉の最も聞いたかつた事はこれである。もうとつぶに一恒は留学先から帰つてきているであろうが、和哉は一度も顔を合わせていない。

「ああ、帰ってきたよ。けどな、新しいギタリストってのが妙に自分の音に拘りを持っている奴で、一富さんとあんまりうまくいかなかつたんだ。それで一富さんは自分の技術を必要としているところに行くつて言つて、バンドを出て行つたんだよ」

「そうか」

和哉がバンドに残つていれば、そのような事にはならなかつただろう。自分が約束を守らなかつたせいで、一富までバンドを去る事になつてしまつた。と、和哉は今更ながら自責の念に駆られた。そしてそこまでの犠牲を払つてバンドを辞め、迷つたあげくに掘んだものは、サラリーマンというかつて夢見たものとはほど遠いものであることに、和哉は今更ながら唖然とさせられた。勿論、和哉は音楽に失望して、バンドを辞めた訳だから、その選択自体が間違つていたとは思はないが、かといつてサラリーマンになりたくてバンドを辞めた訳ではない。それが何か大きな力に押し流される様な形で結局は今の様な状態になつた。ここに大きな違和感を和哉は感じているのである。

「そう言えば、他のメンバーはどうしてる?」

和哉は急に自分の身の上を誰かと比較したくなつて、そう聞いた。

「ああ、北川さんも栗田さんも、特に就職せずにバンド一本でやつてるよ。フリー ターつてやつだ」

「ふうん」

和哉はあるう事が、ある種の優越感を感じた。社会に守られている者の優越感。こうやつて人は望まぬ生き方を選んでいくのだろう。結局、俗にいう「幸福」などと言つものは他人との比較において成り立つものらしい。人が人を差別したがる理由はこれだろう。差別する事で初めて自己の幸福を認識できるのである。和哉は優越感とそれに対する自己嫌悪を同時に感じて、表情を失つた。

「平野、たまには俺たちのライブにも顔出してくれよ。みんなお前に会いたがつてるよ」

「ああ、誘つてくれれば行くよ」

心にもない事を、和哉は答えた。

「そろそろ行かなきや。河野、今日はありがとうな」

「いや、頑張れよ、社会人」

かつての盟友と満開の桜に見送られて、和哉は大学を後にした。

四月に入つて早々、和哉の就職した会社では新入社員研修があつた。一ヶ月ほどホテルに缶詰になつて、毎日研修を受けるのである。これは和哉にそれほどの苦痛を与えたかった。毎朝決まつた時間に起き、社是を暗唱したり、グループでディスカッションをしたりする。食事も同期と共に摂る。久々の集団生活に、和哉は何か新鮮なものを感じていた。

一通りその研修が終わると、新入社員はそれぞれの配属先につく。会社の支店は全国各地にあるのだが、和哉の配属先は東京であつた。大学が東京だつたから、土地に慣れているだろうと考えられたのかも知れない。和哉の住む独身寮は、埼玉にあつた。独身寮といつても借り上げの寮であり、実際は普通のアパートである。駅から遠いのが難点だつたが、程よい広さのいい物件だと、和哉はこの住処が気に入った。和哉はそこに引っ越し、新生活を始めたのである。

当初の予定通り営業部に配属された和哉は、初出社の日、会社のあらゆる人たちに挨拶して回つた。ぎこちない卑屈な自己紹介などをしていたが、会社の同僚達は暖かく和哉を迎えてくれた。加えてその日、彼らは和哉の歓迎会を開いてくれた。同じ部署に新入社員は和哉一人であつたから、始終和哉は色々な人たちに話しかけられ、ぺこぺこしながら彼らと話をした。十一時を過ぎ、ようやく和哉が解放された時には、和哉にもすっかり愛想笑いが尽きていた。（社会人とは疲れるものだな）

自分の歓迎会とは言え、正直に言ってこれほど社会人の飲み会が疲れるとは思つてもみなかつた。常に気を遣いつぱなしで、肩が凝る。酒の弱い和哉は、飲みなれない酒に赤い顔をしながら地下鉄に乗り込み、覚束ない足取りで帰路についた。

それから半年間、和哉の社会人生活は順調に進んでいた。少なくとも傍から見れば、である。しかし当の和哉自身は、

（俺は何故働いているのだろう？）

という問いを絶えず頭の中で反芻させていた。無論生きるために働いているのであるが、では何故生きているのか、という所まで来ると、とんと答えが出てこなかつた。働くために生き、生きるために働くというサイクルに乗る事が出来たら、それは幸せかも知れない。しかしそのためには働くという行為が人生においてよほどの意味を持つたなければならない。和哉は今の仕事にそれほどの意味があるとは思えなかつた。元々内定欲しさに手当たり次第に探して得た仕事である。やりがいを感じられるのは当然だらう。そう考へると、やりがいのある仕事に就ける人間などほんの一握りではないかと、和哉は思う。就職活動の際に苦戦した人間など、殆どが自分と同じようになんと本意な仕事をしてゐるに違ひない。よしんば就職活動がうまくいったとしても、その職が自分にとつて生き甲斐足り得るものかどうか、それは実際にやつてみなければ分からぬのである。国民の大半が不本意な生き方をしてゐる様な国が、果たして幸福な国家と言えるのかどうか、和哉がそれを疑問に思わぬ日はなかつた。

夏の暑い朝にスーツを着込み、照りつける日差しに汗だくになりながら駅に向かう。駅の階段を上つてホームに着くと、上り列車のホームは東京で働くサラリーマン達でごつた返しており、地獄絵図の様な景観であつた。汗と埃にまみれて淀んだ空氣の中に、駅の構内放送がごちゃごちゃと鳴り響き、吐き氣と頭痛で思わずふらつく。滑り込んできた電車は既に超満員であり、更に乗り込もうとするサラリーマン達は駅員に無理矢理押し込まれる。いつか写真で見たアウェシュビツツへ向かうユダヤ人のようである。和哉の会社まで四十分、その状態で我慢し続け、ようやく着いた会社ではつまらない仕事を嫌な上司が待つてゐる。そこから辺りが暗くなるまで仕事をし続け、ようやく仕事が終わると、今度は夜の付き合いである。上司や先輩に媚び諂いながら、空いたグラスに酒を注ぎ続ける。もつともそういう作法が和哉には身に付かなかつた。例えば和哉にはグラスが空いた状態、というのが分からなかつた。酒がどこまでなくな

つたら注ぎ足してよいのか分からぬのである。それで結局は酒が全てなくなるまで待つてゐるのだが、そうなる前に他の誰かが継ぎ足してしまうのである。その度に和哉は、

「氣の利かない奴だ」

等と言われ、先輩に小突かれる。そう言つた先輩の御機嫌取り合戦に、和哉は悪戦苦闘していた。先輩の話す話題と言えば、殆どが会社の愚痴や他人の悪口など、取るに足らない事ばかりである。これを長時間聞かされると、ほとほと人間が嫌いになる。そこからやつと解放された時には大抵終電間近か、あるいはそれすら終わつてゐる時は、埼玉までタクシーで帰らねばならない時もある。これが毎日である。ある夜、和哉は駅のホームで酔いつぶれて倒れている若いサラリーマンを見かけた。声をかけたいが、自分にもそのような体力は残つていない。戦友の屍を乗り越えるようにして、和哉はその場を立ち去つた。また別の日には、和哉は駅の構内でうずくまつてしまつた。肉体的、精神的に衰弱しきつっていたのだ。ふと見ると、和哉の目の前にホームレスが大の字になつて眠つている。人は言つだらう。

「ああなつたらおしまいだ」

「あの人は可哀想な人なのだ」

しかし今の自分とこのホームレスを比べてどちらが幸福なのか、和哉にはすぐに答えられる自信はなかつた。

それでも入社して半年間はまだ良かった。それ以降は、和哉にも個人のノルマというものが課せられた。営業という仕事の、言わば宿命である。ところがこのノルマが、和哉を大いに苦しめる事となる。和哉はこの仕事を本格的に始めて、すぐに気付いた事がある。（俺にはコミュニケーション能力というものが無いみたいだ）

すなわち、こちら側から一方的にまくしたてる事はある程度出来ても、相手の話を聞き、主旨を理解してから、それに沿う形で適切に返答をする事が出来ないのである。言葉のキャッチボールがスムーズに続かない、と言うべきか。そう言えば和哉は元来無口な性格であったから、終始会話の主導権を相手に委ねて自分は相槌を打っている事が多かつた。自分が何か話す時でも、大抵は単発で終わる。そのような性格の和哉が営業など出来るはずもない。事実、和哉の営業成績は芳しくなかつた。

「立て板に水式のトークばかりが営業じゃない」

とはよく言うが、それは最低限のコミュニケーションが成立した上で、「相手の話も聞きましょうね」と付け加える言葉に過ぎない。その最低限のコミュニケーションが出来ない和哉には何の意味も成さないのである。そういう和哉には、営業の仕事は苦痛でしかなかつた。そればかりか、人と対面して話すのが次第に怖くなつていき、しまいには社内の人間と話す事にさえ相当の勇気を要するようになつた。

そうするうちに、和哉は孤立した。社内においてである。営業成績が良くないと、社内の人間とうまくコミュニケーションがとれない事が原因だろう。組織というものは元来、その組織の中に「共通の敵」を作る性質を持っている。「共通の敵」を持つ事ほど、組織の団結力を高める事はないからである。子供の場合はそれがいじめになり、国家の場合は差別になる。和哉は自分が社内でそういう

たものの標的になつた事を自覚した。そうなると、立場としては辛いものがある。和哉は単純な事務手続きや荷物の発送など、何の実績にもならない仕事を次々と押し付けられるようになつた。それを立場の弱さから、断る事が出来ないのである。恐ろしい事に、実績を上げられない人間ほど、更に実績を上げにくい状況に追い込まれるのが社会のルールであるようだ。

部内の会議などでは、和哉の話す時にはどこからか失笑が漏れるようになり、中には露骨に和哉の営業成績の悪さや口下手をネタにしてはやし立てる者までいた。上司は敢えて部員が見ている前で和哉を怒鳴りつけ、口元を歪めた嫌な笑いを浮かべてこう言った。

「お前はもう辞めた方がいいんじゃないのか？」

それを言われる度、至つて冷静に和哉は思う。

（辞めた方が良いならなぜ解雇しないんだ？）

和哉の思う通り、このような状況に陥つたにもかかわらず、和哉は解雇される事がなかつた。外資系企業などではこうはいかないだろう。結果を出せない人材など即刻解雇されるに違いない。その意味では和哉のいる会社は日本的な、優しい会社と言う事もできる。しかし和哉は思う。

（解雇された方が良いかも知れない）

解雇される事によつて再チャレンジが可能になるのであれば、その方が良いと思うのである。しかし現実には再チャレンジなど不可能だろう。転職市場が活況を帶びているとは言え、まだまだその数は限られているし、第一何のスキルも実績もない和哉の様な人材を欲しがる企業など皆無である事は火を見るより明らかである。すなわち、一度入社した会社には、例えどんな仕打ちを受けようともしがみつかなければならぬのである。もし嫌がらせに腹を立てて自己都合退職などしようものなら、未来など闇に葬られてしまう。

辞める事が出来ない。これが日本型雇用の生んだ最大の悲劇と言うべきだろう。

和哉の先輩はそのような境遇の和哉を救つてはくれなかつた。そ

ればかりか夜の酒の席で、

「怒られているうちが華だ。田をかけてもらっている証拠だ」

「いじられキャラは得だ。それは愛情表現なんだ」

「期待しているから面倒くさい業務を任せんんだ」
などと説教じみた励まし方で和哉の背中をしきりに叩き、相変わらず夜遅くまで和哉を付き合わせた。勿論、和哉はこのような説教に同意する事は出来なかつた。

（愛情があれば何をしても良いのか？それではストーカーや強姦魔は許されるのか？パワハラやいじめで自殺した人間に「愛情でした」と申し開きする事が出来るのか？いじめを苦にして自殺した小学生の担任教師は「からかいやすかつた。」などと言つたらしいが、それでもそのような性格が得なのか？そもそも本人が望まないことが得であるはずがない。いくら目をかけてもらつたところで、それが原因で腐つてしまつては何の意味もない。雑務を押し付ける事についても一緒だ。お為こかしを言つんぢやない。単なる上司の好き嫌いで実績にならない仕事が割り振られるなら、評価制度に問題があるではないか）

和哉は心中、こんな事を叫び続けたが、その声は誰に届く事もなかつた。

和哉は次第に、酒に溺れるようになつて行った。都内に雰囲気のいいバーを見つけたのだ。そこでもう飲めなくなるまでウイスキーを呷る事が習慣になつていた。店のバー・テンダーともよく話した。和哉は口下手だつたが、向こうも商売である。愛想良く接してくれる相手とは、和哉も自然に話をする事が出来た。ともかく和哉にとつて、バーにいる時だけが、心休まる時間だつたのである。

バーを出て、真っ赤な顔で地下鉄に乗る時、青白い無機質な蛍光灯の明かりの下、現実に引き戻された様な気がして、和哉はひどく憂鬱になつた。地下鉄の窓には、疲れきつたサラリーマンが映つてゐる。表情には精気のかけらもなく、肩は下がり、腹の脂肪がだらしなくベルトの上に乗つてゐる。瘦せているくせに腹がでている醜い豚である。和哉は自分の姿に現実を見た気がして、一層足取りが重くなつた。

一方和哉の営業成績の方は、相変わらず振るわなかつた。振るわないばかりか、自信のない話し方が災いして、相手に罵倒されることも多くなつた。

「お前、そんな話し方じや女の一人も口説けないぞ」

と嘲笑混じりに言われた時には、和哉は我を振り返つた。

（言われてみれば女を口説いた試しなど全くないな。好意を伝えるだけで精一杯だつた。やはり俺は何も出来ない人間なのだ）

そのようにして、和哉は自分の職業的能力だけでなく、人間自体からも自信を失つていつた。自分の存在価値が、いよいよ疑わしくなつてきたのである。

そんな和哉も、ついに初受注を取る事が出来た。口下手でも誠実な和哉の性格が好かれたのか、それとも単に運が良かつただけかは分からぬが、とにかく受注を勝ち取つたのである。

（俺もやれば出来るんだ）

和哉は喜んだ。田舎の両親に人々に電話をかけ、その事を伝えた。もつとも、その和哉の喜びはすぐに書き消されてしまう事になる。先輩の持っているノルマの方が多いから、という全くもつてよく分からない理由で、売り上げの全額を召し上げられてしまったのである。横取りと言つていい。

「抗議をすれば良いじゃないか」

と思うかも知れないが、何せ和哉は社内で四面楚歌である。そのような事が言える環境ではなかつたのである。

和哉は就職活動時に、面接応答の模範を覚えさせられたこと、圧迫面接を受けた事を思い出した。その理由がようやく分かつたのである。企業が欲しがるのは、上役の言つ事に従順で、それに文句も言わず耐え忍ぶ事が出来る人材だったのだ。なるほど、そういうた人材を確保するためであれば、あの面接にも一定の効果はあるだろうと、和哉は考えた。

（と言つ事は、どの企業に行つても実態は大して変わらないのだろう）

転職など元々出来はしないが、もしチャンスがあつたとしても、しない方が良いと、和哉は確信した。

入社当初、和哉は先輩社員の趣味であるフットサルに付き合わされたり、会社の自己啓発セミナーに参加させられたりで、休日がつぶれる事が多かつたが、そのようなものに参加する事が阿呆らしくなり、次第に足が遠のいていった。

「来ないと明日からただじやおかないからな」

と、わざわざ和哉の携帯に電話をかけて脅す先輩社員もいた。が、どうせ今でもひどい目にあつてるのであるから、行つたところで同じである。代わりに和哉は休日、家で映画などを見て過ごす事が多くなつた。昼間からウイスキーを片手にレンタルショッピで借りてきたDVDを見るのである。

その中で、和哉は『ショーシャンクの空に』という映画を見た。

無実の罪を着せられ投獄された男が、十九年かけて壁に穴を掘り続

け、脱獄するという話である。そして最後には「希望」の素晴らしさを語るのである。

（俺も脱獄したいものだ）

と、和哉は思うのだが、同時に、

（この話は単に運がよかつた、というだけの話だらう）

とも思うのである。主人公がそのような策を思いつくほど頭の良い人間だったということ、十九年もの間壁の穴が看守に見つからなかつたこと、そもそも壁際の牢屋に投獄された事、脱獄に何の障害もなかつたことなど、挙げれば切りがない。要するに、そのような偶然の幸運に恵まれた人間のいう「希望」など何の信憑性もないということである。その他大勢の人間にとつて、「希望」は危険なのである。和哉はこのような名作を見ても、希望を得られなかつた。ましてや、和哉の場合「脱獄」の意味するところが分からぬ。会社を辞める事は簡単だ。だが、それでは路頭に迷うだけである。そうではなくこの閉塞状態から抜け出す「脱獄」とは一体何であるのか、和哉は考えねばならなかつた。そうして和哉は一つの結論にたどり着いた。

（それは死ぬ事ではないのか）

生きるために働く。その生きる事を辞めれば、働く必要はない。と言つても、働くこと自体が嫌で死ぬ訳ではない。働く事で自分の存在価値のなさをあらゆる角度から証明されてしまうのが辛いのである。そしてその自己否定から抜け出す事が出来ない。自分の存在価値のなさを痛感させられる度に、和哉は記憶を辿つて過去に思いを馳せる。

（そう言えば俺は小さい頃から何一つ出来ない奴だつた。音楽だけしか取り柄がなかつたのだ。友達も少なく、いつも一人だつた。人と共感できた試しなど殆どない。この歳になつてまともに恋愛の一つも経験していない。仕事もできない。人と会話も出来ない）

こういう自己否定のループに入ると、界限がない。ただその思考の

隙間隙間に、

（俺は世の中に必要ない人間なのだ）
という結論が繰り返し織り込まれる。

時は派遣法改正などの影響により、世の中に「派遣切り」の嵐が吹き荒れていた頃である。会社に居続けても地獄だが、辞めたら更なる地獄を見る事だらう。こうした自己否定も、更に強まるに違いない。残つても地獄、辞めても地獄。これが和哉の出した「死ぬしかないので」、「という結論の背景である。そしてそれ以降、この気持ちが和哉の中で日増しに増長していった。

ついに和哉は精神に異常を来した。道を歩いている途中、突如として足が一步も前へ出なくなつたのである。

（歩けない…）

結局その場に佇んだまま、和哉は一時間近くを過ごした。都会の喧噪の中一人、ネオンが滲む様な朦朧とした思考で立ち尽くしていたのである。

和哉は精神科に行つた。結果、すぐに鬱病と診断された。飲み薬を処方され、しばらく和哉はそれを服用していた。が、すぐに中断した。

（薬を飲んで気分が良くなつたところで、それが何だと言つのだ？
何ら根本的な解決にはなつていなか）

こうして和哉の精神状態は悪化の一途を辿つた。

会社での和哉は魂の抜けた様な状態であつた。仕事が手につかないのである。そうした和哉の様子を見て苛立つたのか、先輩社員は夜な夜な和哉を飲み会の席に連れ出し、日頃の勤務態度の悪さについて説教をするようになつた。時には殴る蹴る等の暴行を加えられる事もあつた。無論ここまで来ると犯罪行為であるが、和哉にはどうする事も出来なかつた。因みにこういった場合にやつてしまいがちな誤つた対処法として、人事部に相談するというものがあるが、これは自殺行為である。人事部とは元々こういった問題に対処する能力を有していない事が殆どで、その場合持ちかけられた相談をそのまま相談者の上司に返してしまう事になる。それによつて相談者

は更に不利な立場に追い込まれるという事となるのである。実際、和哉の一つ上の先輩で、それをやつてしまつた社員がいた。彼はその後部署の異動を言い渡されたが、配属先の部署というのが、何と彼一人しか部員がない、彼のために新設された部署であった。彼はそこで何の仕事も与えられず、結局は自己都合退職で辞めていった。こうした前例があつたため、和哉は誰にも相談する事が出来なかつたのである。

（弱い人間は何をされても文句が言えないのだ）

ここまで聞くと、「なんてひどい会社だ」と言う人がいるに違いないが、これはこの国の企業においてごくありふれた日常である。つまりこれが現在多くの若者の直面する惨状であり、自殺者が年間三万人を超えるこの豊かな国の正体である。

年末、和哉は輪島の実家に帰った。和哉は両親に、自分の置かれている状況について話をした。そしてついに、自分が会社を辞める覚悟である事を伝えたのである。

「しばらく厄介になるかも知れないけど、どうか許してくれ」

和哉は頭を下げた。ところがである。両親は和哉に同情はするものの、退職については否定的であった。世の中は就職難であり、新卒の学生であっても内定が得られない、所謂第一の就職氷河期が訪れていた。恐らく、そういう世相も手伝つての事だろう。

「今は正社員になりたくてもなれない人がたくさんいるんだ」

「そうよ、正社員というだけで恵まれている方じやないの」

と、両親はあくまでも正社員であり続ける事の重要性を説いた。

「そんな事は分かっているんだ。だけどこれ以上続けても、遅かれ早かれ続かなくなるのは目に見えているんだ。それなら決断は早い方が良い」

和哉はなおも食い下がつた。が、両親はこう言つた。

「和哉、お前にはこらえ性がない。バンドもゼミも途中で辞めたんだろ。会社を辞めるのはそれとは次元の違う話だぞ。続けてさえいれば、きっと報われる日が来るさ」

「報われる日なんて来ない。出世も無理だし、営業なんてどう努力しても出来るようになんてならない。会社にも迷惑をかけるし、俺が居続けても誰一人として得をしないよ」

と、和哉は必死に説得をした。しかし父親は言つた。

「会社の事なんか考えなくても良い。正社員で居続ける事だけ考えろ。安心しろ。どんな状況に陥ったところで、クビになんかならない。自分から辞めると言いださなければ済む話だ」

そのとき、和哉は気付いた。両親は自分を正社員にするために自分を生み、育ててきたのだと。今までの両親の愛情は、全て自分を正

社員にするためのものだという事も。そして同じようにこの国も、子供を正社員にするために教育し、そのための価値観を植え付けてきたのだ。和哉の苦手だった集団行動、均質な価値観などは全てサラリーマンになるための訓練であり、それに向いていなかつたと言う事はサラリーマンに向いていない、つまり生きる事、人間であることに向いていないという事なのだ。國の為に自己を捨てて兵隊になる事。それこそが自分の生まれた意味であったのだ。そしてそれが出来ない自分は「非國民」だったのだ。新卒至上主義とは國家総動員法に由来しているらしいが、時代は変わつてもやつている事は戦時中と何ら変わらないということだ。そしてその事に、誰一人として疑問を抱いていないかの様に振る舞つている。それが世の中ににおいてよく生きると言う事、すなわち「善」であるからだ。

（俺は「悪」だったのだ）

和哉は、浜辺で日本海に沈む夕日を見ていた。美しい世界。「善人」だらけのこの世で、自分は「悪」に生まれたのだ。やつと分かっただ。生きづらかった理由が。「善」が「悪」を排除しようとするのは当然の事だ。自分を育んできたこの夕日も、「悪」である自分には一日の始まりを告げる残酷な朝日となるのだ。寄せては返すこの波の様に、自分は無になりたい。和哉がそう考えた時、夕日に染まる波が潮風を連れてきて、それが和哉の耳元でそつと何か囁いた。和哉は決心した。

（死んでやるさ）

それしか方法がない。

翌日、和哉は東京に帰った。両親は別れ際、

「何かあつたらいつでも連絡をしなさい」

と、和哉を心配した。ただ、会社を辞めていいとは最後まで言わなかつた。きっと和哉が死んだら、それなら辞めれば良かつたのに、と言つに違ひない。全く後悔は先に立たない。

（父さん、母さん、今までありがとう。こんな駄目な人間を生んで、さぞ苦労しただろう。最後まで俺は親不孝者だったね）

和哉は両親に感謝の念を覚えたが、口に出す事はなかつた。
(もう来る事もないだろう)
和哉は故郷を後にした。

和哉は東京に戻つて早々、近所のホームセンターにロープを買つた。一メートル百二十円であつた。

（たつたこれだけのもので全てが終わるのだ）

和哉は帰宅の道すがら、空腹を覚えた。朝から何も食べていなかつたのである。

（何か食うか）

和哉は思つたが、

（いや、死ぬ奴は食事など要らないか）
しかし死ぬ前にも、空腹は堪え難い。

（最後だから、旨いものを食つて死のう）

和哉はその夜、奮発して牛タンなどを食べた。

そして、和哉は帰宅し、買つてきたロープを結んで輪を作り、いつ死のうかと思案していた。今すぐに死んでも良さそうなものであつたが、何か踏ん切りがつかない。和哉は仕方なくテレビを付けて、ぼんやりとそれを眺めていた。

テレビではドラマが放送されていた。若い恋人同士のうち、彼女が不治の病で余命半年と分かり、残り少ない人生を恋人と共に送る、という切なくも美しいラブストーリーであるらしかつた。

（俺には美しい思い出など何もなかつたな）

と、和哉は我が身を振り返つた。このドラマの主人公と、恋の一つも出来なかつた自分と、果たしてどちらが可哀想か、考えてみた。もうすぐ死ぬと分かつてゐる彼女を愛する事は確かに切ない事だらう。だが彼らの恋に「終わり」があつたものの、「始まり」があつた。自分にはその「始まり」すらなかつた。最初から何もない虚しさ。それを抱えて生きる事は容易ではない。その辛さを、誰にも分かつてもらえないからである。人に話したところで、「単にモテない奴」と一蹴されてしまつだらう。その孤独さは、このドラマの主

人公にはない。自分は時に「奥手」「草食系」などと差別される事すらあるが、それは病床に就く彼女の涙を拭う彼を指差して笑う事よりも遙かに残酷な事だ。と、自己憐憫に浸っているうち、やはり自分は死ぬしかないのだという思いが濃厚になつた。恐らく和哉が今何を見てもその結論に辿り着くのだろう。

死ぬにしても、何か良いタイミングはないかと考えているうち、そもそも自分の死の原因とは何か、和哉は思いを巡らせた。

(不思議だ。俺の人生はそれほど悪くない。大学を卒業して就職し、生活するには充分過ぎるほどの収入を得ている。周りに嫌な奴は沢山いたが、かといって人間一人を死に追いつめるほどの悪人は誰一人いなかつた。自分は何故死ぬのか。自分の敵とは一体何なのか。)

そう思うと、和哉は自分の死の原因を整理し、はつきりと形に残したいという衝動に駆られた。部屋の隅にある引き出しから便箋を取り出し、黒のボールペンで、和哉は感じるままに書き始めた。

遺書

私は、「悪」だったのです。「悪」である私には生きる権利はありません。それはとても小さな形で、長年に渡つて証明されてきました。私は他の人間に共感を覚えた事が殆どありません。例えば、スポーツ選手や芸能人を応援する気持ちが分かりませんでした。自分よりも成功している者を応援する意味が、私にはどうしても理解できないのです。同じ理屈で、私は人を尊敬した事もありません。もつとも、私はかつて音楽好きでしたから、アーティストのCDなどは大いに買いました。しかしそれは自分の音楽性を高めるためであります。アーティストを応援する気持ちなど微塵もありませんでした。他にも、些細な事ですが、私は雨の日に傘をさす人の気持ちが分かりませんでした。雨に濡れる事がそれほど気持ちの悪い事でしょうか？機械類が濡れるのが心配？服が濡れるのが嫌？そんな事はないと思います。濡れる事はそれほど気持ちの悪い事ではありませんし、機械類はポケットや鞄に入れておけば濡れる事は殆どありません。服も一時間足らずですぐに乾きます。私にはどうしても、「雨に濡れてはいけない」という先入観から人々が傘をさしているようしか思えないのです。まだあります。私は友人と一緒にいて楽しいと思つた事がありません。そもそも友人とは何でしょうか？他人の中でもとりわけ共通項が多く、共に過ごす時間が長い人の事がと思います。そうだとしたら、親しい友人であればあるほど、一緒にいて退屈な人間ではないでしょうか？彼らから学ぶ事はそれだけ少ないのですから。

このように、私は他の人たちとは感性がズれているようで、それが私にはとても孤独に感じられるのですが、残念な事にそれを分か

つてもらえた事はありません。こうした些細なズレ一つ一つが、言わば私の「悪」というものです。「善」は「悪」を容赦なく排斥します。いじめつ子が大抵人気者なのは何故でしょうか？ヤクザ、暴走族、不良を主人公に据えた物語が多いのは何故でしょうか？大量殺戮を行つた歴史上の人物に一定の支持があるのは何故でしょうか？彼らは「悪」ではなく「善」だからです。一見「悪」の顔をしていますが、実は多くの人の共感を得ていています。そして「悪」とは彼らの犠牲になつた人たちです。こうして見ると、一見「善」と「悪」の概念は「強」と「弱」の関係と似ていますが、それらは似て非なるものです。所謂「弱者」の中には、「弱者」である事を社会的に認知されている者もいます。あるいは単に努力をしていないだけの者もいます。「悪」とは、「弱者」である事が社会的に認知されておらず、また努力では如何ともし難い差があるのに、それを単なる「努力不足」「自己責任」という形で一蹴されてしまう人の事です。「悪」は何も特別な人の事ではありません。【ミコニケーション能力のない人、頭が悪い人、運動神経の悪い人、容姿の悪い人、人の輪の中に入つていけない人、空気が読めない人、その他不器用な人。こういった人たちは常に排斥の危機に晒され、いじめや差別といった憂き目に遭います。しかもそれが「努力不足」と解されているために、こういった仕打ちに遭う事が当然とされています。これが「悪」である人間の宿命なのです。何が「悪」であるかはその時代によつて変わるでしょうが、いつの時代も「悪」になるということは恐ろしい事なのです。戦時の「特攻隊」「玉碎」「志願兵」などの存在についても、あるいは「祖国のため」と思った人もいたでしようが、それ以上に祖国のために死ぬ事が出来ない人間、すなわち「悪」になりたくなかったのではないかと、私には思われるのです。つまり彼らは「悪」になる事よりも死を選んだ訳で、「悪」になるという事はそれほどに恐ろしいという事です。

そして最も困つた事は、「悪」には競争が出来ないという事です。というより、元々競争が出来ないから「悪」になつたのかもしれません。

せんが、一旦「悪」になると、他人の援助が得られなくなります。

人は一人では生きていけませんから、そうなると増え「悪」は競争ができなくなります。もつとも、私は競争を否定するつもりは毛頭ありません。競争をする事でしか良いもの、優れたものは生まれません。動物は何故自らの排泄物を食つて生きられないのでしょうか？それは狩りをして獲物を捕まえなくてはならない、お金を稼がなければならぬ、言い換えれば競争をしなければならないからです。競争こそ生きとし生けるものの宿命なのです。競争をしなければ生きていけない。つまり、競争の出来ない「悪」に生きる術はないのです。

私には、かつて音楽の夢がありました。恐らくその頃から自分が「悪」である事を感覚的には自覚していたのでしょうか。「悪」である私にも、芸術の道であれば生きていけるのではないかと考えていたのです。芸術はその人自信ではなく、作り上げた作品で勝負できるからです。しかし、私はある時から気付いたのです。芸術の先にあるものは所詮ビジネスであり、競争であつたと言つ事です。もとより、私には音楽の才能などなかつたのかも知れませんが、例え才能があつたとしても、社会と交わる事の出来ない「悪」にビジネスなど無理です。そしてそれ以上に、「善」の振りをしていればしているほど、芸術的感性は閉じてゆくという事です。商業的に成功している音楽がつまらないのは、それが理由だと私は考えます。「善」ではつまらない、「悪」ではビジネスに勝てない。芸術とはそういうものでした。従つて私の夢は断たれました。

私は長い間、人を好きになつた事がありませんでした。周りの人があつして恋愛をしたがるのか、私には分かりませんでした。今まで私に「恋愛をしろ」と言つてきた人たちは数知れませんが、それに従う氣にもなれませんでした。何故したくもない恋愛を無理にしなければならないのか、理解できなかつたのです。しかし私は誤解していました。世の中の真意とは、恋愛をしなければならないというのではなく、恋愛をしないことで「悪」になつてはいけない、と

いうことだったのです。私は恋愛の持つ「善」のイメージを全く無視していたのです。私がその事に気付いたのは、初めて恋というものを知った時です。既に「悪」だった私は、どれだけ努力しようとも「善」のイメージに近づく事は出来ませんでした。もつとも、私にも「善」を演じることで少しだけモテた時期があります。しかし化けの皮はすぐに剥がれる事でしょう。そんなものが長続きするはずもありません。「悪」の私には、恋愛など許されていなかつたのです。

いじめが原因で自殺する人たちも、恐らくそういう体験を通して自分が「悪」であることに気づいたのではないか。秋葉原の無差別殺傷事件も同じです。モテなかつたとか、非正規雇用だつたとか、そんな事はきっかけに過ぎません。自分が「悪」であることに気がつき、どうしようもなくなつたのでしょうか。卑近な例で言えば、食堂で一人で飯を食えない若者も同様です。周囲に自分が「悪」であることを露呈してしまるのが恐ろしいのです。

音楽に、恋に、学問に、仕事に、私は挫折しました。それらは形は違えど、原因は全て私が「悪」である事にあつたのです。「悪」には何一つ許されていません。これからもずっと一緒にです。私はこれからも「善」に排斥されつつ、彼らが卑下し、嘲笑を浴びせ、切り捨てたボロ雑巾の様な人生を生きていかなければならないのです。といつて私は「善」になりたい訳ではありません。私の目から見れば、彼らはとても醜い存在です。自分も醜く、他人も醜い。このような世の中を生きる事が苦痛で仕様がないのです。どうすればよかつたのか。と言わると、生まれてこなければよかつたとしか言いようがありません。しかし今からそれを言つても手遅れですから、そうであれば、途中で人生を下りる事が最も賢明な選択ではないでしょうか。

レッド・ツェッペリンの名曲で『天国への階段』という曲があります。あんな風に美しく天国に行く事が出来たら、どんなに良いかと思います。私の場合は、さしづめ非常階段と言つたところでしょ

うか。多少忙しなく上っていく事になりそうですが、それでも天国に繋がっている事には変わりありません。ソクラテスが「死後の世界が無であるならば、それは熟睡している夜のように快適なはずだ」と言っています。それが本当なら、私の行く先は天国に違ありません。「悪」の苦痛から逃れられるのですから。

遺書にしては少し長くなりすぎましたね。「善人」の皆さん、どうぞお幸せに。「悪」は一人で消える事にします。人はそもそも生まれていなければ死んでいないのですから、どうか私など最初からいなかつたつもりで、これからも生きてください。それでは。

平野 和哉

和哉は書き終えると、恐ろしいほどに冷静な自分に気が付いた。
(死ぬ前の心境とはこのようなものか)

和哉は思う。

(言いたい事は全部吐き出した。しんと静まり返った部屋で一人、何も考えずにいられる時間。気持ちが落ち着いている。それはそうだ。この後、俺は「無」になるのだ。何も考える必要はない)和哉は部屋に置いてあつたウイスキーの瓶を引っ掴み、瓶ごと飲みだした。暖かな感覚が腹に沁みてくる。とてもいい気分だ。和哉は音楽をかけた。グスタフ・マーラーの『アダージエット』である。ゆつたりとした旋律が、人生の終わりを優雅に彩った。

(トマス・マンの『ヴェニスに死す』の主人公は、美しい少年を見ながら死んでいった。そこで人工物は自然の美しさに勝てない事を知るのだ。俺は美しいものを見ながら死ぬ事は出来ないだろう。だが酔いものを見ながら死ぬ事は出来る。自然の摂理という最も酔いものを。人間は酔さにあっても自然に勝つ事は出来ないのだ。それを噛み締めて死んでいくのも、真理を思い知りながら死ぬという点では少しも遜色ないだろう)

和哉は美酒に酔いしれた。スーパーで買った安いウイスキーだったが、これほどの美酒はない。無に帰す前の恍惚感。世界が闇の底に消える醍醐味であろう。

生と死は原因と結果。死は生の敵ではない。生の一部に死があるのだ。生活の一部に眠りがあるように。ならば眠りを愛するように死を愛そう。夢を見るように無を泳ごう。そこには「善」も「悪」もない。あるのは無であるという認識すら失つた無だ。幸不幸の概念もない。単数複数の概念もない。自他の概念もない。生死の概念すらない。あるのはただ無だ。そこが天国だ。

和哉はいつしか眠りに落ちていた。そして朝、目を覚ますと、そ

こには絶望が待っていた。

*

和哉は起き上ると、無表情にロープの輪を掴んだ。それをトイレのドアノブに引っ掛け、ドアを背にして輪から首を出した。足を伸ばし、手を腿の上に置いて、少しづつ体重をロープにかけていった。全体重がロープにかかると、予想以上に首がきつく絞まり、目玉が飛び出しそうなほどに顔がうつ血した。すると視界の中央から紫色の靄がかかり、次第に思考がなくなつていった。思い出が走馬灯の様に駆け巡る余裕などなかつた。死の感覚が眼前に迫り、一瞬和哉は無を体験した。と、その瞬間、和哉は目を覚ました。気が付くと、和哉は嘔吐し、大便を漏らしていた。が、恐らく本能的にであろう。和哉の手が床を押さえつけ、体を持ち上げていた。死の寸前で自分を救つたらしい。和哉は首からロープを外し、その場にへたり込んだ。口の周りの嘔吐物を拭うと、和哉は嗚咽した。一人の部屋にむせび泣く声が響く。

（怖かつた…）

和哉は、自分に死ぬ勇気などない事を思い知つた。

翌日から、和哉は普段と変わらずに出勤した。自分の書いた遺書を鞄に入れてある。世界広しと言えど、遺書を持って出勤している人間がどこにいるだろ。だが、これには和哉なりの覚悟があったのである。

（俺は一度死んだのだ。もう何も怖がる事はない）

和哉はそういう覚悟を遺書とともに持っていた。遺書の他にもう一通、和哉が持っている書類があった。退職願である。和哉は今日、これを上司に渡すために出勤したと言つていい。

会社に着くと、和哉は上司に時間を取つてもらい、会議室に入つた。和哉は開口一番で言つた。

「実は、会社を辞めたいと思つています」

上司はそれを聞いても、落ち着いた様子であった。ある程度予想は出来ていたのだろう。

「ほう、理由は？」

「私は会社に貢献できていませんし、これからも出来る自信がありません。それ以上に、この会社は大変に働きづらさと感じたからです」

「ほう、働きづらい？ どんなところが？」

「私の言いたい事はそれだけです。これをお渡しします」

和哉は退職願をその場に置き、立ち去りました。すると上司はやつと慌てた表情を見せた。

「まあ待て、冷静に話しあえば他の道も見えてくるかも知れない。今の時代会社を辞めてどうする？ どこにも行くところなどないぞ」「何も考えていません。とりあえず実家に帰ります」

「ならなおさら考え方がない。この会社に留てもやれることはあるはずだ」

何と優しい言葉だろ。しかし和哉はこれを優しさと取るべきか否

か判断がつかなかつた。というのも、日本企業が人を一人雇うのは莫大なコストがかかる。投資した分の回収も出来ていなければ辞められたら、上司がその責任を負う事は必至である。それゆえ上司の言葉が純粋な優しさか、保身から来るものか、何とも言えないのである。もつとも、今まで散々な目に遭わされてきた和哉である。そう易々と上司の言葉を信用するはずもない。

「では、少し時間をください。考えてみます」

和哉は食い下がる上司を振り払うようにして、会議室を出た。

こうして、和哉にはしばらく考える時間が与えられた。冷静に考えてみれば、結論を急いで良い事は何もない。時間をおいてみるだけで、何か見えてくる事があるかも知れない。和哉にはそう思われた。事実、気持ちを強く持つだけで、和哉には不思議と新しい生き方が見えつつあつた。死を半ば体験した者の強さであろう。

（いいだろう。会社に居続けてやる）

もつとも、ただ居続けるだけでは今までと変わらない。和哉の真意はこうである。

（利用してやる。日本型雇用をな）

一週間後、和哉は上司にこう伝えた。

「自分なりに考えてみましたが、やはりこの会社に居続けても、自分には何の貢献も出来ないとthought。しかし、気持ちとしては、何とかしてお世話になつたこの会社に恩返しをしたいと思つています」

それを聞き、上司はほつとした様子で答えた。

「なるほど、どうか。よし、それじゃあお前に合つた仕事が出来るよ」

「はい、ありがとうございます」

上司も阿呆ではない。和哉の取つて付けたような美辞麗句を額面通り受け取つた訳ではないだろ。それでも快く和哉の気持ちを受け取つたのは、「とにかく辞めてほしくない」という気持ちの表れであろうが、その気持ちが優しさなのか保身なのかは、ついぞはつき

りしない。ただ一つ言える事は、上司がここまで前向きに動いてくれたのは和哉が辞意を表したからであり、そうでなければ「こらえ性のない奴」と一蹴されていた可能性が高い。この点で和哉は日本企業が人を雇用することの高コスト、つまり「辞めさせにくさ」を利用したのである。もつとも和哉の考える「利用」とはこのことではない。

「そうなると、平野自身がどういう仕事がしたいのかによつてその後の処置が変わつてくるが、どういう仕事なら出来そうだ?」

「はい、私にはどうもコミュニケーションの能力が不足しているようで、なるべく人との接触がない仕事であれば、出来ると思います」「そうか、そうなるとうちの部署は営業部だからな。他の部署への異動を考えなければならんが、どこに行つても人とのコミュニケーションというものは必要だ。なかなか難しいな」

「はい、ですが、それが仕事の成果そのものに直結しない仕事が良いと思います」

「うん、わかつた。まあそう言つ仕事ならあるだろ?。関係部署と調整を取りつつ進めるよ。それなりに時間はかかるだろ?が、待つていてくれ」

「はい、よろしくお願ひします」

和哉は礼を言つて、その場を終えた。

(なるほど、これは良い会社に違いない)

和哉は日本企業の懐の深さに感謝すらしていた。

その日から、和哉は殆ど仕事をせず、周りの目を気にする事なく定時で退社し続けた。勿論余り目立つては困るので、文句を言われない程度には仕事をしていたが、それ以上の事は一切しなかつた。成果を求める事なく、ルーチンワークのみをこなしていたのである。夜の付き合いにも顔を出さず、そればかりか自分がやる必要のない仕事は全て断り、出来た時間にはどんどん有給休暇を入れた。
(周りの目を気にする必要はない。どうせ解雇などされないのでから、嫌われたつて痛くも痒くもない)

和哉の考えた「利用」とは、まさにこの事である。この策略の要は、「働かない」というところにある。和哉は出世などとうに諦めていたし、日本企業は解雇規制が強く、よほどの不祥事を起こさなければ解雇されない事も知っていた。つまりは居るだけで良いのである。居るだけで給料が払われ、福利厚生で守られ、社会から後ろ指を指される事もないのである。これほど恵まれた既得権はない。いつか和哉の父親が言っていた、

「居続ける事だけを考えろ」

というのは正にこれだつたのだ。無論父親は自分に害が及ぶ事を恐れて言つたに過ぎないだろうが、結局はこれで良かつたのだ。

（俺は今まで、多くを求めすぎていたのかも知れない）

優秀な社員でありたい、上司や先輩からよく思われたい、自己実現をしたい等、考えてみれば実現が難しく、それでいて生きる事に必要な願望ばかり抱いていた。これらを全て切り捨て、純粹に生きる事だけを考えれば、これほど生きやすい環境もないのである。が、和哉の心境は複雑だった。

（死んだように生きる事は、死ぬよりも良い事なのか）

生きる事に不自由はしない。だがそもそも「生きる事に意味はあるのか？」という疑問符は依然として残されたままであつた。

和哉は以前一度だけ行った精神科に、また通いだした。とりあえず鬱病であれば、薬は飲み続けよう。飲み続ければ、生きる事の意味など考えなくとも済むかも知れない、と考えたのである。

鬱病の治療には、通常保険が適用される。つまりここでも、和哉はサラリーマンである事の恩恵に与っているのである。

（サラリーマンである事は、命を保障されているという事なのだな）言つてみれば、サラリーマンであることを前提に命の保障がされる訳で、そうでなくなつた時には命の保障はないと言う事である。この一点を以てしても、国が国民に対しても如何にサラリーマンになる事を強要しているかが分かる。

（この国では、ほんの一部の成功者以外は、サラリーマンになる以外生きる道はない）
と、和哉は痛感した。

和哉が暫く薬を飲み続けていても、一向に「生きる事に意味はあるのか？」の疑問は払拭されなかつた。変化と言えば、次第に孤独を感じるようになつてきただことである。鬱病が悪化したのか、それとも鬱病が改善して人恋しくなつたのか、その原因は分からなかつたが、ともかく人と話がしたくてしようがないのである。とは言え、会社の人間などと話をする気になれないのは言つまでもない。暫くの間、和哉は行きつけのバーに通い続けた。そこでバー・テンダー偶然隣に座つた客と話す事で、孤独を紛らわした。和哉にはそれくらい距離を置いた関係の方が居心地がいいらしい。馴れ合いになつてお互いの欠点を曝け出す様な関係よりも、むしろ適度に距離を置いて緊張感を保つた関係の方が、お互いの美点を分かり合える様な気がするのである。

思えば、コミュニケーションとはお互いが歩み寄ろうとする意志がなければ成立しない。べつたりとくつついた状態では歩み寄る余

地がないし、逆にどちらか一方にでも歩み寄る意思が欠けていると
これまた成立しないのである。つまり「ミニミニケーション」と呼ばれ
ているものは本来、お互いが適度な距離を保ちつつ信用し合うとい
う、実に難しい条件下でしか成立しないと言つ事だらう。勿論、そ
の上で個人の論理構築力や話題の豊富さが関係していくことは否定
できないが、それ以前に前述の様な条件が必須である以上、ミニミニ
ケーションとは「能力」ではなく、「条件」に依拠するものと言
える。どれだけ論理構築能力の高い、博識の者同士が議論をしても、
立場が違えば話し合いは平行線を辿る。これは歩み寄る条件がない
からである。逆に論理構築能力がさほどでもなく話題に乏しい人間
でも、人を歩み寄らせる条件の揃つた者、例えば地位や名声のある
者、権力を持つ者、学歴の高い者、容姿の優れた者、見た目の怖い
者等はミニミニケーションにおいて有利であると言える。勿論、そ
れも含めて能力なのだと言わればそれまでだが、少なくとも「ミニ
ミニケーション能力」などと言うものが、おおよそ個人の努力で
どうにかなるものではないと言つ事が言えるであろう。全ては条件
の産物なのである。和哉にはその事が経験的に理解できていたため、
営業という仕事にきつぱりと見切りをつけたのである。そういう和
哉がミニミニケーションを求める際に必要な事は、能力を伸ばす事
よりも、それが可能な場所を見つける事であった。バーに行く事は
その一環と言える。そしてその場所が、時に突拍子もないところに
向かう事もあった。

和哉は繁華街を歩いた。キャッチセールスをかわし、向かつた先
はとある雑居ビルである。看板らしい看板も立つていない、何やら
怪しいビルだ。エレベーターに乗り四階まで行くと、そこには蛍光
灯の眩い明かりの下、笑顔で待ち受ける男性従業員の姿があつた。
「いらっしゃいませ。」予約はされていらっしゃいますか？

「いや、してない」

「かしこまりました。今すぐ入れる娘ですと…」

そう言つて従業員が和哉に数枚の写真を見せた。

「こんな感じになりますね」

「じゃ、この娘で」

和哉は気に入った女の写真を指差す。

「かしこまりました。お時間は?」

「六十分で」

「かしこまりました。そうしますと、指名料と合わせて二万一千円になります」

和哉は支払いを済ませた。そして従業員にホテルを案内され、そこへ向かつた。

和哉が訪れたのは、とある風俗店である。恐らく、女を知つてみたいとか、性欲の処理という用並みな動機もあつた事であろう。だがそういう理由の他にも、和哉がこのようなところに足を運んだ理由があった。それは一言で言えば、自信が欲しかつたということである。人並みに女と話をして、何食わぬ顔で肌を合わせて、一人の人間として扱つてもらひ。そんな自分の儘い願いを、嘘でも良いから叶えてみたかった。和哉は思つ。

（情けない話だな）

現実世界で認められなかつた以上、こひういう方法しか自分を慰める手立てが見当たらなかつたのである。和哉は今まで風俗になど来た事がなかつた。そのためここに来るまでに、和哉には相当の勇気が必要であつた。来てみると、自分が犯罪者にでもなつたような罪悪感があつた。だがそういう和哉を踏み切るに至らしめたのは、「自分は一度死んでいる。もう何も怖くない」と自分に言い聞かせた事であつた。こう言い聞かせると、自分には何の躊躇も必要なくなるのである。どれだけ人に嫌われようが、酒に溺れようが、浪費しようが、全く気にならなかつた。その流れで、和哉は風俗店に足を運んだのである。

ホテルに着いて暫く待つていると、ドアをノックする音が聞こえた。和哉が恐る恐るドアを開けると、そこには全身を黒い服で纏つた一人の女性がいた。店で見た写真と少し違う。が、まあまあ美人

と言えなくもない。髪の毛を後ろで一つに結わえており、額がきれいに出ていた。体は少し太めだが、その点は和哉にはあまり気にならなかつた。

「初めまして、いづみと言います」

いづみとは言つまでもなく、この女の源氏名である。

「ああ、初めまして」

和哉は部屋の中にはいづみを通した。

「今日はほんとにいい天氣でしたね」

「そうだね、少し汗ばむくらいだったよ」

「お客様さん、うちの店初めてですか？」

「ああ、初めてだよ」

「でも、こういうお店は初めてじゃないでしょ？」

和哉は一瞬躊躇つたが、正直に言つた。

「いや、初めてだよ。正直緊張してる」

「えへ、ほんとですか？じゃあ今日は初風俗？」

「うん、全くの初めてだよ」

「そつか、じゃあ今は彼女さんはいないんだ？」

「ああ。いないよ。作つた事もない」

「え？今まで一人も？嘘でしょ？」

「ほんとだよ。俺は風俗に来た事もなければ女と付き合つた事もない。おかしいだろ？」

「そんなことないけど。でもそつこつお客様さん珍しいかな。キスは？した事ある？」

「ない」

和哉がそつと、いづみはいたずらっぽい笑みを浮かべて笑つた。

「うふ」

彼女は唇で軽く、和哉にキスをした。和哉の初キスはあつさつと奪われた。

「じゃあ、今日はサービスしてあげるから。よろしくね」

彼女はそう言つと、シャワールームに入つていつた。

(俺は何をしに来たんだっけ?)

和哉は今更ながら疑問に思いながらも、心臓の鼓動が高鳴るのを抑えられなかつた。シャワーを出しつぱなしにして、いずみはシャワールームから出てきた。

「じゃ、服脱いでください」

そう言つと、いずみは自ら服を脱ぎ始めた。和哉もそれに従つて服を脱いだ。和哉が最後の一枚を脱ぎ終えたとき、いずみは既に全裸であり、和哉の目の前には初めて肉眼で見る女の裸があつた。和哉は既に勃起していた。

シャワーで体を洗つているとき、いずみが和哉にこう聞いた。

「ねえ、お兄さんは何か趣味とかないの?」

「今はないな。前は音乐をやつていたけど、今はやつてない」

「そつなんだ、じゃあいつも家で何してるの?」

「そつだな、映画見たりとか、あとはずっと考え方をしてるよ」

「へえ、考え方って、例えばどんな事?」

「うん、人はいつか必ず死ぬのに、生きる事に意味はあるのかな、とかね」

和哉は意表をついたつもりだった。が、いずみは事も無げにこう言った。

「あ、私もそういうこともあるある。生きてる意味なんてほんと分かんないよ」

意表をつかれたのは和哉の方だった。いずみは表情一つ崩していい。

「はい、じゃあ先に上がつて待つてね」

いづみが和哉にバスタオルを手渡したとき、和哉は気付いた。彼女の左手首には、リストカットの傷跡がいくつもあつたのである。和哉はそれ以上何も言えず、シャワールームを出た。タオルを腰に巻き、ベッドに腰掛けて、和哉は考えた。

(彼女の不幸とは何だろ?)

無論、風俗嬢として体を売つて生活している事自体が不幸である事

には相違ない。だが、恐らくそうせざるを得ない理由があるはずである。それこそが彼女の不幸ではないだろうか。と、和哉は彼女の過去に思いを馳せた。借金か？男に貢ぐためか？あるいはそのような月並みな理由の他にも、何か風俗で働く理由があるのだろうか。

「お待たせ」

和哉が考えているところに、いずみが現れた。

「じゃあ、ベッドに横になつてね」

言われるがまま、腰のタオルを外して和哉はベッドに仰向けになつた。そこにいすみの体が覆い被さる。乳首の先が和哉の体にちゃんと触れ、それが広がるよう全身が密着した。柔らかな人肌の温もりが、和哉の心を締め付けた。和哉はいすみの背中に両腕を回し、汗ばんだ掌で抱きしめた。いすみの唇が和哉の唇に触れると、そのままお互いの舌が絡み付いた。ぬるつとした感触が、熱を帯びてほのかに甘い。彼女の舌は徐々に和哉の舌を離れると、和哉の首筋を這い、そのまま乳首、腹、下腹に、つつと滑っていく。和哉はそのくすぐつた様な感覚に、思わず声を上げそうになった。思考は既に真っ白である。その後、すっかり硬くなつた和哉の陰茎の先に、彼女は軽くキスをした。そして彼女の舌先が陰嚢に触れる。冷たく縮こまつた陰嚢の皺が次第にほぐれしていくと、そのまま舌先が裏筋を這い上がつていく。それが頂上までたどり着くと、彼女の唇が徐々に和哉の陰茎をくわえこんでいつた。お互いの粘膜が触れ合う、そのとろける様な感触に加え、彼女の舌が口の奥で亀頭の周囲を舐め回し、つんとした快感が下半身を襲つた。脳髄が痺れる様な快楽の渦に溺れ、和哉は歯を食いしばつて悶絶した。そこから行為を終えるのに、そう時間はかからなかつた。

余つた時間、和哉は添い寝する彼女を腕の中に抱いて、話をした。

「俺さ、実は鬱病なんだ」

突拍子もなく和哉は言った。彼女は驚いたように目を見開いて、腕の中から和哉を見上げた。

「え？ そうなの？ 全く普通に見えるけど

「そうだよ。普通に見えるかも知れないけど、辛いんだよ。生きるのがさ。でも今はそれをちょっとだけ忘れてた」

「ふうん」

少しの間を置いて、いづみが言った。

「私もね、鬱病とは違うけど、統合失調症なんだ。今も薬飲んでるよ」

「統合失調症？」

またしても和哉は意表をつかれた。統合失調症について、聞き覚えはあるが、和哉にはその具体的な症状までは分からなかつた。

「そう。幻聴がひどいの。薬飲んではれば少しは良いんだけど、もう一生治らないんだって」

「なんだ。いつからそうなつたの？」

「一年くらい前かな。私この仕事する前ね、トリマーの仕事してたの。犬の美容師ね。それがね、すごく激務で、朝の五時から夜の十時まで働いてたんだ」

「五時から十時？」

和哉は耳を疑つた。それは労働基準法違反ではないのか。

「そうだよ。休みも月一しかなかつたし。朝の五時から夕方の四時まではトリマーをやって、それから夜の十時まではペットショップの店員をやるの。後ね、先輩のいじめも酷くて、間違つた技術を教えられたりしたんだ。それでも負けたくなかつたからずっと頑張つてたんだけど、そうしたら幻聴が聴こえるようになつてきてね。医者に行つたら、統合失調症だつて言われたの」

「うん、まあ俺の場合は話すと長くなるからな。また今度会つたら思われた。

「それは大変だつたね。俺もまあ似たり寄つたりだけど、そこまで

は酷くないかな」

「そうなの?何があつたの?」

「うん、まあ俺の場合は話すと長くなるからな。また今度会つたら

話すよ

「えー、ずるいよ。私にも聞かせてよ」

「また今度。さ、シャワーを浴びよう。もう時間だ」

そうして和哉の初風俗は終わった。帰り道、別れ際にいづみが和哉にこんな事を聞いた。

「ねえ、私のこと、可哀想な女だと思ってるでしょ？」

少し寂しそうに俯き、そう言つた彼女に、和哉は何と言つたら良いのか分からなかつた。

「そんな事ないよ。頑張れよ」

和哉は自分の言葉が大分無責任に思われたが、他にかける言葉が見つからなかつた。

笑顔のいづみに見送られ、和哉は手を振りつつ、その場を後にした。一人になると、言いようのない孤独感が再び和哉を襲つた。

和哉が部署異動を願い出てから、半年後、異動先の部署が決まった。異動先はシステムエンジニアの部署だつた。要は開発技術職といつ今までとは全く毛色の違う職に就く訳である。和哉にはシステム開発の技術など何も知らなかつたが、そこは異動先でしつかりと教育をするから問題ないと言う。和哉にしてみれば、新たな専門性をゼロから身につける事に多少の不安はあつたものの、「コミュニケーション能力」なるものが直接成果として問われる訳ではないという事への安心感がそれを上回つていた。

（俺の希望は叶えられた訳だ）

それから和哉は担当顧客への挨拶や後任の紹介などの残務をこなして、新天地へ向かつた。

勤務先は東京都内ではあるものの、以前とは違う事務所であつた。新しい事務所は、西武池袋線沿線の東京と言つても埼玉に近いエリアにあつた。以前の事務所は都心にあつたため、寂れた田舎に来てしまつた様な思いが、和哉にはあつた。しかし元々和哉の住んでいれる寮は埼玉にあるため、通勤は以前より格段に楽であつた。通勤してみると、今までの通勤ラッシュが嘘のように快適この上なかつたのである。そのため和哉はすぐにこの職場が気に入つた。

（都心で働くと言う事はそれだけ大変な事なのだ。それなら無理してそこに居続ける必要はない）

和哉の新しい上司は南田と言つて、非常に温厚な正確な人物であった。

「これから平野にうちの部署で働いてもらつにあたつて、うちでしつかりと教育をしていこうと思つていてる。研修や勉強会を用意するつもりでいるから、大いに知識を吸収してくれ」

南田はこう言つてくれた。

「はい、ありがとうございます」

和哉は入社当初の新人研修以外、殆ど教育など受けた事がなかった。OJTの名の下に、放置されてきたのである。そういう和哉にとってこれほどありがたい事はなかった。まずは業務を行う上での、知識不足という心配は和らいだ。

上司の南田もそうだが、システム開発の部署の先輩は皆温厚で優しい人ばかりであった。どうやら営業と開発では携わる人間の人種が違うらしい。コミュニケーションというものは、こうした条件が揃えば大して努力などしなくても円滑に行えるものである。社内のコミュニケーションにおいて、和哉は特に苦労はしなかった。

(こっちの方が俺には合っているみたいだ)

配属された当初から、和哉はそう感じていた。そしてそういう環境で仕事をするうち、和哉の気持ちは次第に変化しつつあった。以前の「働かない」ことで日本型雇用を利用するという策略が、和哉の心から殆ど消えてしまったのである。

(ここでならやつていけそうだ)

人間とは努力が報われる事を確信できて初めて就労意欲を湧かす事が出来る。和哉の心境の変化は、こういった観点から見れば当然の事である。もっとも、和哉が出世など諦めている事は以前と変わりはない。出世や報酬と言った目に見える見返りよりも、仕事をしている充実感や、自分が組織の役に立っているという自負心などといった精神的充足の方が和哉にとっては重要だったのである。それが和哉の考えてきた「生きる意味」足り得るかどうか、和哉には分からなかつたが、少なくともそれに近づく可能性を帯びているものであつた事は確かである。

和哉は猛勉強した。最初はC だのデルファイだのと、聞き慣れない専門用語に面食らつたものの、理屈が分かつてくれれば意外と面白いのである。この仕事はコミュニケーションが必要ない分、一日パソコンにかじりついて作業を続けなければならない。が、和哉はそれあまり苦痛を感じなかつた。和哉は自分が何をやっても駄目な人間と思っていたが、ここでなら少なからず価値を生み出せる様

な気がした。機械音痴と思つていた自分が、である。

(向き不向きなどやつてみない事には分からぬものだ)

和哉はこの職場で暫く頑張つてみよう、と思つようになつた。

*

ある晩の事である。仕事ですっかり遅くなつた和哉は、久しぶりにバーに行つた。特に理由はない。思いつきで、急に酒を飲みたくなつたのである。

バーに着くと、和哉はいつものようにカウンターの席に腰掛け、バーテンダーにアードベックのロックを注文した。店の中央にある水槽には、アロワナがゆつたりと泳いでいた。

「大分お久しぶりですね」

バーテンダーが驚いたように、話しかけてきた。和哉は既に顔なじみである。

「ええ、職場が変わつたもので、ちょっとばたばたしてたんですよ。といつても都内ですから、これからもちょくちょく来ます」

「それはよかつた」

そう言うとバーテンダーは他の客の注文を聞きにいつてしまつた。
(じつしてみると、酒の味が少し変わつたな)

営業部にいた頃、和哉はよくこの店に通つていた。その頃の和哉は自信を喪失し、精神の疲労が甚だしい状態であつた。しかし、その頃の酒の味は心の傷に沁みる様な味がして、人生の妙味を味わうかのごとく深い旨さがあつた。それは一時ではあつたが、和哉を救い続けた味であつたのだ。今はそれほどの深みを感じない。酒は心で飲むものだと言う事を、和哉はこのとき知つたのである。

(俺にはもう、酒が必要なくなつたのかも知れないな)

ふと見ると、薄暗いカウンターの隅で一人、ワイングラスを前にタバコをふかしている女がいた。まぎれもなく、それは風俗嬢のいすみであつた。向こうは和哉に気付いていない。和哉は妙案を思

つき、バー・テンダーを呼んだ。

「ねえ、向こうの女性のお客さんに、何かカクテルを作つてあげてくださいよ。あちらのお客様からです、とか言つ感じで」

「え、今時そんな事するんですか。私もこの商売長いんですけど、未だかつて一度もそんな事ありませんでしたよ」

「いいからいいから」

バー・テンダーは渋々和哉の言つ通りにした。軽やかな手さばきでバー・テンダーがカクテルを作つた。鮮やかなオレンジ色のカクテルである。

「あ、あちらのお客様からです」

カクテルをいすみの前に差し出しながら、強ばつた表情でバー・テンダーが言つた。酷く緊張しているようだ。

（お前が緊張してどうする）

和哉はそう思いつつも、自身も興奮を抑えきれなかつた。いすみが和哉の方を向いた時、和哉は満面の笑みで言つた。

「やあ、ここの間はどうも。奇遇だね、こんなところで会うなんて」いすみははつと気が付いた様な顔をして、さつと顔を伏せた。プライベートで密に会つという事が、やましく思われたのかも知れない。

「良かつたら一緒に飲まない？」

和哉の提案に、いすみは少し迷つた様な顔をしながら首を縦に振つた。

「…うん」

和哉はいすみの隣に座つた。和哉の行動は、いすみにとつては迷惑な行為だつたかも知れない。こうした場合、見て見ぬ振りをしてやり過ごすのが常識、と言えば確かにそうだらう。が、和哉は元来そうした常識に乏しいところがあり、かつそうした常識に縛られる事を嫌う性格であった。偶然会つたのだから、これも何かの縁だらうと、和哉は考えたのである。

「今日は仕事あがりかい？」

「そうだけど」

プライベートのいづみは、和哉が以前会つたときは打つて変わつてクールであつた。それはそうである。和哉は今、客ではないのだ。

「そうか。ここにはよく来るの？」

「まあ、たまにね」

「酒が好きなんだね」

「そうでもないよ。ただ一人でゆつくりしたいだけ」

「そうなの？じゃあまつすぐ家に帰れば良いじゃないか

「怖いのよ。家に帰るのが」

和哉は先日のいづみとの会話を思い出した。統合失調症による幻聴に悩むいづみ。そんないづみにとつて一人の家は恐ろしい場所なのだろう。和哉にはその気持ちが痛いほどによく分かつた。都心に勤めていた頃、和哉も家に帰るのが嫌で、毎日のように繁華街を放浪していた。家に帰ると一層憂鬱になるからである。今でこそ和哉は職場からまつすぐ家に帰る事が多いため、それは職場から家までの途中に寄り道をするような遊び場がないからである。もしそういった場所があれば、今でも寄り道をしていたに違いない。

「そうだよな。気持ち分かるよ」

和哉が言つと、思い出したようにいづみが言いだした。

「そうだ。この間の話の続きをしてよ」

「話の続き？ああ、そう言えば今度会つたら話すつていつたな

「そうだよ。あ、名前聞いても大丈夫？」

「ああ、和哉だ」

「そう。じゃあ和哉の話をしてよ」

和哉は話した。音楽の夢を志して上京し、それに挫折したこと。学問に励もうと決心したが、就職活動によつて断念したこと。就職して営業部に配属されたが、仕事が出来ず、働く意味も分からず、とうとう生きる意味を見失つたこと。鬱病になり、自殺未遂を起こしたこと。それぞれをかいつまんで、かつ赤裸々に語つた。

一通り話を聞き終えると、いづみは新しいタバコに火をつけて言った。

「ふうん。ちゃんとした大学出て、会社に勤めてても大変なんだね。私は高卒だし、仕事って言つてもこんな仕事だから、知らなかつたけどさ」

「閉塞状態から抜け出せないつて言つ意味では似た様なもんだよ。

営業部にいた時は本当に逃げ道がなくつて、八方ふさがりだつた」

「私もトリマーの仕事してたときはそつだつたよ。頑張つて続けたいつて言つ気持ちもあつたけど、それ以上に辞めたらまともな就職先なんてないつて分かつてたから、辞められなかつた」

「そうしてそのうちに病気になつてしまつた。本当にそつくりだな、俺ら」

「ふふ。でも私はドロップアウトしちやつたから。今でもスーツ着て働いてる和哉とは雲泥の差だよ」

「俺は運がよかつただけだよ。一度会社に辞めるつて言つたんだ。そしたら引き止められて、部署異動つていう形で居残る事になつたんだ。お陰で今は順調だよ。だけど辞めてたら今頃どうなつてたか分からぬ」

「そつなんだ。場所が変われば人間も変われるのかもね」

「そつなのだ、と和哉は思つた。

（場所が変われば人間も本来の力を發揮できるのだ。例え「悪」だつたとしても、生きる術はあるのだ。いづみだつて他にできる仕事はあるはずだ。なのになぜこの国はこんなにもチャンスが少ないので？）

いづみが体を売つて生活せざるを得ない理由。それは和哉を自殺に追い込んだものと同根であつた。能力を發揮できる場所に移動する事ができず、浜辺に打ち上げられた鯨の様に身動きが取れないのである。この時から、和哉は考え始めたのである。

（いづみにそういう場所を提供してやりたいものだ）

風俗嬢一人に入れ込み過ぎ、という事は和哉も承知していたが、何せ境遇が自分と似通つていたため、どうしても同情せざるを得なかつたのである。

バーを出て、別れ際に和哉はいづみに聞いた。

「なあ、そういえばまだそつちの名前を聞いてないんだけど。聞いても大丈夫?」

いづみは少し考えて、こう言った。

「うん、また今度会つたら教えるよ」

「そうか」

また今度があるのだろうか。根拠はないが、和哉にはあるよつて思われた。

「じゃ、またな」

いづみに手を振つて和哉は別れた。いづみの背中が見えなくなるまで見送つてから、和哉は踵を返して歩き出した。歩いていると、一人の部屋に帰る寂寥感が湧いてきた。

同じく一人部屋に向かういづみを想像して、和哉は帰宅した。

和哉の鬱病は、すぐに職場に知れ渡った。和哉が自ら申告したのである。実を言つと、和哉が日頃服用している薬は副作用として強い眠気を伴うもので、和哉は仕事中に何度もつとと眠くなつてしまつ事が多かつた。そればかりか、朝どうしても起きる事が出来ない事もあり、度々遅刻をするようになつていたのである。そのため和哉は上司の南田に、自分が鬱病の治療中であり、薬を服用しているために度々そういう形で迷惑をかける事があると、説明せざるを得なかつたのである。和哉は今の職場が好きであり、何も悩みはなかつたが、鬱病とはそうすぐに完治するものではなく、薬の服用を中断する訳にはいかなかつたのである。南田は和哉にこう言つた。

「平野の現状はよく分かつた。うちの部署でも平野が働く様にサポートをしていくつもりだ。何かあつたら何でも相談してくれ」和哉は申し訳なさとありがたさで、始終頭を下げ、うなだれていた。そういう気持ちも手伝つて、以前にも増して和哉は懸命に仕事をした。暫くはバーに行くのもやめ、まっすぐ家に帰り、業務知識習得のための勉強をした。そして夜は出来るだけ早く寝るように心がけ、とにかく職場に迷惑がかかる様にしたのである。

職場の方はそれで特に問題はなかつた。鬱病患者という偏見などは特に受けず、それどころか周囲は和哉の負担が大きくならない様にと気を遣つてくれたため、仕事がしやすかつた。ただ、それでも時折いすみの事が気にかかつた。

（いすみは今どうしているだろ？）

人の心配などをしている場合ではない事はよく分かつてゐたが、それでも放つておけないほどに、和哉の心にはいすみの事が強く刻み込まれていたのである。と言つても恋に落ちたのとは違う（と和哉は思つてゐる）。自分が苦しんだ分だけ、同じ要因で苦しんでいる

人を救いたいという気持ちが強かつたのである。おせつかいかも知れない。だがあのリストカットの傷をあれ以上増やしてはいけないと和哉は思った。

（俺に何が出来るだらう）

それを考えつつ、時間は過ぎていった。結局何も答えが出ないまま和哉が久しぶりにバーを訪れたのは、いよいよ会つてから二ヶ月が過ぎたある休日の事である。

*

バーに着くと、和哉はいつものバーテンダーに聞いた。

「この間僕がドリンクを渡した女性がいたでしょう。彼女あれから来店してませんか？」

バーテンダーはグラスを拭きながら答えた。

「ああ、たまにいらっしゃいますよ。かなり不定期ですけど。それはそうと、ドリンク渡したのは僕じゃないですか？」

「毎週何曜日の何時頃に来るとか、そういうのはないですか？」

「いや、特に曜日は決まってないんですけどね。時間帯はかなり遅くに来ますね」

「そうですか」

その日、和哉は終電間際まで店に居座ったが、結局いよいよは来なかつた。

その日から、和哉は出来る限り足繁くバーに通つた。といつても病状が悪化すると困るので、その日の体調が良い日に限られていたが、それでも幾度もバーに行き、その度いよいよが姿を現さない事に落胆して帰宅するという日々が続いた。

（もう一度風俗に行つていよいよを指名しようか）

という考えがふと和哉の脳裏を過つたが、それは和哉の本意ではなかった。客としてではなく、一個人として、対等な立場で話をしたかったのである。加えてバーテンダーが会つたびに、

「あ、昨日いらっしゃいましたよ、彼女」

などと言つものだから、もうすぐ会えるのではないかといつ予感がして、「今日こそは」と期待してしまつのである。しかし和哉のいる間、いずみは一度も店に訪れなかつた。

(どうもタイミングが合わないみたいだな)

和哉は自分の運のなさを呪つた。

事態が好転したのは、ある金曜日の事である。和哉はいつもの様にバーを訪れ、いずみが来るのを待つた。その日和哉は覚悟を決めていた。

(明日は仕事も休みだし、終電を気にせずに閉店までこる事にしよ)

（う）
そう腹を括つて、和哉は飲み続けた。周りの客が段々といなくなり、店内に流れるジャズがはつきりと聴こえるほどに、辺りは静かになつていつた。

和哉がウイスキーを呷り続けて酔いつぶれ、カウンターに顔を伏せて眠つていた午前一時頃の事である。横から聞き覚えのある声が聞こえる。

「あー、あつと仕事終わつたよ。田中君、いつものちょうどだい」

和哉は一気に目覚め、声のする方を虚ろな目で注視した。見ると派手なファッショソンで身を包んだいづみがいた。

「あ！」

「あ」

お互に顔を見合わせて、暫く沈黙した。

「おや、やつと会えましたね。平野さん」

バー・テンドラーが余計な一言を発した。

(どこまでも気の利かないバー・テンドラ)

和哉は思いながらも、飛び上がりたい衝動を抑えて、落ち着いた表情で第一声を発した。

「やあ、久しぶりだね」

和哉は出来るだけ平静を装つた。

「ああ、じつも」

素つ氣なく答えるいづみに、和哉は少しだけ時間の隔たりを感じた。

「今日も仕事上がり?」

「じつだよ。和哉も?」

いづみは名前を覚えてくれていた。和哉は安堵した表情で答えた。

「うん、仕事上がりだよ」

「それにしても今日は遅くまでいるのね」

「おお、明日は休日だからな。今田は」といふ飲み明かそうと思つてさ

「えー? 一人で?」

「そう、一人で」

「それはそれは。じゃあ邪魔しちゃ悪いわね」

いづみは例のいたずらっぽい笑みを浮かべて、和哉から離れていく
うとする。いづみの八重歯が口元からのぞくと、和哉も自然に笑顔
になる。

「いや、出来れば一人がいいな。一緒に飲んでくれ」

「そんな事言つて、あんたこれ以上飲んだらヤバいつて顔してると
和哉の顔は既に真つ赤であり、殆ど呂律も回つていない。

「そつか。じゃあ一緒に外に行こう。どこか他のところに場所を移
そう」

「何言つてんのよ。私今来たばかりだから」

「そつか。じゃあ飲み終わるまで待つてる」

和哉はそう言つと、ラフロイグのロックを頼んだ。

「そういえば、いづみちゃんの名前を聞いてなかつたな」

和哉は思い出した様に言つ。が、無論これが一番聞いたかつた事で
ある。

「ああ、じついや言つてなかつたね」

そつ言つと、いづみは和哉の方に向き直り、恭しくお辞儀をしながら
言つた。

「私、かおるひて言います。よろしくお願ひします」

「へえ、かかるちゃんか。良い名前じゃないか」

「え、どこが？私自分の名前嫌いなんだよね。ださいし、女か男か分かんないし」

「はは、まあでも俺は好きだな」

「意味分かんない」

そう言うと、かおるはタバコに火を付けた。

「でもさ、客に名前教えたのなんて初めてだよ。大体さ、客にプライベートで遭遇するところからして初めてなんだよね。驚いちゃつたよ。しかも一度までも遭遇するとはね。っていうかあんた、もしかして今日私の事待つてた？」

かおるは自分で話しているうちにようやく事の真相に気付いた。が、和哉はその時、既に座つたまま眠っていた。

（こいつ本気なの？）

かおるは自分が予想以上に気に入られている事に、複雑な思いを抱いた。かおるがタバコの煙をくゆらせる中、和哉のグラスの氷が、時折カラーンと澄明な音をたてる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8279x/>

或る「悪人」の幸福

2011年11月30日19時47分発行